

岳 山

年 一 十 二 第

號 一 第

山 岳

第二十二年第一號 昭和二年三月發行

目 次

劔岳新登路と八ッ峯
野川を遡りて大朝日岳へ
開 聞 岳

渡 邊 漸 . . . 一頁
吉 澤 一 郎 . . . 二八
竹 内 亮 . . . 三九

圖 版

○劔澤から見た八ッ峯○劔澤の小澤から見た劔岳 對頁
○池ノ平から見た八ッ峯 二四
○野川キリタチ澤の小屋○五本檜の前方峯に登る途中から袖朝日及ヨコフツケノ澤を望む 三六
○北海道鴛泊ベシ岬から見た利尻山○利尻島ベシ岬から鴛泊港を下瞰す 四八
○利尻島鴛泊から見た利尻山及ボン山○禮文島深浦沖から見た利尻山 六四

○禮文島桃岩北面と西海岸の一部	七二
○レブンウスユキサウ○禮文島二並山の南面	七八

(以下スケッチ)

○劔澤小屋より見たる源治郎尾根第一峯	四
○源治郎尾根第一峯より見たる第二峯	一二
○別山尾根より見たる源治郎尾根	一六
○八ツ峯概念圖	二〇

雜 錄

○本邦に於ける雪崩の方言(大島齊吉)○利尻禮文島見聞雜錄(岡田喜一)○南九州の旅(竹内亮)○大正十五年十月ばかり
觀風旅行しけるときによめる(田口虎之助)○鳥首峠と武甲山の間に就て(吉澤一郎)

雜 報

○ガイッサー探検隊の成功
○會員通信

會 報

○第十九回大會記事○第三十四回小集會記事○會費値上に就て○新入會員紹介○會員章再交附○會員の訃報○會務報告
○交換及寄贈圖書目○本會規則披萃○投稿規定

自一〇五
至一一〇

自一九八
至二〇四

自五一
至九七

劍岳新登路と八ツ峯

渡 邊 漸

劍岳從來の登路に就ては今更云々する程の事も無いと思ふが、纏つたものとして「山岳」に現はれたのは十年二號の附録として出た登山地圖第一輯「劍岳」位のものであるし、殊にそれから十年も経過して居るのであるから、此の機會に、極く大體を纏め、併せてその登攀史とでも言ふものをほんの概略記すのも無益では無いだらう。

「山岳」に劍の事の初めて出て居るのは一年三號であつて「日本アルプスと其の登路に就きて」の文中、高頭氏は「標高は約二千九百米だらう。未だ登つた者は無く、前年測量部員が半途より斷念して下山したと言ふ事を聞いて居る。伊折方面から登れるかも知れぬ。」と言ふ意味を、これに次いで二年二號に大平氏が立山より見た劍に就いて「別山の西北一大深刻の雪溪を隔つる一里強、標高雄山を凌ぐ。」と書いて居られる。

此の時代の劍岳と言ふものは誰も登て居ない、誰も登れないと言ふ觀念の許に、深い神秘に包まれて居たに違ひない。

三年三號の「越中劍岳先登記」なる記事に、柴崎芳太郎氏一行が四十年七月十二日(測夫生田外四名)及び同十三日(柴崎氏、測夫木山外二名)の兩日に「長次郎澤」から登攀、頂上で錫杖、鎗の穂等を發見した事が、掲げられて居る(錫杖等の圖あり)。此の文と並んで「劍ヶ峯の最初登山者」として柴崎氏より以前に三十九年九月に芦峠の佐伯某と志村徳助なる者が大日を経て、毛勝谷の東北面より二日を費やして登つたと言ふ記事がある。今年の春、自分が芦峠の人夫達に聞いて見た處、佐伯某と言

ふのは三川仁助と言ふ者で、同人は他より來り、後、佐伯姓となりたる由、恐らく中途までしか行かぬだらうとの事である。又、毛勝谷と言ふのは、昨年の夏伊折の入夫に聞いた處では、劔岳の西南に當り、五萬分一の圖には水が入つてゐる澤である。

此等から察して彼等は劔の頂上の西北、二六〇〇米の突起邊りまで達したらしう思はれる。

尙、志鷹徳助なる者が測量部員より以前に長次郎澤から劔に登つたと言ふ事を同じ芦峯の入夫達から聞いたが、これは前記の志村徳助の事らしく思へる。序であるが佐伯行貞（佐伯宗作の兄）なる者も測量部登攀以前、屢々劔に登つたさうである。

柴崎氏が佐伯某に立山温泉で會つて訊したが、彼は劔頂上の知識なく、錫杖も發見せず、且つ大日より登攀不可能の三つの理由で、彼は登つて居ないと斷じた記事は四年二號の「越中劔岳先登者に就て」にある。

柴崎氏に次いで吉田孫四郎氏、石崎光瑤氏、野村義重氏が宇治長次郎外二名を案内として長次郎澤より四十三年七月二十四日に登攀し、その紀行は五年一號に「越中劔岳」として吉田氏が書いて居れるが、測量部員を案内したのは長次郎であると言ふ事は此の記事で初めて明かになつて居る。そして長次郎澤なる名稱は此の時初めて與へられたのである。

尙、吉田氏は此の紀行の最後に「柴崎測量員登山の眞偽」として、三角點建設の事に従つた宮本金作の言に依れば柴崎氏は前後二回とも登らぬとの事、三角點の様子が柴崎氏の話と異なる事を擧げて氏の登攀に疑を挟んで居る。これに對する柴崎氏の辯明は六年一號の雜錄に出て居るが、氏自身は第二回目に登つて、四等三角點を建てたと言つて居られる。

六年二號の雜錄に、大體柴崎氏の論を採るとし、佐伯某に就きては少くも一支峰位には至つたのだらうと記してある。

先づ柴崎氏一行の登攀を最初と見るが穩當であらう。然かし純粹の登山と云ふ意味に於ては吉田、石崎、野村の三氏を以て第一と認むべきであらう。

これから其の登路を分つて、一々それに就て書いて見よう。

一 別 山 尾 根

本當は別山への尾根續きと言ふべきであるが、現在、此の名稱の下に呼ばれて居る。

此の尾根を通つた最初は近藤茂吉氏で、氏は大正二年七月二十五日、長次郎、平藏他一名を伴つて長次郎澤より劔に登り、平藏と二人で此の尾根を別山乗越へと降られたのである。氏は八年二號の會員登山報中に大した困難は無かつたと言つて居られる。

又、是非書き加へて置き度い事は、長次郎と他一名の人夫は此の時初めて平藏澤を降つたのであつた。

此れに次いで、八月十一日に、木暮、田部、中村の三氏が長次郎を伴つて此の尾根より劔へと往復された。此れが此の尾根を登つた最初であつて、田部氏の「槍ヶ岳より日本海まで」の中に書いてある。

此の登路は當時は非常に困難であるとされ、例の登山地圖中には「劔岳登路中最も危険にして細心の注意を要す、墜石の爲め同伴者を傷くる憂あり。」としてあるが、現在に於ては落ちるだけの石は除かれて仕舞つたので墜石に依る危険は殆ど無く、特に惡場と言うものも無いので、比較的容易である。然し何と言つても矢張、岩石が脆ろく、堆積が多いので、飽き／＼すると言はふか、面倒くさいと言はふか、兎に角、愉快に登れるとは言へない。

尙、此の登路に就いて一言附加へ度い事は、劔の積雪期に於ける登路は室堂を根據地とする關係及び雪崩の危険を避ける關係から言つて殆ど此に限られて居る事である。

積雪期登攀の第一回は、大正十一年四月四日に、慶應山岳部の三田幸夫氏他四名が光次郎を伴つて室堂から此の尾根を登つて、頂上に達し長次郎澤を降り、前後十五時間を要して成功されたのが最初で、以後毎年、冬期の登攀が繰返へされて居るが、少くも登路だけは此の尾根に限られて居る。そして最近、久しく問題であつた一月の劍登攀が慶應の青木氏等に依つて成就されたが、往復とも矢張、此の登路に依られたとの事である。

二 平 藏 澤

此の登路は、已でに前に述べたが如く、長次郎が降つたのが最初であるが登つた最初は誰であるかは可成調べて見たが不明である。

長次郎が初めて降つたにも拘はらず、平藏の名を冠するのは、近藤茂吉氏が平藏の名譽の爲めに命名されたからである。

然し登山家では大正四年七月二十二日に冠松次郎氏が平藏を伴つて降られたのが最初である。(一〇年二號、「劍ヶ岳登山記」)

此の澤に依る登攀の盛んになつたのは大正七年頃からであつて、當時は劍は殆ど大町が唯一の出発點になつて居て、「大町―針木―平―五色―立山―劍」と言ふコースが非常に流行したのであつた。自分の知つてゐる範圍内では大正六年七月二十七日に大町から入つた慶應の二木末雄氏の一行が平藏澤から登つた最初である。他の登路とは異つて、誰が初めたとも無く、續々と登り初めたのであるから面白い。距離から言ふても他の登路よりも短かいので、恐らく最も時間の掛らぬ登路であらうと思ふ。

三 長 次 郎 澤



峯一第根尾郎治源ルタ見リヨ屋小沢劔

此の登路は前述した様に最も早くから知られて居るものであつて、測量部員も石崎氏も此れを往復して居られるのであるから興味深く感ずる。そしてそれから後も、可成長い間、登路は此の澤にのみ限ざられて居たので、文献は可成豊富である。初期の登攀の一二を擧げて見よう。大正二年には八月九日に榎谷徹藏氏が大町の又吉を伴ひ此の澤から劔へと上下された。此の前年に中村、三枝の兩氏が劔を試みんとして、ロープまで用意されて、兵三郎を伴つて大町から入られたが、兵三郎が恐れをなして、別山から引返へされたとの事だ。

大正三年には百瀬慎太郎氏他二名が大町より又吉を案内として室堂に至り、音澤村の佐々木助七を案内として小黒部方面より來れる大木操氏一行と會して、七月二十九日に此の登路を往復されたが、當時、大町方面では劔の案内者は又吉だけだつたさうだ。尙、百瀬氏は其の時、頂上の岩小屋の中に中村清太郎氏が四邊の山々を書かれたスケッチを發見されたさうであるがこれは同氏が大正二年に別山尾根から登られた際に描かれたものに相違あるまい。大正四年には、七月二十二日に冠氏が登られ、三十日に木暮、田部の兩氏が降つて居られる。尙、慶應の内田節二、横有恒の二氏が大町の直吉を連れて七月の末に登つて居られる。が恐らく長次郎澤を登つたのだらうと思はれる。

長次郎澤は傾斜も平藏澤に比較して緩く、幅も廣く、雪を離れてからも惡場が無いので、登路としては矢張一番安全であり、容易である事は昔と變らない。

四 三 窓

(一) 劔澤方面より

三窓の雪溪から、三窓まで登つた最初は大木操氏の一行である。同氏は大正三年の七月二十四日佐々木助七を案内として鐘釣より、小黒部を遡り、廿五日三窓の雪溪から劔へ登らうと試み、三窓まで

登つたけれども、濃霧の爲め止むを得ず引返へし、前述の如く百瀬慎太郎氏の一行と合して長次郎澤から劍に登つたのであつた。

翌大正四年の七月三十日に木暮、田部の兩氏は三窓雪溪を登り、三窓、三窓の頭を経て劍の頂上に達した。これが此の方面からの最初である。(一一年二號「黒部川奥の山旅」)

此の登路は其の後通つた話を聞かない。

(二) 池ノ谷方面より

劍岳と言ふ山は北、大窓、小窓から、南、別山に續く尾根を境界として、東側、即ち、黒部側は岩質が堅固であり、西側、即ち、早月側は岩が非常に脆弱である。此の差異は尾根を歩いて居る際に、明瞭過ぎる程に示される事實である。それ故、早月川方面は墜石が間斷なく落ちるので、後述の早月尾根以外は到底、不可能であり、且つ、これを試みた所で無謀の舉であるとして、池ノ谷を試みた者はまだ無かつた、然し、さうは言ふものゝ矢張未練は誰にもあつた。處が此の四月、芦峠の人夫に質した所、大正十三年の夏富山の石黒氏が八郎、兵次の二人を案内として、池ノ谷を降られたさうで、それには可成の困難を伴つたとの事だ。恐らく此のコースは當分、通る者は無いだらう。

五 小 窓

(一) 劍澤方面より

小窓の雪溪を登つて小窓から、その頭に達した最初の人吉澤庄作氏で、此の記録は九年一號に詳しい。これは大正二年八月の事で、氏は例の音澤村の助七を案内として登られたのであるが、小窓の頭を劍の頂上と誤認されたので、頭に達して初めて其の向ふにもう一つの突起があり、更に三窓を隔て、三窓の頭が見えて居るのに、驚かれたらしい。氏の紀行には小窓の頭、三窓の頭、等の名稱が無

いので、果して何處まで登られたか、前面にある峰は何を指すのかは適確に知るを得ないが、恐らく、二六一七米の獨立標高點まで達せられたのであらうと推察する。これから三窓の間までは相當悪いのであるから、當時としてはこれより先に行くには無理だつたらうと思へる。で、氏は引返へして劍澤に登り立山に出られたが、それ以後、小黒部から入つたにしても此の途を探つたと言ふ話は餘り聞かない。前日池ノ平に泊つたとすると、此の登路を取つて劍に登るのは一日の仕事としては可成、骨であり、若し劍澤岩屋に露營したとすると、小窓の方を廻るのは後戻りする様になり、何れにしても面倒であるからだと考へられる。

(二) 白萩川方面より

伊折の方から劍に登るのは現在では殆ど此の道、即ち白萩川を廻り、三つに分れた雪溪の右を取つて小窓に至るものに限られて居る様である。以前、小黒部鑛山に人が入つて居た時分には大窓の方には相當、人の往來があつた様だが、今日では大窓の方に登る人は殆ど無い。此の雪溪も矢張、墜石が多いらしいが池ノ谷に比れば遙かに安全であるらしい。

此の雪溪を小窓から初めて降られたのは、木暮、田部の兩氏が大正四年の夏、長次郎を連れて、赤谷山の方から縦走して來られた時で、小窓の稍々下、西北から此の雪溪に降りられ、大窓から來る雪溪との出合の稍々上で、尾根を越して大窓の方の雪溪に出られたのであるが、(大正四年七月二十九日)小窓から降つて伊折に出て、完全に此の途を通つた最初は竹内鳳次郎氏で、大正九年の七月三十一日の事である。

此を登つて劍の方に出る登山者の組は此の二三年は相當多くなつたけれども、何時頃から登り出したかは自分は知らない。従て、誰が最初に登つたかも分らない。が兎に角、早月尾根に登る者の無い今日、伊折方面からの登路は當分之のめと言つて宜からう。

六 大 窓

(一) 小黒部方面より

小黒部の谷から大窓の雪溪を登つて、窓まで達した最初は山に登る人では恐らく中村清太郎氏ならんとのことである。氏は大正四年の八月の十日過ぎから十日間ばかり池ノ平より来る澤と大窓より来る澤との出合の小屋場に滞在して居られた事を十二年一號に書かれて居るから多分、此の十日の間に登られたらしく思へる。

これに次いで五年八月末に竹下英一氏が池ノ平から小黒部鑛山に出て、伊折谷に下つた旨を記して居られるので、これも恐らく大窓を越したものと考へられるが、此れは鑛山より山腹を絡んで大窓に出たらしく思へる。

降つた最初は木暮、田部兩氏であつて、それも山を絡んで鑛山の方に出て居られる。

小黒部鑛山の閉鎖された今日、此の登路を探る者も無く、況んや進んで尾根を南に縦走しようとする者も無い。然し齋藤新一郎氏は劔頂上から逆に縦走して、大窓を降り鑛山に出て居られるが便宜上、後で述べる。

(二) 白萩川方面より

伊折からバンバ島を過ぎ、ブナグラを経て大窓に出で、それより鑛山に達する行程は鑛山で仕事をして居た頃には、工夫や人夫の往來も相當激しくて、立派な道であつたが、やがて、その鑛山への往復も小窓の方を通る様になり、續いて事業を止めにして仕舞つてからは、誰も通らない様になつた。

登山者では大正四年の八月二十四日にブナグラから大窓を越して鑛山に至られた吉澤庄作氏が最初であらう。然し、此れより約一ヶ月前の七月二十九日に木暮、田部の兩氏が前述の小窓裏の雪溪を降



劍澤 かけらに見たハツ峰



劍澤の 小澤 かけら見た 劍岳
別宮貞俊氏撮影

つて、それとの合流點から此の雪溪を登つて、鑛山を経て劔澤の岩小屋まで達して居られるのであるから、狭い意味では兩氏を先きと考へる事も出来る。

(三) 赤元、白元より

この方面は、大正四年七月、木暮、田部兩氏の試みられただけで、然かも兩氏は大窓より劔へ尾根傳ひに一日で往復せんとして、果さず、大窓の頭近くまで達して右に支脈に轉じ、小窓裏の雪溪から大窓裏の雪溪を経、再び大窓に戻つて、池ノ平から劔澤岩屋に達せられたのは前述の通りである。

七 大窓に續く尾根

劔の頂上から尾根續きに大窓までは地圖の上では別山乗越から頂上までの距離と大差は無く、稍々起伏が多いと言ふだけに過ぎ無いので、吉澤氏が小窓の頭を頂上と誤つたり、木暮、田部兩氏が大窓から一日で往復しようと思つたりしたものであつたが、そう言ふ事があつたので仲々簡單には通れない事が明瞭になつて來た。惡場と言ふのは小窓の頭の降りと偃松に苦しめられる大窓の頭附近とである。

劔の頂上から、大窓までの縦走を初めて完行したのは當時、慶應山岳部で活躍されて居た故齋藤新一郎氏であつて、月日は不明であるが大正六年の事である。案内は大町の黒岩直吉と芦峠の佐伯政吉とであつて、何故、越中と信州の入夫を一人づつ用ひたかと言へば、氏は大町より山に入る事多く、直吉をよく知れるも、地理に詳しく越中の入夫を之に加へれば、充分、成功する可能性があると云ふ點からであつたらうとの事である。

齋藤氏の記録は慶應の登高行第一年に「劔ヶ岳尾根縦走記録（大正六年度）」として載つて居るが、第六日は別山尾根より頂上を経て三窓に至りて野營をなし、第七日に小窓の頭、小窓、大窓の頭、大

窓を経て、池ノ平に達して居るが、其の一節に「此行程中小窓附近は尤も危険且つ興味あり又研究を要す、通路未だ確かならず、……小窓に出でたる時は此の縦走の大半を終了せしものと見て差支へなし。……註、三窓大窓間は本隊によつて始めて足跡を印せられたる前人未踏の地なり。」とある。翌七年にも同氏は直吉を伴れて、劔より同じ行程を大窓まで縦走して居られるが、同氏はよく地形を覺える爲、前年行かれたる處に、再び行くを常とされた由である。

此の年の七月二十五日には同じ慶應の富永太郎氏外二名が小窓まで縦走され、小黒部の方に出て居るが、案内は靜馬で、他に四高生一名が平藏と共に一行について來た旨が記してある。翌八年には同じく小窓までを早川、三田諸氏が行つて居られる。此の行程は齋藤氏以來、慶應山岳部の人達に依て繰返へされて居るが、未だ、逆に大窓より頂上乃至は三窓の頭まで至つたと言ふ記録は見た事が無く、又、頂上より大窓までも齋藤氏以後これを行つた者があるかどうかは、寡聞にして未だ耳にしない。

八 早 月 尾 根

この名稱は一般に通用するかどうか分らないが、劔より西北に、白萩川と立山川との間に延びてバシバシ島に終るものを言ふのである。

此の尾根は大正六年の七月に冠松次郎氏飯塚篤之助氏が芦峯の軍造、兼次郎等を伴つて、尾根に三泊されて遂に頂上を極められたものであつて、劔の頂上より之を眺めても別段、惡場も無く、只、頂上に近い部分が稍々困難らしいだけであるが、何分、距離から言つても思ひ切つて長く、從て尾根で少くとも二泊はせねばならぬ。

然し、此の尾根が初めて登られてから十年近く経過したにも拘はらず、其後、誰も此の登路を顧みないで、他の登路にのみ依る者の多いのは遺憾な事である。

以上は從來の登路に就て極く概略を記したものであるが、既に知られた事のみを記し、肝心の事に就いての説明を悉く洩して仕舞つた觀があり、顧みて、甚だ恥しい次第である。

劍岳新登路——源治郎尾根

これから本題に入るが、以下は大正十四年七月上旬、今西錦司君と共に、試みた源治郎尾根登攀の記録である。

此の源治郎尾根と稱するものは劍の頂上より直接に、東南に劍澤に向けて派出せる尾根であつて、平藏澤と長次郎澤との間に位するものである。その源治郎尾根と稱する所以は、大正十三年七月別山平に新設された登山小屋の建設に従事した大工源治郎なる者の名前を取つたからである。源治郎は、或日、單獨劍に登らんとして、路を平藏澤に取つたが、雪溪半ばにして、道を間違へ、誤て右に登つた爲遂に此の尾根の上半に出て頂上に達したのであつた。尤も源治郎が間違へたのは無理のない話で、平藏澤をその儘登り切つて、平藏澤の頭に達し、それから直角に右に折れて、脆弱な岩の上を登つて行くのよりも、右手に取つてずん／＼登り詰めて仕舞ふ方が、見た所素人眼には距離から言つても時間から言つても近かさうであり、殊に同伴者も無かつたので、恐らく、その方を本當の登路と信じて登つたのであつたらしい。

それ以後、芦峠の人夫中、一部の者の間に、此の尾根が源治郎尾根と呼ばれる様になつたのである。但し此の名稱は一般に認められたものでも無く、殊に以下に述べる様な理由もあるので、假にかう名付けて置くまで、何か適當な名稱があれば、それを取り度いと思ふ。

平藏澤から登つて行くと、知ら無い者はどうも右に取り度い氣がするものと見え、十一年一號の雜錄「劍岳に就て（伊藤徳之助）」の中に、大正四年七月二十八日に富山師範一行十八名が平藏谷を登り

しも、頂上に至らざりし疑問が述べてあるが、その文面より察するに此れは確かに右に取り過ぎ、枝尾根の一角に達したらしく思へる。

又、源治郎が登つた道程は、決して彼が初めてでは無くて、既に大正四年七月二十二日、冠氏が初めて平藏澤を降られた時に此の逆の行程を取つて居られる。

此の途は尾根に出るまでは傾斜が急であり、相當困難であるが、尾根に出てからは大した事は無く、其の長さも、尾根全體の三分の一にも足りない位であるから、此れを尾根全體に及ぼして源治郎尾根と稱するのは妥當を缺く様な氣もする。

此の尾根に對して、吾々は七月六日と七月九日の兩日、登攀を行つたが、六日は平藏澤より、略々源治郎の取つた途に相當して登り、九日には劍澤より、尾根に沿うて登攀し、遂に頂上に達して此の新登路を完成した。

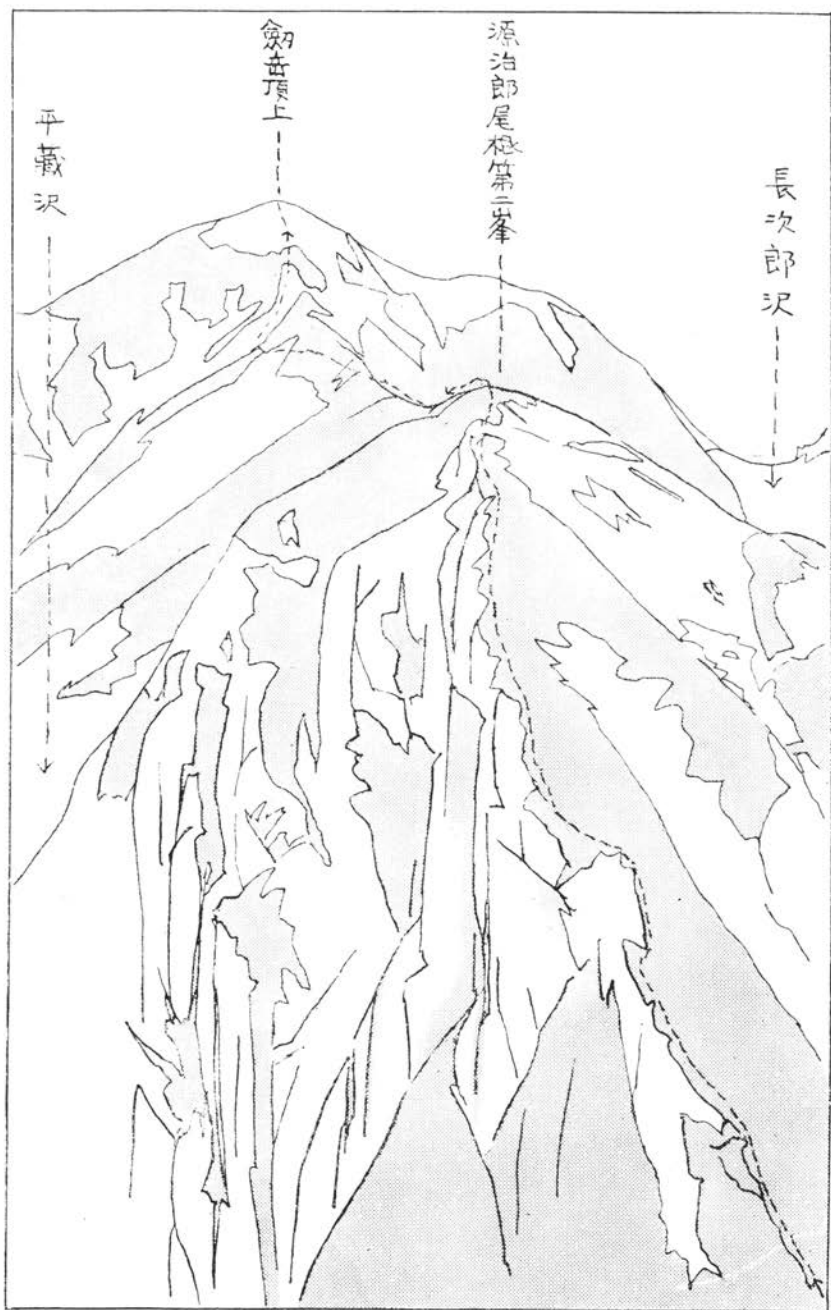
七月六日の登攀。快晴微風。

平藏澤——源治郎尾根後半——頂上——長次郎澤

今日は源治郎尾根の偵察傍々平藏澤から尾根に出て見ようと言ふので、ゆつくり出掛ける事にする。昨日は夕方になつても霧が霽れないので、心配したが今朝は何と言ふいゝ天氣だらう。別山乗越の方から黒い影が降りて来る。劍の頂上に持て行く御宮を背負つた福松と大林區署の人とで、小屋に一寸休んで、ずん／＼雪溪を降りて行つた。

其の後を追つて、一昨日の晩、夜中の一時頃に着いて、小屋の中に一杯に積つた雪の上に寝、昨日はその雪を半分掘出した、此の別山平の小屋を八時二十分に出發して、四尺五寸の夏スキーで二人は平藏澤の入口まで滑つて行く。

それからスキーを背にして、平藏澤を登り初めたが、上の方に見える大林區署の一行には仲々追ひ



源治郎尾根第一峯ヨリ見ル峯＝峯

付けない。可成登つて、平藏澤の頭も近く見える様になつてから、右手に細い急峻な雪溪が源治郎尾根からずつと續いて來て居るのを見たので、それを登る事にして、靴で足場を作りながら一步步尾根に近付いて行くが、案外に時間を要して尾根に出たのは十時二十五分だつた。此の雪溪の左には尾根から分れた狭い支脈が略々雪溪と平行に走つて居るが、可成下の方で、此の岩角に取付いて仕舞つてもいいらしい。雪量が減じて來たら却て此の岩の方が安全かも知れない。が何れにしても大差はない。尾根に出た所から少し尾根に沿うて降ると、岩が三つばかり雪面から出て居る。此の岩の上に暫らく休んで尾根の下の方にある二つの大きな峯を觀察する。下の方のはよく見えないが手前の峯の降り口が可成、手剛いらしいのがよく見えて居る。十一時出發して稍々平藏澤側を絡みつゝ、雪を選んで進む。暫らく行つて再び尾根筋に出て、頂上から延びて來て、ドームの様になつた雪（例年は此の邊は雪は無く、岩ばかりであるが、此年は馬鹿に雪量が多かつたので、此の日などは小屋を出てから殆ど岩を踏まず雪の上ばかりを行つて頂上に達する事が出來た）の相當急な傾斜を足で蹴りつゝ、ステップを作つて、遂に頂上に出た。（十一時三十分）。

尾根に登りながら長次郎谷の方を覗くと、此の尾根の直ぐ下から八峯まで思ひ切り擴がつた雪溪が白く輝いて、處々にクレヴァスが出來て居る様は一寸他には見られない眺めである。それでも頂上近くになつてからは傾斜が急になつたので、餘り他方に眼を向ける餘裕も無かつた。

頂上に着いて、さて長次郎谷を見降ろすと、黒い點が徐々に降つて行くのが見えた。自分達も案外手間とらなかつたのであるが、矢張、普通の登路の方が早いらしく思はれた。

今日は北の方や後立山の方ははっきり見えて南の方は餘りよく見え無いが、彌陀ヶ原邊りは素晴しい雪量で、弘法茶屋の近くまで雪が續いて居る。風が吹くか吹かぬ位なので、頂上に居てもものんびりした氣持になる。雪の上を長次郎谷の頭の方へと降つて行く。暫らくすると雪は斷れて、稍々あつて

雪溪の上端に出た。若し此の部分さへ雪があれば今日の行程は岩を踏まずに雪の上ばかりを小舎まで歸れる所だつた。

長次郎谷の頭で晝食を済まして、それからスキを穿いて降りる事にした。初めの傾斜の急な所はゆつくり降りる。それから早く降りようと思へば可成短時間で降りられるのであるが、素敵に雪量の多い此の長次郎谷の眺めを捨置いて降つて仕舞ふには忍びなかつたので、熊の岩附近で可成長い事休んで、四邊の眺めに飽かぬ喜びを味はつた。

それから下まではぐんぐん降つたが、下に來るに連れて雪面に凸凹が多く、スキには適しない様になつた。時期が遅れてはどうか知らないけれども少くも、七月上旬の長次郎澤は快い滑降の味はへる雪溪である。

記 録

午前八・二〇、劍小屋發。八・三五—四〇、平藏澤出合。一〇・三〇、源治郎尾根に出づ、(J點)。一〇・五〇—一一・〇〇、三つ並んだ岩、(H點)。一一・三〇—午後一二・二〇、頂上。一二・四五—一・一五、長次郎澤の頭。二・〇〇—熊の岩。二・三五—二・五〇、長次郎澤出合。三・三五—小屋歸着。

七月九日の登攀。快晴微風。

劍澤——源治郎尾根——頂上——別山尾根

七日、八日と暴れたので今日は果して晴れるだらうかと昨夜來氣になつてよく眠れなかつた。起きて見ると劍の頂や別山尾根の方はまだ雲に包まれて居たが、八峯の方ははっきりと見えて來て、今日の天氣はどうやらいゝらしく思へた。それで伊折で買つて來たひね米は食はずに、今西君が京都から持て來たいゝ方の米を食つて出掛ける。

前年頃から企て度いと心掛けて居た源治郎尾根の登攀を行ふ日が遂に來た。登路は今西君が小舎か

ら望遠鏡で調べて豫定した通りを取る。

何しろ初めての登攀であるから、後日の證據の爲めと思つて、人夫は伴はない方が二人も望ましかつたのであるが、特に人夫政吉を伴ふ事とした。同人は齋藤氏が曾て大窓への縦走に直吉と共に伴つた者であるが、可成年を老つて居るので、此の様な登攀に連れて行くのは無理であつたが、自分達の人夫は彼一人なので、止むを得なかつた。

平藏澤との出合までは例に依て劔澤を降つて行つて、それから平藏澤の直ぐ下手の極く細い雪溪に取付く。此の雪溪は時期が遅れ、ば雪が消えて仕舞ふだらうが、其の時には左手の尾根を取ればいい。此の雪溪は雪溪と言ふべき程のものでも無く、平藏澤の出合とはほんの數歩、下手であつて、圖中のA Bの部分がそれである。可成傾斜が強いがまだ日光も射さないので、雪面も堅く案外早く上に出た。Bの處で假松を少し右手に登ると、棚になつた岩の上に出た。小舎から見て居た處では此の棚は相當手剛いらしかつたが、行つて見ると存外樂で、此のB—Cの棚は簡單に片附いて尾根筋に出た。尤も前日の雨で此の部分の岩はまだ可成濕つて居た。

空は次第に晴れて、いゝ天氣になつて呉れた。それから第一の峰の頂きまでずつと尾根を登つたがC—Dの部分は岩と假松の交錯で、大して面白くも無かつた。第一峯の頂上に達して前を見ると、第二の峯がとても急に聳え立つて居る。一時は何處から登つていゝのか分らぬ位だつた。

左の方の岩壁は岩は堅いに違ひないが、一流のクライマーで無くては手が着けられさうにも無い。第一峯の頂きに近く假松の枯れたのが横たはつて居るのを、危うく焚火の跡と間違へかけて吃驚したが、後で考へて見ると聊か神經過敏になり過ぎて居た氣がする。石を積んで、鞍部にと、稍々左の方を絡んで降り切つて仕舞ふ。此の降りは極く簡單で、假松の中を行くのだ。

第二峯の登りは鞍部に着いて見ると上から見た程、急では無い。尾根筋を境界として左手は岩壁、

右手は假松なので、丁度その境界に沿うて登つて行つた。或る時は假松に縋り、或る時は岩を頼りとして、頭の長い第二峯の頂上に達した。政吉は可成遅れて、「とてもかなはぬ」とまるで競争でもして居るやうな事を言ふ。

E—Fの部分は見かけは手剛いが實際は尾根筋を眞直に登るのが一番簡單でもあり、樂でもある、右側の假松の中を絡みつゝ登るのは却て時間が掛るだらうと思ふ。左側の岩壁は岩としては夫自身伸ゝ面白けれども、簡單には片附けられぬと思ふ。

第三の峯の頂きに出ると劔の頂上が眼前に高く聳え立つて、左には平藏澤右には長次郎澤が何れも深く落込んで居る。別山尾根の平藏谷側は雪が一面に附いて居るが長次郎谷の幅廣い雪面を隔てゝ、雪の中から、すくゝと突き出た八峯のどつしりした感じには及ばない。頂きに途方も無い大きな、殆ど人間の高さに近い積石を残して降りに掛かる。此の積石は其後小舎から、肉眼でもはつきりと見る事が出来て、何とは無しに嬉しかつた。

此れからの降り、即ちF—Gの部分は此の尾根での一番の惡場で、此の部分だけに思ひ切り時間を要した。六日の日にH點より觀察して、相當むづかしいと思つたが果して困難であつた。

傾斜は可成急である事は別山尾根からも、八峯からも知る事が出来た。初め暫らくの間は樂であつたが、次第に惡くなつて來て、政吉が弱音を吐出す様になつた。尤も雨の後で、岩が濕つて居た故もある。

出来るだけはロープを使はずに降りようと言ふので可成下まで達したが、後十數米の所で傾斜が恐ろしく急になつて、そして右に廻はつても、左の様子を探つても、避けられさうにも無かつたので、此處で初めて綱を使ふ事にした。然し綱を掛けるのに適した岩角も見當らないので、ビッケルで岩に刻み目を入れて、辛うじてそれに綱を二重にして掛けた。そしてそれを傳つて降りて鞍部に達した。

ルタ見リヨ根尾山別
根尾郎治源
(月七年四十正大)



此の際、豫めリニツクサツクやビッケルを先に降ろしたが、政吉がもう一本の綱を荷物と共に降ろして仕舞つて、後になつて狼狽して居たのは可笑しかつた。

鞍部の雪の上でパンを出して食ふ。風も無く、日の光も柔らかなので、休んで居ても實にいゝ氣持だつた。顧みて今、降つた部分を熟く眺めて見るのに、トリコニーを打つた靴を脱いで素足になつたら、綱が無くとも降れたかも知れなかつた。然し時間の節約を旨とするならば可成上の方から綱で降りる方がいゝらしい。然し何れにしてもロープを掛けるのに適した個所は少い。

G—Hの部分は完全な雪の山稜で、平藏澤から長次郎澤へと雪が連續して居る。此の部分が雪稜をなして居るのは珍しいかも知れぬが、雪が無くとも別段大した變りは無いだらう。まるで散歩でもして居る氣分になつて、平藏澤の方を見降したり、八峯の峯々を見較べたりして、H點に達した。六日に登つた時岩の上に積んだ石が、あんなに暴れたにも拘らず依然として残つて居るのを見受けた。

僅か三日の間であつたが、雨が多量に降つたので雪の量が思ひ切り減つて、此の間は隠れて居た部分が見遣ると、三日前のスキ一のシニブルが、まだ残て居たので、愉快だつた。

これから稍々上でK點を横切らうとした時、もう一步で雪から岩へ移ると言ふ刹那に、自分は足滑らした。何分晝日中ではあり、雨上りではあり、雪が柔かくなつて居るので、ビッケルを雪面に立てゝも止らずに、クレヴァスに墜ちて仕舞つた。暫らく物が言へなかつただけで、別段傷も受けなかつた。十分ばかり休んで、暫らくは岩の方を取つて登る、それから再び雪の上をステップを作りながら此の前と略々同じ様にして頂上に出た。然し雪が減つたので岩が出て居る部分が非常に多くなつて居た。流石にH點から頂上まで要した時間は此の前に比べると早かつた。岩に腰を下ろして成し遂げた喜びを味はひながら四邊を眺める。

今日は南の方がよく見えて、槍、穂高が青く光つて居る。そして立山の右手には黒岳、薬師、笠、黒部五郎等が雲の中から代る／＼姿を現はす、中でも黒岳と薬師とが一番目を惹いた。早月川の方は霧が深く、所々に尾根の高い所が島の様に浮んで居る。

暫らくして別山尾根の方に降る。どうせ小舎に早く歸つても仕方が無いので、途中でスケッチをしたり、人夫に岩茸を採らせたりして悠々として小舎に歸つたのは五時過ぎだつた。遅くなつて池ノ平の方から「明治」の連中が來たので、小舎が急に賑かになつた。

記録

午前六・一〇、劍小舎發。七・〇五、平藏谷出合。七・一〇、小雪溪（A—B）に入る。八・三〇、雪溪の終端（二五二〇米、B點）。八・四〇、二六一〇米（B'點）。八・五〇—九・〇〇、C點。九・二五—九・三五、第一峯頂上（二七五〇米、D點）。九・四〇、第一峯と第二峯との鞍部（E點）。一〇・〇〇—一〇・一〇、第二峯頂上（二八二五米、F點）。一一・二〇—一二・〇〇、第二峯下の鞍部（二八〇〇米、G點）。午後一二・一五、六日のコースに合す（H點）。一二・二〇—一二・三〇、（K點）。一・一〇—一・四五（頂上）。一二・二五（平藏谷の頭）。五・一〇、小舎歸着。

劍岳登路としての源治郎尾根

地圖を見ても分る通り、劍の頂上からは四つの尾根が略々十字形をなして出て居る。その中の三つ、即ち別山尾根、大窓への尾根、及び早月尾根の三つは既に登られて、結局、登られずに残つたのが此の源治郎尾根であつた。劍と言ふ山があらゆる方面から手を着けられ、そして多くの先覺者達が出来た記録を残して居るにも拘はらず、獨り此の尾根のみは誰も試みた者が無いのは寧ろ不思議な位である。劍に登つた者の眼には長次郎澤と平藏澤とを分つ此の大きな二つの隆起を持つた尾根が必ず映じたに違ひ無い。それなのに、此の尾根からの登攀が企てらるゝに至らなかつた理由は、恐らく登路としての價值少しと言ふのでは無く、却て兩側が急峻であるが爲、取付き難く感じられた爲であ

らう。別山平邊りから眺めると、平藏澤に面した側は實際よりもより以上に急に見えるし、長次郎澤から眺めても、取付くに餘り恰好な場所は見當らないので、その儘捨て置かれたのだと思ふ。

然し一度尾根に取付いて仕舞へば後は割合に簡單で、只第二峰の降りに綱を使へばいい、だけである。取付くには矢張、吾々の取つたコースが一番容易でもあり、時間も掛らない。或は平藏澤の出合よりも少し下まで降つて、本當に尾根の終る所から初めて構はないが、その部分は假松が茂つてるだけでさう面白くも無い。それよりは寧ろ長次郎澤を登り、向つて左の二番目の雪溪、或はその下手の尾根を登つて、第一峰の下に出る方が面白いであらう。然かし、此れは相當時間も掛る事と思ふから、餘り望ましいものではない。

それで一旦尾根に出たら、尾根筋から離れずに行けばいいので、従つて尾根筋の常として思つた程に時間は掛らない。自分達は初めてであつたので時間は相當要して居るが、それでも小舎から七時間半ばかりで頂上に達して居る。此れから後に行く人は、朝早く出發すればまづ晝頃には頂上に着けるだらう。従つて別山平からは一日の行程としては實に悠々たるものであり、一寸無理をすれば往路なり歸路なりに此の尾根を取つて室堂から劔に住復する事も不可能では無い。

此の尾根は岩が實に堅いから、別山尾根の様に堆石がごろ／＼したり、又は岩が脆ろくて崩れたりする様な事は無い。

それに眺望の優れた點では他の登路とは比較にならないと思ふ。第一の峰邊りから、常に頂上を望みながら登り續け、左には平藏澤の頭から、下までを一目に見下ろし、右には長次郎澤の幅廣い雪溪、殊に熊の岩から上の部分は此の尾根から見ると實に立派である。又、八峰が互ひに鋭さを誇つて、立並んだ様を真正面に見る事が出来るのは、此の尾根にだけ與へられた特權である。

八峰から見た源治郎尾根は餘り見榮えしないが、此の尾根からの八峰は堂々たるものである。然し

高さが高いので、長次郎谷の雪溪から眺める程、八峯が急峻には見えない。

終まで他の登路とは一緒にならず、結局、最後にぬうと頂上の處に出て来るのは、いゝ氣持のものである。

大した困難も無く、然かも相當に興味があり、劍と言ふ山の最も美しい部分を終始、眼にしながら氣持よく登れると言ふ事が此の登路の特徴である。

然し更に進んで、此の源治郎尾根の第一峯なり第二峯なりに、長次郎澤或ひは平藏澤から直接に登らうとなると、問題は相當に、困難になつて来る。

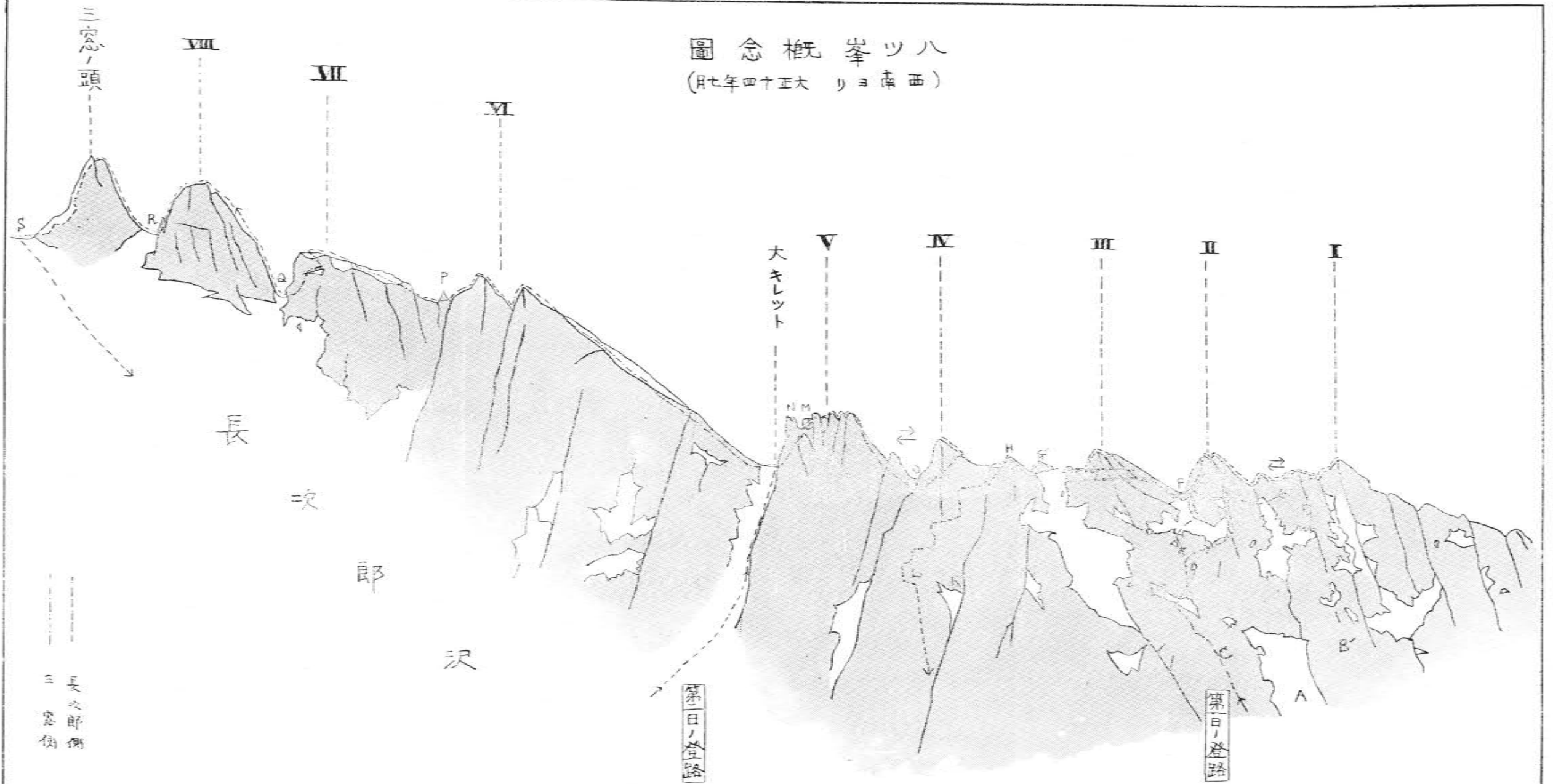
平藏や長次郎等の雪溪からする登路は除いて、他の尾根筋の登路に比較して距離から言つても短いので、早月尾根の様に、再び登攀が繰返へされぬと言ふ様な事は恐らくあるまい。此の尾根に就て慾を言へば、もう少し偃松が少くて、岩だけであつて呉れ、ば、そしてその岩が八峯の様に鋭かつたら、何んなにいいだらうと思ふのであるが、それは兎に角、自分は此の尾根を劍の一登路として正當に主張するのに躊躇しない。

八ッ峯

八ッ峯とは言ふまでもなく、三窓の頭から、大窓へ續く尾根と分岐して、遂に劍澤本流とその北股との出合に終るものを指すのである。

此の尾根を八ッ峯と言ふたのは長次郎であると言う事を聞いて居る。文獻に見えた最初は山岳十一年二號の木暮理太郎氏の「黒部川奥の山旅（中編）」に於てであつて、大正四年七月三十日の紀行中に「九時二十五分三窓の頭に達す、峯頭二裂し、東南に向て八ッ峯と稱する山稜を派出せるものなり」と記してある。

八ツ峯概念圖
(西 南 ヲ リ 大 正 十 四 年 七 月)



此の八ッ峯は別山或ひは別山乗越附近より望むと、明かに八ッの峯から成立つて居るが、間近く眺め、或ひは八ッ峯其自身の一峯に至つて見ると、更に數多くの峯から成立つて居る様に見える。

圖に示した如く、下の方から順次に第一、第二と數へて、第八に至り、更に其の上部に三窓の頭がこれと相接して並んで居る。

第一峯から下は尾根が急に多くの枝尾根に分岐して仕舞ふが、尾根全體の長さから考へると、其の第一峯は尾根の半ば程に位して居るのであるから、八ッ峯とは尾根全體を言ふのではなくて、寧ろ上半の八ッの峯が並んだ部分をのみ指すものとした方がいゝかも知れない。

八ッ峯の登攀を初めて企てたのは、例の慶應の齋藤新一郎氏であつて、大正八年、氏が再び大窓への縦走を行つた前後の事である。此の時は何でも初めから八ッ峯を試みようとしたのでは無いらしく、劔澤岩屋から直接に劔に登らうとして、出合から尾根に取付いて中腹まで登つたが、尾根が悪いので中止して仕舞つたのであつた。然し氏は八ッ峰は面白さうだから、是非やつて見度いと言ふ事を後で洩らされたさうだ。

尙、同氏は登高行第二年の「穂高岳に就いて——劔縦走との比較」なる一文中に、「穂高にはピーク無數にあれど劔には殆ど頂上の外ピークらしいものがない、然し八ッ峯邊りは穂高も及ばぬ險岨であつて、殆ど登攀不可能であらう。」と書いて居られる。此處に云ふ八ッ峰は狹義の、即ち第一峯以上を指して居るらしい。

同じ登高行の早川氏の「劔岳を縦走して」の文中には八ッ峯を「鯨の齒の様に並んだ荒削りの八ッ峯」、清淨な雪を抜いてスツクとそゝり立つた豪壯な八ッ峯の大岩柱」等と形容してあるが、八峯に關する記事は、從來、此の位のもので非常に少い。

八ッ峯は大正十二年の八月、學習院の岡部長量氏に依て初めて完全に登攀された。同氏の記録は文

獻に現はれたものは無いが、氏自身及び同氏の伴はれた声嶮の佐伯宗作の話を基として書いて見る。

此の年の夏は天氣が非常に悪くて、同氏も七月中は、遂に機會無くして一旦歸られた。そして再び來られて、長次郎澤出合の稍々下手に露營し、七月三十一日には熊の岩附近から、ハツ峯の觀察に一日を費された。翌八月一日宗作を伴つて長次郎澤を登り、稍々あつて右手の細い雪に取付き、それから草の多い尾根に出で、更に登て偃松の密生した中を右の方へと絡んで、遂に第一峯の頂上に出たのが、何でも晝近くで、此の偃松で可成苦しめられたとの事である。これからは尾根を傳つて、第一第二、第三、第四、第五の峯を極め、第五と第六との間の大キレットに達し、此の大キレットまで延びて來る雪溪を長次郎澤へと降りて露營地に歸られたとの事である。第四の降り口は三窓側の雪溪と岩とが離れて居る爲、ロープを用ひられたさうである。

二日は長次郎澤を登り、熊の岩の下方で右に取つて大キレットに出で、第六峯に取付き、残りの三つ即ち第六、第七、第八の峯に登つて歸られた。

尙、此の年、岡部氏の登攀された前に、早稻田の船田三郎、小笠原勇八、中村初太郎の三氏が、第五及び第六の峯に登られた。岡部氏も第五峯の各々の峯（第五峯は頂きが亂杭齒の様に數多くに分れて居る）に積石があり、且つ第六峯の中の手前の方の峯には名刺が置いてあつたのを見られたとの事である。

船田氏の一行は第五も第六も何れも大キレットから往復され、第六には七月二十七日午後四時頃霧の中を登り、同夜は長次郎澤に露營し、第五には翌二十八日の朝登つて、直に室堂まで歸つて居られるので、此れに關しては、リュックサック第三號に「八峯」なる小笠原氏の記事が載つて居る。然し山岳十七年二號の會員通信中には船田氏が「二十七、二十八、兩日の快晴に遂に劍岳の「八峯」の峯々を極め云々」と書いて居られるが、これはハツ峯全體では無く、第五、第六のみと言ふ意味らし

3。

翌十三年には七月十日、十一日の兩日に同じ宗作を案内として明治の馬場忠三郎氏が登られた。此の時には長次郎澤を入つて右手の二つ目の雪溪の下手にある尾根（圖で言ふとAはその雪溪の末端になるから、B'が此の尾根になる）を登つて、第一峯に達したとの事である。此の尾根は一見した處岩も露出して居らず、偃松と草地の交錯で、八ッ峯への登路としては最も樂であり、従つて、一番適當したものであると思ふ。尤も興味の點から言へば此れよりは成るべく左に取つて岩のある所を選ぶ方がよい。

此の時も第一日は第一から第五まで、大キレットに降り、第二日に第六、第七を濟してから、三窓側に針の様に突立つた峯を序でに登つて引返へし、第八峯を極めてから三窓の頭と第八との間の雪溪を降りたのだつた。此の記録は明治山岳部の「爐邊」第一號に「八ッ峯」として馬場氏が簡單明瞭に書いて居られる。此外尙ほリュックサック第三號及四號、「山稜」第三輯等に八ッ峯に關する記事はあるが、遺憾ながら餘り參考となるものは無い。

八ッ峯の登攀

第一日（大正十四年）七月十三日。晴、微風。

長次郎澤——第二峯——第一峯——第三峯——長次郎澤

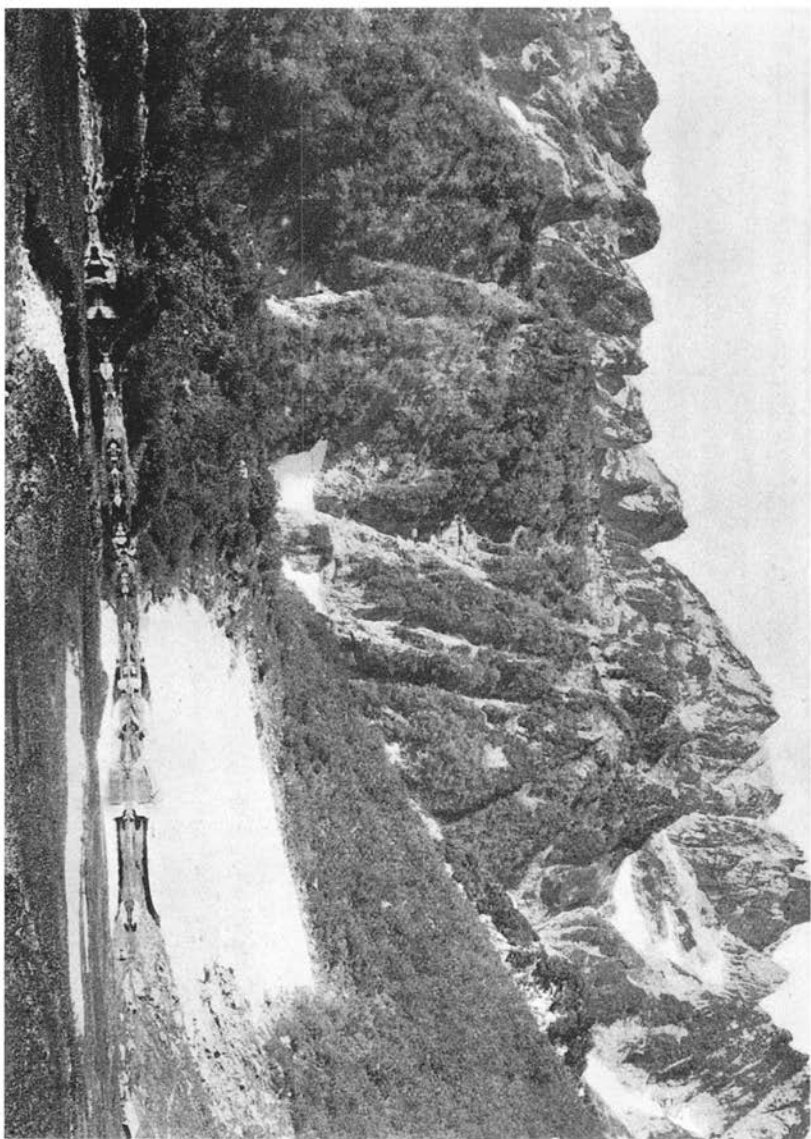
八ッ峯は現在ではさう取立て、書く程の事は無いが一昨年の登攀に就いて極く簡単に書いて見る。源治郎尾根を九日に登つてから毎日暴れて、やつと十二日の夕方から晴れた。此の日は人夫は連れないで二人だけで出掛ける。三日ばかり小屋の中にばかり閉ぢ籠つて居たので二人とも身體の調子が餘りよくない。長次郎澤の雪溪を登るのさへ可なり辛い。暫く登つて行くと右手の二番目の雪溪の下に出た。その左端に雪に埋れて、早稻田の連中の所謂、八ッ峯の岩小屋らしいものが見えて居た。雪

溪に沿うて暫らくしてからその左手の岩の斜面に取付く。右の方にはAなる雪溪を隔て、B、B'なる普通、登路として取られる尾根が見えて居るが、如何にも樂らしい。C邊りから上は割合に表面の滑かな岩であるが、傾斜が急で無いので大して困難でも無い。岩ばかりを選んで、そうして一枚岩の上を横斷して岩の感觸を樂しんだりして、D點邊りから右に取つて岩の裂け目に沿うて第二の峯の頂に出た。今西君はD點から真直に雪の上を登つて、第二と第三との鞍部に出た。暫らく第二の上で待つて居ると今西君が登つて來たので一緒になつて第一の方に向ふ。此の第二の峯は頂上近くは、隙間なく偃松で掩はれて居るが、下の方は岩になつて居る。

これから第一の峯までは岩から岩へ傳はつたり、偃松の中を分けたりして、鋸の齒の様に並んだ小さな隆起を幾つとなく越えて行く。第一の峯の登りは遠くから見ると可成り急らしかつたが、近寄つて見ると案外容易だつた。第一の頂には積石もあり、岩の間には早稻田の人達が置いたらしい旗もあつた。霧が時々霽れて劍澤の下流の方が青白くうね々と流れて行くのがはつきりと見える。三窓、小窓の雪溪は長次郎澤に較べると、汚くてとても見られたものでは無い。何と言つても美しさから言へば長次郎澤が一番だ。

第二の峯にリュックサックを残して來た自分は尾根傳ひに戻り、今西君は長次郎澤の側の岩壁を横過してF點まで戻つて來た。第二の頂上からF點に降りる處は稍々困難であるが、綱を使ふ程の事も無い。

鞍部で晝食を済まして第三峯に登り初める。尾根から稍々長次郎側に掛けては手掛りの少いスラブとでも言ひ度い岩で、可成興味がある。しかし強いて岩を求めるので無ければ、尾根筋に沿うて偃松の中を行けばいい。G點は稍々急であるが、岩の裂け目や偃松を利用して綱無しに降つた。此れから先きは小さい隆起が二つばかり雪の上に出て居て、ハツ峯中では一番樂な部分である、遠くから見



影撮氏即次松冠 峰ッハた見らか平ノ池

ると八ツの峯が明瞭に分るが、尾根を歩いて居ると果して何番目の峯に居るか、よく分らなくなつて仕舞ふ。殊に第三から第四に掛けてが最もさうであつて、二人もHの峯を第四の峯と信じて登り、實際の第四峯はそれからほんの僅かで、登るのにもそう苦勞は要らなかつたのだが、第五峯と信じたので登らずに、直ちに降りにかゝつた。圖では隠れて見えないが、Kなる雪溪がHの近くまで延びて來て居るので、大體それに沿うて降らうとしたが、地磬が緩くて、墜石があつたりして危険であり、雪溪自身は急峻な上に、日光に直射されて、下の方まで柔かになつて全然不可能なので、更に右手に取つて假松の中をL點近くまで降つた。此れから下は岩ばかりであり、それに手掛けや足場が少いので非常に困難を感じた。そしてK雪溪の端に出て、それを足場を切つて横切り、それから暫らく降つてから再び雪溪に出て滑りながら、長次郎澤の合まで下り、例により小屋までの長い路を緩くり登つて歸る。夜は空一面に星が冴え渡つた。

第二日 七月十五日。晴、微風。

長次郎澤——大キレット——第五峯——第四峯——第六峯——第七峯——第八峯——三窓ノ頭——長次郎澤。

十四日は疲れを休め、旁々、スケッチ等をして、軽い仕事に留めて置いたので、此日は二人とも調子がよく、長次郎澤をずん／＼登つて行く。熊の岩の下に來て、右に取つて大キレットから出て居る雪溪に取付く。殆ど鞍部近くになつてから自分は右に第五峯に取付いて、岩を選んだが、今西君は鞍部まで登り切つてから岩に移り、然かも困難な部分を取つたので、稍ゝ遅れて頂きに着いた。

第五峯への登路としては大キレットから長次郎澤に面した側を稍ゝ絡みつゝ登り、それから眞直ぐにM點に出るのが樂である。降りもこれと同様である。

此の長次郎澤に面した部分は、他の部分に比較すると稍ゝ脆ろい様な氣がする。然かし此は八ツ峯としてであつて、さう氣にかゝる程のものでは無い。第六峯に直面してNなる岩が大キレットの上に

のしかゝる様に突立つて居る。此の岩壁は恐ろしく急で、第五峯の上からキレットを見ると此の岩がオホバアハンダして居る様に感じられるが、岩は非常に堅いので、此れを試みるのは相當面白いだらう。登りはどうか知らぬが三窓側には綱で降りる事が出来たさうであるから、降りには登りと同じコースを採らず、直接にキレットに降つた方が興味ある事と思ふ。

第五峯の上には雪が残つて居た。此の峯は長次郎澤から見ると、宛も五指を並べた如くに聳えて居るが、上に行つて見ると、此等の突起は尾根筋からは稍々長次郎澤側に偏して居り、第五峯の頂は平坦な感じしか味はへない。

此等の一つ／＼の突起の上には積石がしてあつた。稍々降り、昨日残した第四峯に向ふ。〇なる鞍部に出で尾根筋に行かうと思つたが、可成深く切れて居るので、時間が掛りさうなので三窓側に降る。〇から三窓側に落ちて居る細い可成急な雪を横切る。日はが／＼照りつけ、雪は強く反射して目が痛い位だ、加之腹も減つて來て居るので、ステップを切るのが仲々骨だつた。雪から岩にと移る部分が稍々離れて居たが大した困難も無かつた。然し時期が遅れると、高さに於ても幅に於ても、隔りが次第に増して、相當困難になるさうで、先年岡部氏がロープを使はれたのは此の處である。雪溪を横切つて仕舞ふと、偃松の中を分けて直ぐに第四峯の頂きに出た。

此峯は第三峯の方から來ると何でも無いのだが、逆に來ると一寸時間が掛る。直ちに引返へし、登りと略々同じコースを取つて大キレットに戻り、晝飯を食つた。

第六の峯は第五の峯から見た時、非常に急峻に見えたが、其れは正面から見て居る關係と、第五峯の岩壁が殆ど直角に立つてゐる爲に生じた錯覺とに依るのであつて、事實は何等の困難も無かつた。

此の登路は三窓側を取るもので、左に取ると尾根が斷れて仕舞ふ事は、第五峯の上からよく分る。暫らく岩の上を登り、それから雪の上に轉じ、やがて又雪を離れて暫らくして頂に出た。頂上は圖でも

分る通りに二つに分れて居るが、此の二つを別々の峯と考へる事も無かつた。

此登りは、第六峯が第五峯とは高さから言つても、ずつと高く、距離もそれに應じて長いので時間も相當掛つたが、第五峯以下が見る間に眼下になつて仕舞ふのは愉快だつた。

第六から上は假松も無くなつて岩ばかりになるが登路も概して三窓側ばかりになる。

第七峯の登りに一個所、岩質が他とは全然異つた處があつた。

此頃から霧が掛つて来て、頂に出ると第八の峯がぼんやりと突立つて居て何だか不安に感じた。晴間を見て、第七峯を三窓側に降り、最後の峯に登り初めたが岩が堅くて非常に愉快なクライムを味ふ事が出来た。此の降り口には曾て誰かロープで降りた形跡が残つて居るが、別段ロープを使ふ程のものでも無かつた。

序いでに三窓の頭にも登つて、Sなる鞍部に出で、滑降で一氣に長次郎澤を降つて仕舞ふ。振返へると霧も晴れて八つの峯がくつきりと浮び出て居た。

記 録

七月十三日。午前七・三〇出發。八・三〇長次郎澤出合。一一・〇〇、第二、第三峯の鞍部(F)。一一・二五、第二峯頂上。一一・五〇、第一、第二峯の中間の峯。午後一二・〇五—一二・四〇、第一峯頂上。一二・五—一二・四〇、第二第三峯の鞍部(F)。一・五〇、第三峯頂上。二・〇五、第三峯下(G)。三・一五、第三峯と第四峯手前の峯との鞍部(G)。三・三〇—三・四〇、第四峯手前の峯(H)。四・二—四・三〇、L點。五・一〇、K雪溪を横切つて稍々降りし處。六・一五、長次郎澤出合。六・四五、平藏澤出合。七・三〇、小屋歸着。

七月十五日。午前七・四〇、出發。八・一〇、長次郎澤出合。九・一五—九・三〇、大キレット雪溪の入口。一一・〇〇—一一・一〇、大キレット。午後一二・〇〇—一二・一〇、第五峯頂上。一二・五〇—一二・一〇、第四峯頂上。一二・〇〇—一二・三〇、引返へして再び第五峯頂上。一・五〇—二・一〇、大キレット。二・四〇—二・四五、第六峯頂上。二・五〇、第六、第七峯中間の小峯(P)。三・一五—三・二〇、第七峯頂上。三・三〇、第七、第八峯の鞍部(Q)。三・四〇—三・五〇、第八峯頂上。四・〇〇、第八峯と三窓の頭との鞍

部(R)。四・一〇、三窓の頭。四・二〇、S點、五・〇〇、長次郎澤出合。五・二〇—五・三五、平藏澤出合。六・二五、小屋歸着。
以上でほんの概略ではあり、甚だ疏漏であるが此の一文を終る。

野川を遡りて大朝日岳へ

吉 澤 一 郎

六月(大正十五年)の小集會の席上、朝日方面に通じてゐる沼井氏に會つて、種々の便宜を得、兼ての希望であつた野川遡行を決心する事を得た。

尾根縦走及び大島川降りは、他に良參考書が無かつた爲「登高行」の記事を専ら信賴してこれに據ることにした。

野川といふのは大體小朝日岳(陸測五萬の朝日岳圖幅に平岩山とあるもので、四根、平野方面の稱呼である)の南面より發し、長井線の長井附近で最上川に合する、さして大きくもない川である。此谷に入るには、地圖上から見れば長井驛の手前の時庭で下車し、西北に野川に向ふのが近いやうに見えるので、自分等は此の道を通つたが、土地の人に聞くと、今泉から直接明神平峠へ出た方が早いとの事であつた。

參考地圖

五萬分一 手ノ子、朝日嶽、大島池。
廿萬分一 仙臺、村上。

七月三日(大正十五年)の午後九時上野發の汽車に乗り、翌日赤湯驛で長井線に乗り換へ、時庭驛で下車したのは午前八時頃であつた。此の方面では餘り登山姿に見慣れないと見え、汽車の中で何處かの婆さんが「こつちから東京へ稼ぎに行くのは多いが、東京から來るのは珍しい」といふて感心して居た。一週間分の食料とテントを持つて夏の日盛りに田舎道を歩くのは樂ではない。野川の谷の入口(小坂の西で地圖に神社の符號ある地點)の所へ來た時はもう正午頃になつてしまつた。此の邊は氣

持ちのいゝ河原が續いて居る。野川が北西に曲る所で道は小澤を登る。瀧の記號のある所までの間を「オモノイリ」と云つて居る。その少し上に針葉樹の記號があるが、そこは清水が出て居て「一杯」と云ふ。やつと明神平へ出た。今泉からの道の方が立派である。豫想して居た通り遙か北に當つて自分等の目的である大朝日岳が野川の奥に大きな残雪を見せて居てその左には祝瓶山がピラミッド形に並んで居る。祝瓶から南に走る尾根にはあまり雪は見えない。峠に着いたのは三時頃であつた。今日の内に豫定の木地山の先まで行く事は出来ないで、行きあたりばつたり泊る事としてすつかり落着いてしまつた。地圖に明神平峠と記入してある明の字あたりから發源して野川へ入るものをオリク澤といふ。此の日は少し雨も降つて來たので桂谷の渡邊清造方へ一泊させて貰ふ。湯へ入れといふのがズヘ入れと聞えて始めは何の事か解らず挨拶に困つた。懷中電燈を見て家族の者が皆驚いて居た。附近の澤に就いて聞いたまゝを記して置くことにする。

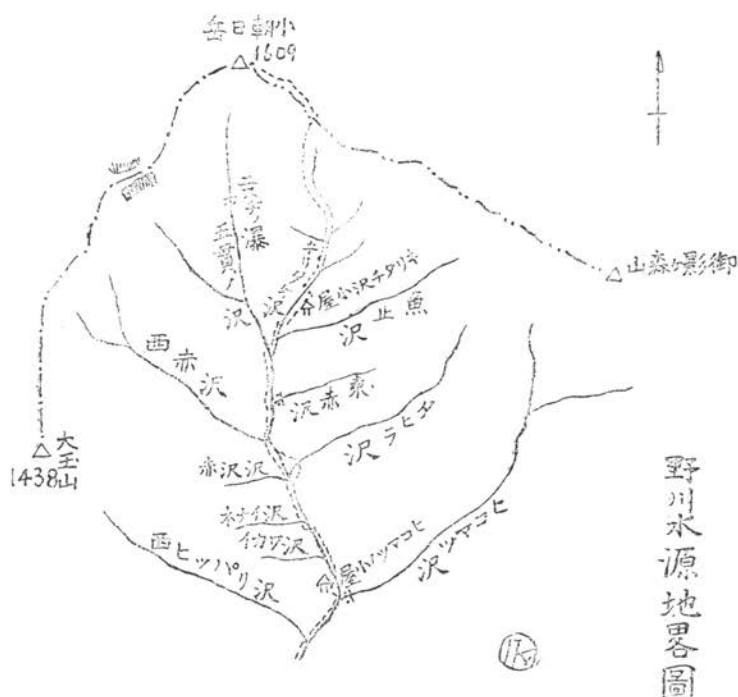
桂谷と前野の間を流れるのが桂澤、これへ三體山の山の字のあたりから發して合流するのが三體澤、前野の南にあるのが小倉澤、其の南のものを濁澤といふ。桂谷の北で合地の澤に合流するのがアカバネ澤、三體山から東に派出した等高線の數字の記してある尾根の東に發し、アカバネ澤へ入る小さいのがヨシキ澤、獨立標高點九四三米の隆起から眞東に出る小さいのがフネヒキ澤、この澤が野川に注ぐ所をヨイコと云つて淵をなし、雜魚が澤山とれる相である。この澤の對岸で地圖に西根村云々と記してある西と根の間の澤は二段の瀧が懸つて見えるがそれは白瀧といふ。ヨイコから北で西から來るのは赤石澤、次は東から大桶澤が入る。其の少し上手で西から來る二の澤の中、等高線の數字ある尾根の北のものはカ澤、南はシャブ澤。更に其上流で六二七米三角點の南のものがヘングリ澤、北がタカラン澤、又其の北で柴倉山から發するものはクチハミ澤といふ。三體山の北の一二九三米の三角點の峯は合地の櫓と呼んで居る相である。

明くれば七月五日、沛然たる猛雨の中を午前八時頃木地山へ向つて渡邊方を出發した。アカバナ澤、合地の澤を渡り、ヲイコへ着いたのは九時。村人のいふ通り淵になつて居て瀧のあるらしい音がする。白瀧は上の方に見える。赤石澤を過ぎて暫らく行くと豁然として木地山の平が眼前に横はつて居た。シャブ澤を渡つて平を右に行き、本流に架してある釣橋を渡り、手近の家で一休みさせて貰ふ。雨は又烈しく降つて来る。木地山附近は地圖で想像したよりも廣々とした清々しい氣分のする所である。殊に若葉が良かった。此の邊の家では主に木地が本業で、その外ぜんまいを採つて干したりしてゐるらしい。少し早いが晝飯をたべて雨の小やみを待つ。食事も済んだ頃だん／＼天氣も恢復して來さうなので、結束して出かけたのは十一時頃であつた。木地山から尾根を越して大桶澤へ行く細徑をすぎ、中澤を過ぎ、雨に濡れた若葉を心良く感じ乍らやがて道の二岐する所へ來た。後で考へた事であるが、此處は多分クチハミ澤の對岸あたりらしい。左をとつて暫く行き、野川の岸も近いと思ふ頃、ばつたり錨釣りらしい一人に出合つた。人の善さ相な中老人で、芦峠の嘉藏右衛門に良く似て居た。「お前さん等は何處へ行くんか」と聞くから、「野川の上の方へ行く」と答へると「それぢやこの徑は違ふ。此の徑を行けば川を渡つてアラ澤へ入つてしまふよ。こゝへ來る途中右へ行く方を行かなければ駄目だ。」自分等は老人の言葉に従ひ、後戻りして先の分岐點まで歸る。老人は尙自分等にて好意を謝して別れた。地圖に野川に沿ふ點線の徑の終りに家の記號があるが、それが所謂「丸森の小屋」なのである。

この小屋に至る途中、一の小屋が右側にあつたがそれは丸森の小屋ではなかつた。丸森の小屋も元は大きなものであつたが、雪の爲に潰れて今は其傍に小さく造られてある。水は小屋の直ぐ前にある。小屋に着いたのは午後一時頃であつた。誰も居なかつたけれども爐の中のもえさしがまだ熱い所

を見ると今し方まで人の居た事が判る。直ぐ歸つて來ることゝ思つたが、其日は遂に顔を見せなかつた。雨が又一しきり降る。小屋の中を見廻したら天井に鱧が十一匹干してあつたので、早速夕飯の菜にする事にした。一晚中蚤の爲に苦んでゐる内に、漸く外が明るくなつたので飯を濟まし、出發の仕度をしてゐる時に人が三人やつて來た。昨日遇つたと同じ様な人達だつたが、別に自分等を見て驚かなかつた所から想像すると、例の老人に聞いて來たものらしかつた。色々話を聞くと野川の上流の有様が解つて來たので、其内の一人庄司佐兵衛といふのに今日半日だけの案内を頼む事にした。こゝで又野川の澤に就いて少し書く事にする。

小屋の名は三角點七五・八米の峯なる「丸森」から導かれたものであつた。いつか山形の新聞記者連が祝瓶山から野川へ降りたといふのはアラ澤を下つたので、朝日嶽圖幅でいへば圖の最下端で西から野川に注ぐものがそれである。例の老人の話では徑が多少あるらしい。アラ澤の北のものがスナ澤で、丸森の西側を流れてゐる。西根村とある根の字から西南へ出てゐるのはホド澤、野川の川の字の北で本流へ入るのが八兵衛澤、祝瓶と大玉山の最低鞍部から東南へ流れるのがカクナラ澤で、反對側の荒川へ落ちるのがソデカクナラ澤である。ソデとは奥といふ意味だ相だ。荒川の方から云へばこつち側のがソデカクナラになると云つて案内者は笑つて居た。又祝瓶山の祝の字から真東にガレから出てカクナラ澤に入るのが小カクナラ澤、この少し上で北からカクナラ澤へ合するのがカスミ澤、祝瓶山から東北へ出てゐる尾根の九〇〇米の等高線の突端あたりからカクナラ澤に注ぐ小さい澤がヌルミ澤、祝瓶山へ登るには、この小さな澤から尾根にとつて行けばいゝ相だ。カスミ澤と小カクナラ澤との中間位にカクナラの小屋が左岸にある。次に平野村及云々とする野の字と村の字との間を流れるのが深澤、御影ヶ森山の南の三角點一三四三米の眞西に當るのがカ澤、其對岸にあるのがフワリ澤、大玉山の玉の字から東南へ出てゐる尾根の南のものが西ヒツバリ澤、野川



○野川を遡りて大朝日岳へ 吉澤

が急に西北に曲る所へ東から合流するものがヒコマツ澤で、落ち口は小さい瀧となつてゐた。ヒコマツの小屋といふのがこの落口から半町も野川を遡つた右岸にあつた。荒川方面からの道が大玉山北方の尾根に出遇ふ所から東南へ落ちるものが西赤澤、これとヒコマツの小屋の間で東流して野川の本流に合するものに、北から赤澤澤、ネナイ澤、イカワ澤の三小澤があるが、地圖の上では何處と説明出来ない。ヒコマツ澤と尾根を挟んで西流してゐるのが平澤、^{タビラ}其北には魚止澤がキラタチ澤と合して東から五貫ノ澤に注いでゐる。この五貫ノ澤を自分の考へでは野川の本流と見て差支ないと思ふ。金が五貫目採れたので斯く呼ぶやうになつたとの事である。

今日はキリタチ澤の小屋泊りなので氣も樂だ。案内者の庄司の履物の簡單なものには驚いた。四寸四方位の草履を一寸足の先へひつかけただけでさつさと歩いて行く、實に慣れたものである。午前九時十分小屋を立つて、二町も行くと河原へ出たが、細徑があるので夫を辿る。ホド澤、八兵衛澤を過ぎ、九時三十七分、徑は再び河原に終つて居た。其處はカクナラ澤の合流點である。野川は浅いが相當急な流れで、之を徒渉して十間ばかりカクナラ澤に沿うて進むと徑は野川の右岸に見出される。カクナラの小屋へ行くには、澤沿ひに遡ればよい。約十分も歩いた時左側に小屋へ行く古い徑跡があつたが今は藪がひどいらしい。深澤を對岸に見て間もなく河原に降りる。野川に沿うて通じてゐる徑らしいものは、カ澤に至る五分位手前で終りとなるわけである。フワリ澤、西ヒツバリ澤を左に見て、ヒコマツ澤の合流點に着いたのは十時半であつた。こゝで川は地圖の通り左へ曲つて居る。一寸深い急な徒渉をして一度左岸へ移り、再び丸木橋によりて右岸へ渡つた所にヒコマツの小屋があつた。爐傍はぬくといが人は居ない。雨が再び降つて來たので晝飯を食ひながら休息する。此の邊の河原は相當廣いものであつた。十一時十分雨の中を上流へと志す。丸木橋を渡り返し、二三回小さな徒渉をして、平澤の手前で左岸へ移り、平澤を一寸登つて左へ細徑に入ると小屋の跡があつた。平澤といふのは奥の方まで平な様に見えた。河原へ下りるとすぐ西赤澤が左から合流する。此の澤の右岸は赤くはげてゐるので澤の名稱が生れたのであらう。合流點から五分ばかりで東赤澤が東から小さな瀧となつて落ち込む。正午五貫澤とキリタチ澤の合流點に着いた。五貫澤の方が水量は多い。五貫澤を徒渉してからキリタチ澤に入り、その左岸を行くと魚止澤が東から合流する。

河原傳ひに暫く登ると左岸にキリタチ澤の小屋を発見する事が出來た。(午後零時半)。此の小屋は木地を造る小屋で、冬季中雪につぶされない様にと徑八寸位の太い丸太が斜めに何本も立てかけてあつた。其等を片づけてまづ一服する。咖啡を湧かして案内者にも飲ませた。その言に依れば小朝日岳に

登るには五貫ノ澤を廻り、二筋の瀧の左を搦んで行つた方がキリタチ澤を登るより樂だ相である。この小屋は七八人まではゆつくり寝られる。案内者は午後二時頃丸森の小屋へと戻つて行つた。これから先は自分等だけの世界となるのであると思つても、前途の様子が判然せぬので多少の不安もあつた。同行のMがキリタチ澤の上の方へ調査に行つてゐる間に、も一人の友と自分とは夕飯の仕度に取り懸つた。上流も下流も霧が立ち罩めてゐる。明日の天氣も餘り思はしくない様に見えた。三人相談の結果、明日たとへ天氣でも五貫ノ澤まで戻つて登るのは嫌だから、このまゝキリタチ澤を何處までも登つて、御影ヶ森と小朝日とを連ぬる尾根の鞍部へ出て見る事にした。Mの偵察によればすぐ上の所に残雪があるとの事であつた。野川の姿を見てからもう既に三日を費して了つた事になるので、食料の方がそろ／＼心配になる、注意して浪費しない事にした。

七月七日。午前五時頃起きた時は雨が少し降つて居たが、兎に角朝飯だけは済まして様子を見て居ると次第に好くなり相なので仕度をし、八時廿五分小屋を出發した。すぐ徒渉をして右岸に移ると澤は左へ曲つてゐる。雪崩の下をくゞつて一まがりすると鐵砲があつた。これは左側に藤ずるがあつたが危なさうなので、持つて來た綱を使用した。これから上は雪溪になつてゐたのでやれ安心と思ふ間もなく、瀧があらはれ、そこだけ雪がないので、大に時間を費して瀧の左側を搦み、又上の雪溪に達した。(十時)。この少し上で左側から瀧が落ちてゐる所で第一回の晝飯をとる。ふと下流を見ると祝瓶山が可なり大きく中腹以上をあらはしてゐた。

約一時間休憩の後、再び雪溪を登り始めた。右側から瀧が落ちてゐる少し上で急に西へ折れる。するとすぐ又先に出遭つた様な雪溪の切目にぶつかる。一度は右側の藪を登り、切目の上をへつらうとして見たが不可能なので、忠實に雪を降り、雪溪の下をくゞつて上部へ達した。多少なりとも瀧の形をしてる所は雪が早く解けるらしい。かれこれ三十分を費して、又暫らく登ると正午過ぎ廿五分に今度

は多少急な岩壁の上を水は落ちる様になつてゐる所へ來た。この瀧の左右とも手懸りがないのと、地圖を按じてたとへ此所から西側の尾根に取りついて藪くぐりをしても五百米突も辿れば郡界尾根に達せられると思つたので、遂に此の瀧を渡ることはやめて、雪溪から約一間ばかり離れた向側の急なガレに飛び移り、リュックサックは綱で運んだ。云ふのを忘れたが此の邊の雪溪は可なり急であつた。午後十二時半から始めて四時半に假松地帯に達するまで四時間の間、ひどい藪くぐりで、つい記念の蛇を落してしまつたのは一生の不覺であつた。此頃から天候漸く惡變して、自分等は全く猛烈な風と濃霧とに閉ぢ込められてしまつた。假松とても生優しいものではなく、極めて頑強なので仕末に困つた。然し何と云つても一番弱つたのは見通しの利かない事で、仕方がないから高い方へ行けばいつかは郡界の尾根に出られると度胸をさめ、非常な寒さをこらへて尙も假松の中を游いだ。尾根の頂上に近い事は風の強さでも判つたので、よく注意してゐると偶然にも郡界の標木（木切れの上に釘を打つてあるもの）を発見したので、少し安心して暫らくの間磁石と睨み合ひをして居た。

郡界の標木は見付けたが切明は全然無い。元は有つたのであらうが、今はすつかり假松に覆はれてゐるのだ。霧の加減でふと前途に一峯を見出したので、勇氣を振ひ起して前進を續ける。勿論標木には最も注意した。最早五時となつても前途の見込みが全くつかないので、遂に假松中に天幕を張る事にしてしまつた。雨さへ加つて天氣は益々惡くなる一方である。遂に飯も炊けずに濡れたもの丈すつかり取りかへて寝ることにした。實に心細い野營であつた。翌日氣のついた事ではあるが、五貫、キリタチ兩澤の間の尾根即ち自分等の登つたものは、地圖では小朝日岳（地圖の平岩山）の三角點から下方約六十米の所へせり上つてゐるが、あれは間違つてゐると思ふ。少なくともつと東南の千五百米の圏のあたりで郡界の尾根と岐れなければならぬ。

七月八日。今日こそはあのピラミッド形をした大朝日岳の頂上へ登る事が出来るのだと思へば何と

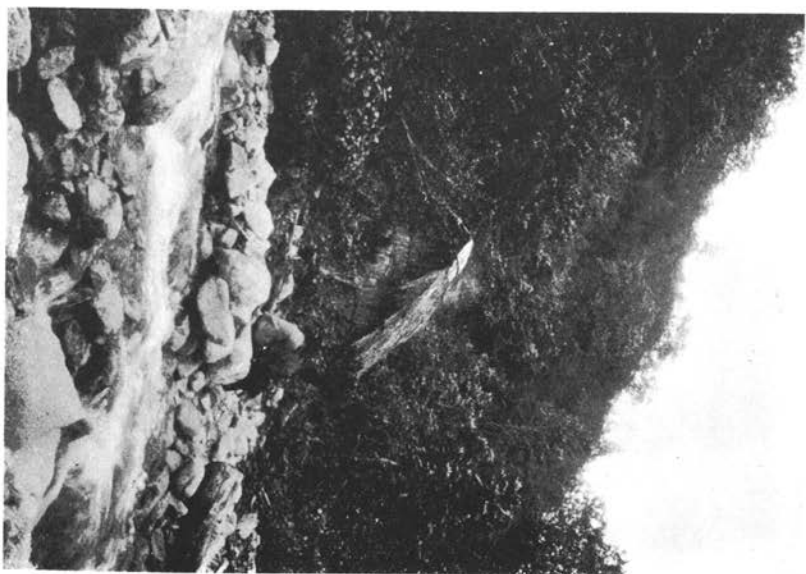
なく心も軽い様である。午前四時半に天幕を出ると夏の太陽は既に上つて居て、眼前に連なる大朝日岳から鳥原山に至る尾根が紅に染まり實に清々しい氣分を起させる。然し朝燒の氣味があるので少しは心配である。藪の中ではあり夜中の雨の爲に四邊はすっかり濡れてゐるので、飯も炊けない所から六時十五分には出發する事が出来た。

尾根通りは隙間もない偃松でとても通る事は不可能であるから、主に朝日侯に面した方を歩く。最も苦しく思つたのは藪の斜面を一時間半位も漕いだ時であつた。それでも十時にはかなり大きな雪溪の上に出る事が出来て一安心する。友の二人は約二十分も遅れてやつて來た。いざ今までの空腹を満さうと焚火を起しに懸つたが、枯木がなかつた爲に火が作れず、罐詰だけで我慢する。昨夕から腹の中に一粒の米も入つてないので可なり身體は疲れて來た。三時十五分やつとの思ひで平岩山の三角點に達する事が出来た。三人は枯木の様に景色なんかはどうでもいいといふ調子でぶつ倒れてしまつた。

來し方を眺めると手のとぎさうな間近に自分等の野營した場所の直ぐ下の雪溪が見える。僅か一里にも足りない様な距離を正味八時間もかゝるとは、人を馬鹿にしてゐると皆憤慨する。身體が落ちてゐると來ると筈のやうに一人／＼頭を擡げて四邊の風物に眼をやる。ミヤマウスユキ草がざらに生えてゐる。大朝日岳への登りは見た眼にはうんざりする程長い。此處からは今まで辿つて來た野川が遙か南の方へ流れてゐるのがよく見える。大玉山も可なり大きな山である。西朝日岳は一番立派だ。そして五月頃の大日岳によく似てゐる。然し藪で苦しめられたせいか風流な形容詞なんかは少しも頭に浮んで來ない。それに雪の多い事を期待して案外少なかつた爲にがつかりしてしまつた。五月頃であるならいざ知らず、さも無くば荒川から直接西朝日岳へ取付く事は出來さうもない。自分はそれを決行しようと思つた事もあつたのであるが。

野川キリガタ澤の小屋

吉澤一郎氏撮影



五本橋の前方峯に登る途中から袖朝日及目コツケン澤を望む



別宮貞俊氏撮影

四時遂に山頂を辭して大朝日岳に向ふ。普通なら一時間あれば充分なのであらうが、二時間も費して漸く大朝日岳の三角點に達することを得た。山頂の大觀は今改めて茲に述べる必要もないであらう。陽は既に西に傾いた、あの大きな三角形の山頂が東に雄大な影を落してゐるのを見た時、噫これなる哉と叫ばざるを得なかつた。試みに三角點の上に立つては見たが、自分の影は大朝日の大きな影の上には何の關係もなかつた。

都の友からの贈物である上等らしい葉巻を心ゆくまで味つて、今夜の野營地へと降つて行つた、ふと見るとハマグリ雪の左側に紫の煙が立登り、其傍に一張の天幕がはられてある、小朝日岳への切明を暫く辿り、好い加減の所から天幕を眼がけて走り下る。そこには帝大の學生が二名今しも夕食を終つて茶を呑んでゐる所であつた。早速焚火を借りて久し振りの様な氣のする米の飯を炊くことにする。親切な人々から紅茶の御馳走になつたりしてゐる中に四邊は次第に暗くなつて行つた。北の方月山の遙か彼方に鳥海山が實に神々しく聳えてゐた。

此處から大鳥池までの縦走は、既に記文もあるので略することとし、大鳥池と大鳥川に就いて少し書いて見たい。

狐穴の野營地を出發して以東岳に至り、東の澤を滑降して大鳥池畔に達し、中の澤を経て西の澤へ着いたのは正午を過ぎる四十五分であつた。大鳥池は自分には薄氣味惡く感じられた。此處から西へ急に百五十米突ばかり登ると踏み跡があるので、夫に従つて好い加減の所から再び池畔に降つた。三角池と一〇〇二米の獨立標高點との鞍部の南にある小舎は役に立たない。小屋跡を立つたのが午後二時半。少し不明瞭な徑を鞍部に達し、三十分で七瀧の下の河原に着いた、こゝからは一寸探せば左岸に道があるから、夫について降ると四十分位でゲンダン澤（エンダン澤に非ず）に達せられる。これから先は河原の歩きよい所を選んで通るより外に方法はないと思ふ。五六七米の測點の北で東から來

て合流するのは冷水澤ヒヤミヅといふ。自分等はこの落合の南一町位の所で腰まで浸つて對岸へ徒渉し、其處に天幕を張つたのは五時四十分であつた。四月頃に大鳥の人が來たらしく、大木に名前が彫刻してあつた。

前人の記録に據ると、此處から泡瀧の下まで一時間と少しで達してゐるが、自分等はまる一日を要して了つた。徑があれば免も角、人間業であの惡場を一時間位で行かれはしなと思ふ。自分等は十二回徒渉をした。途中踏跡のある所もあつたし、デブリで出來たらしい雪橋が兩岸に跨つてゐる所もあつた。最後の徒渉點はすごい所である。然し渉らなければならぬ。友の一人の如きは願まで浸つてしまつた。それからはいよいよ加減に藪をわけ、西俣澤を涉つて四九七米の地點についたのは五時であつたから、冷水澤から八時間半（休憩時間を加ふ）を費したわけだ。案内者のある無しで七時間も違ふとは思はれないが、要するにこの惡場は歩きよい所を選んで通るより外はない。自分等は十五米の綱を携帯してゐたので、ビッケルを一本流して了つただけで無事通過する事を得た。も少し水量が多ければ全然不可能といふてよい。孰れにしても十五米位の綱は必ず持つて行く必要があらう。泡瀧から下流の大鳥川は上流に比較すれば實に容易である。常願寺山の對岸で東から來る澤を自分はゴウラ澤と聞いた。サラブチ澤には本流との落合から一町位上手の左岸に熊取りの丈夫な小屋があつた。

序に澤の名を記して置く。葛城山の西に發するのが大カツラギ澤、其北で地圖に等高線の數字が記してある尾根を隔て、同じく西流するのが小カツラギ澤、常願寺山の西を北流するのがネコブチ澤、大鳥川とある川の字の所へ東から來るのが千代ノ澤、大の字の北へ入るのがヤブキ澤、蘇岡の對岸にあるのがユガキ澤、猿倉山の三角點から西に發するものがトトノ澤、その下手はタツヤン澤、小池の記號のある西側のものをニゲン澤といふ。

大鳥川の道は地圖ではネコブチ澤が合流する一つ手前の大きな洲の中に點線が入れてあるが、道ら

しいものはこの洲を過ぎて壊はれた橋の下を徒渉した所より始まつてゐる。

泡瀧から上田澤へ出る日は米が二合位しか無かつたので、朝から粥にした爲め足元がふら／＼して、繁岡へ着いたのは午後三時であつた。日数があまり掛つたので食料の方へ大きな影響を及ぼしたのである。繁岡では鶴岡營林區所の出張所の若い奥さんに頼んで充分に腹を満たすことを得た。然し過ぎたるは及ばざるが如しで、上田澤まで二里の間非常に苦しかつた。

最後の日は最早一步も歩くのが厭で、落合から自動車を呼んでもらひ、鶴岡に出で、友人の勉強してゐる飯塚温泉へ向つた。(大正十五年八月二十四日記)

(追補)繁岡の人の話では近い内にサラブチ澤を登つて茶畑山に出て、戸立山の西面を獨んで大島池に出る道が鶴岡營林區の手で計劃されてゐるとの事であつた。さうなれば大島池と泡瀧との間の悪い所は通らなくて済む事になる。

冷水澤の落合附近に人名が彫刻してあつたのは、この測量の人達が野營した跡である事も繁岡で聞いた。

要するに朝日連峯は雪のまだ確實に残つてゐる四・五・六月に行く方が樂に登山出來ると思ふ。今の所夏行く山としては少し骨が折れ過ぎる様である。

開 聞 岳

竹 内 亮

緒 言

開聞岳は南九州の名山で、鹿児島縣指宿郡^{イシヤ}頴娃村^{エビ}にあり、邦内稀に見る端麗な火山として、古來薩摩富士或は筑紫富士の異名で呼ばれて來て居る(後出、一、二、三、)標高僅かに九二四米(陸、測、五萬

分一地形圖開聞岳號)に過ぎないが、南方山脚海際より屹立し、しかも四邊に之れと比肩すべき高山なく、其の山容の秀麗なると相まつて著しく人目を引き、南海航路の好目標をなし(三、七、一四)、又文人墨客の取材となつたことも多く、海門岳、小富士、金疊山、蓮花山、長王山等の別稱も數多く現はれるに至つた(三、五、七、一四、一七)。

開聞岳はヒラキと訓むべく、音讀してカイモンとするは來由を知らざるものの誤稱である。延喜式には枚聞とありて開聞の古字なる由(七・一八)又ヒラキは平來の意にして地名なり。和名抄に顯徒開聞の二郷に分つとある由である(一・一八)。

この山のことにについては本誌に於てもすでに那珂通世氏、岩佐定一氏等の記事がある(二二、二三)外諸書にも多く散見するから(一、二、三、五、六、七、九、一四)。敢て蛇足をつける迄もないと思ふけれど、今度新登山路が開かれて登降が極めて容易になつたことを報ずると共に、南國の休火山に於ける植物景觀の觀察を記載して置くことも、全然無意義でもないと信じて本稿を草することにした。しかしこの山には本年(大正十五年)十月二十八日にK及F兩氏と共にした視察旅行中の重要な綱目の一つとして、唯一回上下したのみであるから、いろいろ見聞の足りない所が多いだらうと思ふが、それは他日を期して補ふことにする。本稿を草するに當り枚聞神社事務所の示教を受けたること多し、記して以て厚く謝意を表する。

一 火山としての開聞岳及び附近の地形

開聞岳はすでに知られて居る如く一のコントロイデ(富士式成層火山の上に塊狀火山の重つたもの)(一、四、五、九、一四)であつて、七〇〇米の所に階段ありてその上部均一質なる輝石富士岩のアピカルドームをなし、その下部は成層火山の狀をなすバーサルマウンテンである(一、四、五、九、一四)。山の基底の直徑東西五軒、南北四、五軒其周圍一八軒に過ぎない小さなもので、アピカルドームの傾斜四五度に達するが

バーサルマウンテンでは三〇度位に減じて居る。九。がとにかく山座の小さな割に高度が大で一見「尖峯天を衝く」といつた感じの山である。いづれの方面から望んでも殆ど一樣な小富士形で、しかも一層の端麗さをもつて居るが特に西方枕崎附近から又は南方海上から望む山容が美しい。北方山麓近くから望むと二つの山體の繼目にあたる階段が右手に明かに見えて、一寸富士山に於ける寶永山の趣がある。山側に放射谷の發達殆んどなく、地形圖の同高線は山頂を中心とした美しい同心圓として山側を周つて畫かれて居る様、山と地圖とを對照しつゝ幾度も嘆美の眼をみはつたものだ。山頂には直徑約八〇米 一四。の圓形の火口（一、三、四、五、九、一四）があつて周壁を環らし、最高點は北方に裸出せる岩塊上に在る。

口碑によれば開聞岳の湧出は神代の昔で其年次定むべくもない（一七）。又一傳によれば懿德天皇の二十四年湧出の記事神皇正統記に見え（一八、一七）。又景行天皇の二十年十月三日一夜に湧出して池田湖成ると古事緣起に記す由である。一七。が、もとより信すべき限でない。有史以後の信すべき記事は貞觀十六年と仁和元年の二回の爆發の事實である（三、七、八、九、一七）。即ち貞觀十六年三月四日（西紀八七四年三月廿九日）噴火し、山頂缺けて空洞を生じ空穗島の名を得るに至り、災害山麓に及び、山麓に近く鎮座せられた枚聞神社は遂に指宿に遷座あり、時の朝廷太宰府の進言を用ひ此の天災を枚聞神の御祟りなりとして封二千戸を奉じたのである（三、七、八、一七、一八）。仁和元年七月十二日（西紀八八五年八月二十九日）又山上炎上あり（三、七、八、一七、一八）。其後遂に噴火の記事なく一千年間休眠のまゝ極めて靜謐な狀態を續けて今日に及んだ。八。日本噴火誌 八。の記す所によれば、

「山體カクノ如ク小ナルハ噴火勢力ノ發現モ著シカラザルニ因ルモノナルベシ。……此火山ハ爾後一〇三〇餘年間全ク靜謐ノ狀態ニアルモノナルカ或ハ噴火ノ記事ヲ失ヒシモノナルベシ但シ開聞神社再興或ハ改築ノ次第ハ永享九年（一四三七）以來相傳フル所アリシヲ以テ此ノ以前ノ記事ノ缺ケ

タルハ其所ナランモ若シ此以後ニ噴火アリシナランニハ記録ノ徵スベキモノ恐ラクハ存在スルニ庶幾カランカ而シテ曾テ其事ヲ注意セザルハ實際其後ノ四百八十餘年間ハ全ク休眠狀態ニ在リシモノナルベク又此火山ノ外形簡單ニシテ火山作用ノ甚ダシカラザリシコトヲ示ストニヨリテモ前記事ノ噴火後恐ラクハ實際ニ靜謐ナリシモノナランカ（震災豫防調査會報告九二號九〇頁）。

今本火山の構成を文獻^九に見るに南方海岸に露出せる約五〇米の懸崖に於ける觀察と周圍の狀態とにより、沖積紀に初めて噴火し、後玄武岩質安山岩の噴出あり、後七百米以上の部分を破壊してアピカルドームを作り現在の形狀を得るに至つたものであると云ふ。

本邦火山脈の配置からこの火山は霧島火山脈に屬する^{（一、二、三、五）}が、該火山脈の諸火山が大正三年の櫻島爆發と相前後して交々活動したるに、二、三。本火山のみは遂にそのことなく、依然靜かな休眠を持續して居るのはむしろ一の奇蹟である。

本山の南側は山麓直に海波の洗ふ處となつて居るが、北は輕石層の臺狀地で、北方約四軒に池田湖の湛ふるを見る外鰻池、池底、鏡池等の圓形池沼が數多く散在し、いづれも火山現象の產物であるとされて居る^{（四、五、九）}殊に池田湖と鰻池と爆烈火口趾と考へられる山川灣^{（四、九）}が附近の中世層の走向である北東線に直角をなすことは注意すべきことであるさうである。

池田湖は周同一六・五〇軒、面積二・三〇平方軒の出入はあるが略圓形をなした湖水で、湖周絶壁をめぐらし、北半には湖岸平地を見るけれど、南半は懸崖直に水際に迫るところもある。湖周に二三の部落があるが、極めて靜かな感じのする、美しい山地湖である。水面の海拔高は六六米で最大深度は二〇七・五八米に及び海面下一四一・五八米に及ぶ（數字はすべて一〇による）。古來種々の神話を藏し、現今猶舟行と不淨喧噪を忌む由である。七。

鰻池は池田湖の南東山上にあり。周同三・九軒、面積二・三平方軒の稍整正なる圓形湖で、湖岸に鰻

温泉と稱する硫黄泉がある。七。湖面は海拔一二六米であるが湖周は遙かに高く海拔四百米以上に及ぶ部分がある。最大深度は五六・九七で池田湖よりは遙かに浅い（數字の出所池田湖に同じ）。

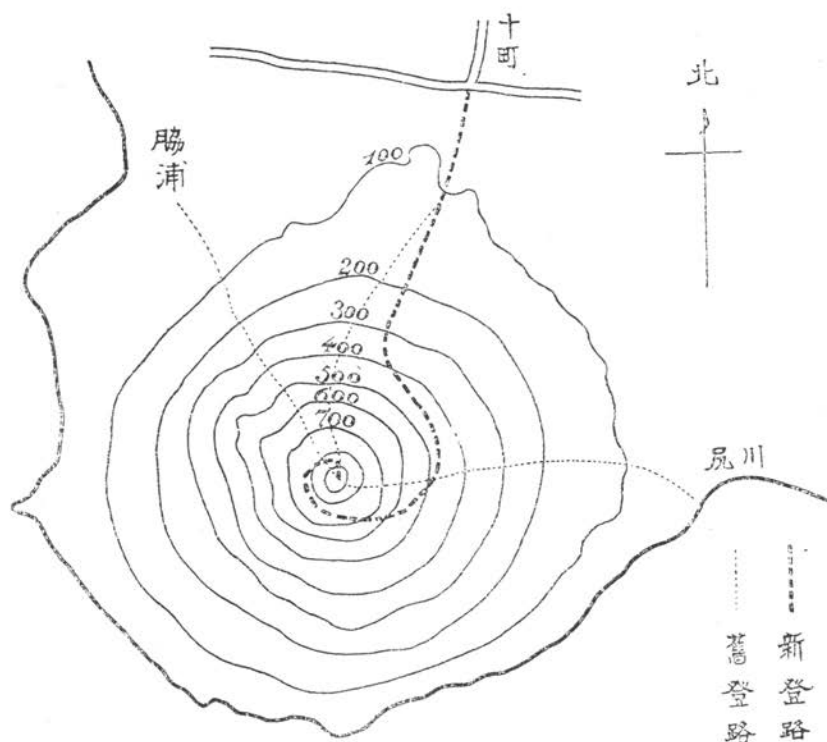
鰻池と稱するは地理纂考七。の記するところによると、昔この池を水田に開かんとして一方の低い處をほつたところ、大きな鰻が横つて其水口を塞いだので其身を割つた所が、それが又池中に入つて生活した。こんなことの爲めその事業も遂に沙汰止みとなつて以來鰻池の名が出たといふ。今でも池中には鰻や鮒の類が多いとのことである。

池田湖の成因については陷落によりしか、爆裂によりしか、南薩地方の浮石質の臺地の成因と共に未解決のものであると云ふ。八。

開聞岳の附近で一寸目立つ山は矢筈岳（三五九米）と大野岳（四六六米）の二つで、三山路南北の一線上にならび、大野岳の編笠狀の山容特に美しい。

二 登 山 路

開聞岳には今年六月二十四日に出来上つた立派な登山路がある（鹿兒島營林署でつくられたもので、竣工の日付は同署の好意によつて判明した。二〇）。路は北麓類娃村十町から直に裾野にかゝり、山の東側より南側を経て、西側にからみ、北側に迫つて一路山頂を直登する蝸牛狀の迂廻路であつて、十町に於ける指導標の記す處によると、山頂迄の總延長は四七五〇米あり、内民有地を通過する距離二二五〇米、國有林地内二五〇〇米であると云ふ。山裾の高度約一〇〇米の地點に木札を立て略圖を畫いて登山者に便してある外、處々眺望よき地點に地名を新稱し丸太造りのベンチを置くなど到れり盡せりである。舊登山路は五萬分一地形圖にも出て居る様に川尻（東麓）及脇浦（西麓）から直線的な惡路があり、在來の記事を見ると主としてこれを記して居る（二、三、六、七、）又十町からも頂上



に直登する舊道があるらしく前記
山麓の木札の案内圖に出て居た。
今度頼娃警察署に照會したる處道
は現に殆んど廢絶し登降するもの
なしとの回答があつた。一九。

この新登山路によれば山麓十町
より二時間餘にして山頂に達する
由であるが、予等は途中道草が過
ぎたため登り約三時間半降約一時
間半を要した。

登路は國道を離れて田圃の間を
行くこと二三百米小部落を過ぎ黒
松の造林地に入る、處々畑を見る。
淺き谷狀の凹地窮まりて少しく登
れば造林地盡きて草原となる。路
やゝ急を加ふ。草原は間もなく荒
れたる常緑闊葉樹林に接する。頂
上への距離二四〇〇米の木標ある
少しく上方に民有地との境界をな
すらしき山腹を一周するらしい切

開けの直交するを見た。それを境にして林相一變し、常綠闊葉樹林は荒らされてない美しさを示して来る。この邊から東側をからみはじめ櫻の古木あるに對して永茂櫻と命じ、池田湖見ゆる故に池田硯と稱する名所を過ぎ、更に登れば東公園と稱する處に出る。樹木急に短矮となり奇岩多く、直下に川尻附近の海波を望み眺望雄大である。この先又密林となり仙人窟の奇勝を経南側から西側に廻はり、又岩樹の姿面白き西公園に出で、岩間の細徑を踏んで最高點直下の北側に出で、しばらくの間を眞一文字に頂上目がけて登り、登路第一の峻坂を経て山頂に達するのである。山頂は裸出せる岩塊で南面した岩蔭に小石祠あり、開聞岳に關する舊記を記した木札が立てかけてあつた。

開聞岳の祭神については地理纂考^七。多くの神名を載せて居るが枚聞神社の記文によれば祭神一定せざれども枚聞神社の攝社として列せる由を記して居る。

頂上に立ちて山頂の地形を見るに爆烈火口趾をなす略圓形をなせる凹地あり、頂上はその周壁の北東部の一角である。頂上と相對して周壁の南西部に稍高い處があつた。一面に常綠闊葉樹林が被つて居るので、神池があるとのことともここからでは見るよすがもなかつた。最高點から此の凹地や山の外側に下る細徑が幾條もあつたがいづれもしばらくで消失して居る。火口趾の凹處は岩塊重疊せる荒地で密林これを被ひ、岩壁蘚苔に被はれて一見物すごい感じのする處であつた。

山頂の眺望はさすがに廣い。日本山嶽志の地理纂考の記事略之れを盡して居るが、脚下にひろがる薩摩半島の大バノラマは興味深く見た。いつか今一度ユックリあのバノラマをひもとき度い願で一杯だ。南方山麓の海波の動きと色とも忘れ得ぬ思ひ出であつた。

この山の登山路は前記の如く山側を螺旋狀に迂廻して居るで、眺望の變化多く、又異つた山側の状態をこの一路線によつて略盡くすことが出来るなど多くの特色を持つて居る。此點は設計者に滿腔の感謝を表した。

登山口にあたる國道筋には濱田旅館其他の旅館二三あり、雜貨、菓子果物をひさぐ店もある。枕崎指宿温泉及枕崎鹿兒島間の定期乗合自動車はここを通過するから交通もいい。式内の古社枝開神社はそこから數町北にあり、池田湖畔迄二十五町とか云ふ。枕崎鹿兒島間の自動車はその湖畔を通行する。

三 植物景觀の概要

開聞岳は南國に位置し長い間靜穩な狀態を保つて來た火山であるので全山美事な樹林に被はれ、見るからに神々しい山容である。しかし北部の山麓は可成りよく耕作されて居て、黒松の造林地の間に畑が可成開けて居て、ソバ、甘藷、粟、陸稻等が植ゑられて居た。十町方面ではこの黒松造林地の上部に第二次的の草原が續いて、ス、キやワラビが多いが反對側である海岸側では一帯に黒松造林に被はれて居る。この區域は高度二〇〇米未滿で終り直に常綠闊葉樹林が續き山頂迄及んで居る。その樹林も北側では民有地に屬する下半部は何度も伐つた跡らしく可成荒れて居たが、上半部は官林丈にさすがによく保護されて居た。高度約八〇〇米位の處で森林の狀態が目立つて變化することに氣付く。即ちこれを境にして下部は巨大なウラジロが林間を埋めて繁茂し壯觀を呈するが、上部ではウラジロが殆んど跡を斷つて岩面樹幹樹梢の嫌なく蘚苔に被はれ、別種の着生羊齒や蘭類の珍種も見られる。とにかくこの邊の高度から常に空氣中の濕氣が増加することを示して居るらしいが、又上部の山體の構造九、一四。にも關係がないかと思はれる。又山頂近い南東側面と北西側面の一部には特に樹木が矮形をなし奇岩の間に蟠居する處があつて前記東公園西公園の名で呼ばれて居る部分は其の一部である。この部分は特に風當りの強い處らしく、山頂の凹處では再び喬木の密林を見るのである。

この樹林を通じて樹齡が若く老木を見ないこと、山頂迄殆んど顯著な植物分布の變化ないことなど

注意すべきことである。強いて變化を求むれば、唯登るに従つてハイノキが多くなる位が目についた。北部九州の千米内外の山地ではその上部ではブナを初めハタウコン、カナクギノキ、クマシデ、コバノミツバツ、ジ等多くの落葉闊葉樹が顯出して、明かに植物帶の變化を示すけれどこの山では未だそれを見る迄に達して居ないらしい。勿論新しい孤立した火山にそんな様な温帶的樹種の分布の連鎖がこの方面には充分でなかつたことも考へられることである。又日本南部少くとも九州の火山の裸地に必らず出て来るヤシヤブシ(一、二、三)も見る事が出来なかつた。この樹種はこの山に近い櫻島火山には非常に多い樹種であることは注意すべき對照だと思ふ。又黒松が山麓に見られる以外松柏科の植物が何もないことも九重山の黒岳の例(二、三)と共に興味をひいた。九州の火山に於ける植物景觀についてはモット種々の材料を集めたいと思ふ。登山家各位から種々の資料を寄せられんことを切望する。猶二三記すべきことは東公園と稱する地域で岩上にイハヒバの多生して居たこと、山頂附近の岩面にダイモンジサウやオサシダの多かつたこと、上部の密林の朽葉層にキリシマシヤクジャウの多かつたことなど興味を引いた。橘の野生があるといふが、遂に見なかつた。

枚聞神社の境内の森林は山麓の原始林の状態を幾分保留して居るものとして貴重なる紀念物である。その樟の老樹にはタニワタリ、マメヅタ、シノブ、ボウラン、サクララン等の熱帶乃至亞熱帶の原始林に見られる着生植物の美事な繁茂を見た。此地方の畑地に多く植ゑられて居る櫨の樹に着生して居るボウランは過去の原始林を逐ひ出された宿無し者が辛うじて見付けた假の宿であること勿論である。

四 枚聞神社と池田湖

枚聞神社は現に國幣小社に列せらるゝ式内の古社であつて社傳の記する處によれば（拜殿に掲示せ

るもの)

『當社創立年代詳カナラザレドモ蓋シ神代ノ末期ニ屬シ延喜式神名帖類娃ノ郡一座ト初見ス其正祀海神豐玉彥命ノ御女豐玉姬命ナルコト尤モ適切ナルベシ(宮司說)太古豐玉彥命天孫ヲ輔翼シ其女豐玉姬ヲ以テ妃トナス(日本紀其他)貞觀年中開聞嶺噴火ノ事アルヤ果シテ此神ノ祟リナリトシ勅シテ封二千戸ヲ奉ズ(三代實錄)元慶六年正四位ノ下ニ累進ス(類聚國史)同ジク九年國言ス天災ノ起ル又是レ同神ノ憤怒ナリト因ニ幣ヲ奉ジ敬祭ス(扶桑略記)寛平七年九月公卿慶雲ノ此社ニ見ハルルノ賀箋及論奏表ヲ上ル(日本紀略)延喜ノ制小社ニ列シ後本國一宮ト稱セラレシガ明治四年初テ國幣小社ニ列セラル』とあり。

又同社務所よりの來書 一八。によれば、

『枚聞神社ハ貞觀ノ開聞岳炎上前ハ開聞山麓ニアリシモ其當時當地ヲ距ル四里位ノ指宿ト云フ地ニ遷座アリ後今ノ地ニ鎮座セラル』

とあり略其の祭祀及沿革を知るに足ると思ふ。

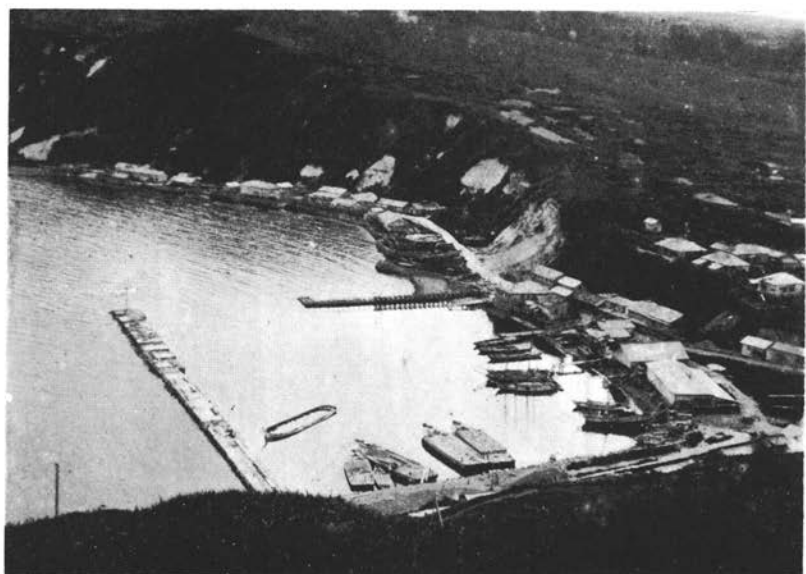
境内老樟鬱蒼として千古の面影を存し、北向せる社殿さゝやかなれども壯嚴である(樟の老樹數株枯死せるを見る。如何なる原因であつたか聞き洩らした惜しいことと思ふ)。外苑の參道長く北に開け、石燈兩側に列なる。この道は枕崎鹿兒島間の定期自動車線路にあたるが内苑の朱塗の木柵には徐行と警笛とを警める嚴かな制札を見た。

枚聞神社の祭神については古來異説多く枚聞神社發行の繪葉書の鳥居ケ原(開聞岳北麓の字名)時代(貞觀炎上以前)開聞宮舊略圖によれば本宮には單に枚聞神として一枚聞神ニハ何レノ神ヲ奉指ルニヤ」と疑つて居る。「二の書(六、七)は大日靈命なりとして居るが、大誤傳なる由である(一八、)地理纂考(七、)の記事によると、

「俗當社ノ祭神餘多ニシテ俗説サマザナリシヲ明治ノ初メ悉ク其俗説俚語ヲ捨テ一柱トシ且社僧等ガ記シ置ケル緣起ナドノ抱



山シホは丘小の景前 山尻利た見らか臺燈岬シベ泊鴛道海北



す瞰下を港泊鴛らか岬シベ島尻利
影撮氏一喜田岡

腹ニモ餘レル類ヒヲ官命ヲ以テ悉ク燒却シテ再ビ妄説ヲ唱フルコトヲ禁ゼリ」

と記して、當時多くの資料を失つたことが知られる。いづれ村上博士、辻博士、菅尾氏等の明治維新神佛分離史料が完成すれば其の間の消息は明かになるであらうが、とにかく資料を失つたことは惜しいことであつたと思ふ。

現今豊玉姫命を以て正祀とする様であるが、豊玉姫命は彦火々出見尊の妃であること古事記(一五)の記すところである。宮崎縣の青島は蒲葵林のあることで有名な處であるが、その青島神社の祭神も彦火々出見尊と豊玉姫と饒筒甕の三柱なりとされて居る(一六)。そしてそれぞれ古事記の龍宮傳説の鴨着島を開聞岳又は青島なりとして居るが、それがいづれてあらうと南方海岸の特殊の地にこのことあるは興味あることの様に思ふ。

開聞神社の參道を北にとつて行くこと約四軒で池田湖の西岸に出る。この道は乗合自動車が行き通じて居るからそれを利用すればいい。水の實に美しい又静かな湖で、湖周の山の様、湖岸の屈曲すべてがよく調和してゐる。

短かい時間を湖岸に下り立つて濱の植物景觀の觀察をした。岩礫の布きつめた狭い濱は直ちに湖周の急斜面に及んで居るが、その間に略四つの植物帶の變化が見られた。即ち最前線の裸出した部分につゞいてヨモギの多い部分があり、間もなくアキグミとクロマツの稚樹が侵入し初むる部分に移行し、遂にクロマツ林に至つて湖周の山地の植物景觀に略一致する。クロマツ林の下にはアキグミ、ホウロクイチゴ、トキハヤブハギ、タマシダ等が多い。

湖水中には水草の發生少なくセキシヤウモとホザキノフサモの點々岩礫間に生ずるのを見たのみである。曾つて鰻池に遊んだ際も湖中にはこの二種を見るのみであつた。(大正一五・一二・一〇稿)

(參照文献)

- | | | | |
|---------|-------|-----------|-------------|
| 一、日本の火山 | 小林房太郎 | 四、地形學 | 辻村太郎 |
| 二、日本風景論 | 志賀重昂 | 五、大日本地誌卷八 | 山崎・佐藤 |
| 三、日本山嶽志 | 高頭式 | 六、鹿兒島縣案内 | 肥薩鐵道開通祝賀協賛會 |

七、日薩隅地理纂考

鹿兒島縣教育會

八、震災豫防調査會報告 九二號

九、地質學雜誌 二四卷

十、地學雜誌 二九卷

一一、阿蘇山 第三回汎太平洋學術會議視察旅行案内書（英

文）

一二、櫻島 同

一三、溫泉火山 同

一四、日本百科辭典

一五、古事記（平凡社普及版）

一六、日向の青島（宮崎縣山林會）青島神社より寄贈

一七、開闢神社記文 神社の指示、繪葉書等の記事

一八、開闢神社々務所よりの來翰二種

一九、穎娃警察署よりの來翰

二〇、鹿兒島營林署よりの來翰

二一、山岳第二年 那珂博士の記事

二二、山岳第六年 岩佐氏の記事

二三、山岳第二〇年二號 竹内の記事

雜錄

○本邦に於ける雪崩の方言

大島 亮 吉

本邦各降雪地に於ける雪崩の方言中、私等の實際に其地に於て聞知し、文献上より知り得たるものには、大略次に掲ぐるが如きものがある。

然し乍ら其れ以前に先立ちて、後に掲ぐる雪崩の方言と其説明に對しての概括的な小序言に暫く筆を費す事を許され度い。

一體本邦に於て全然外國移入の雪崩に對する知識より離隔して、古來より獨創的に且傳承的に本邦各降雪地に存する雪崩に就ての分類は、同じく期せずして瑞西、獨逸、奧大利等の諸國の降雪多き山岳地に古くより存するものと同様である。然し乍ら此れ等兩者間の名稱の如きはその意義に

於て多少とも共通的な點を存することはない。

此等兩者間の共通點と云ふのは主として雪崩其のものに對する分類的の觀察見地の極めて近似せる點である。例せば彼地にては雪崩を分類して古來より Staublawinen, Grundlawinen の二種となし、又多少其の觀察的見地を異にして、 Oberlawinen (order Oberflächenlawinen), Grundlawinen との二種と爲して居る。本邦在來の雪崩の方言を觀るに於て、私等は又其の中にも確然たるものではないが、同じく彼地同様の觀察見地の下に、前掲の二分類同様な分類を爲してゐるのである。例へばワシ、アワ、ワボ、ワアバ、アイの如きは全く彼地で謂ふ所の シタウブラヴィーネン或ひはオーベルラヴィーネンと全然同一種類のものを謂ひ、ナデ、ノマの如きはグルントラヴィーネンに全く該當するものと筆者は思ふのである。然し乍ら私等が其の土地土地に赴いて其地の獵師とか土地の古老に問ふても、其の人々の頭腦では唯漠然と此の二種の分類を何れか一つを感じて居るだけで其れに就て明確なる説明を與へることは出來

参照。

又本邦に於ても積雪期に山中を狩獵の爲めに跋涉する獵人等は、此の様な幼稚な分類法時代の知識以上遙かに正確な實際的な知識を有して居る。例へば彼地にても古くは認められずに居た板狀雪崩（バウルケ及びブルートゲルスに依るシュネーブレッター。ランに依るスラップ・アヴァランシュ）を、友人渡邊三郎大賀道晃兩君の言に依れば、本邦の立山芦峯寺の獵師等の間にも熟知せられて居るとのことである。（大正十五年一月劍岳登山の際）。然し乍ら此れは極く狭き範圍内に於て彼等獵師仲間のみ知られて居ること故、遺憾乍ら其れに對しては何等方言的な名稱さへ與へられて居ないとの事である。

雪崩の知識は勿論本邦に於ける現在の狀態では、大部分は瑞西・獨・奧・英・佛の諸國の研究者の研究に依るものを以て充たされなくてはならぬと思ふ。然し乍ら彼地の其等の科學的研究と共に相俟つて又本邦に於ける（極く其れは前述の如く特殊な小範圍のものであるが）積雪深き山地の住

ない。尤も其等の人々の雪崩に對しての知識は、唯經驗を基礎とした所謂本能的な點もあり、又一つの事象を捉へて其れを説明する爲めには頭腦の洗練せられて居ない爲めか、其の何れかに依りて雪崩に就ての其の人々の分類の説明が困難なのかも知れぬ。此の事情は私等も充分察知して其の説明は傾聽する。然し乍ら未だ本邦各地に於て存する雪崩の方言の上に表はれた分類は、彼地に於けるシュタウブラヴィーネン、グルントラヴィーネンの其れと同様幼稚なる分類法の域を脱し得ないのである。然るに彼地に於ては十九世紀後半より漸次雪崩に就ての科學的な研究が試みられ、其れに従つて其の分類も種々なる見地の下に漸次多種多様となつたが、結局現在に於ては雪崩其のものの氣象學上物理學上等の研究は精細深厚と成り行くに反し、分類法は最近に於けるマックス、エックスリンのオーベルラヴィーネン、グルントラヴィーネンの其れの如き簡明なる古來の分類にまで内容は變れども還りつゝあるのである。此の點に關しては「登高行第六年一二七頁——一二九頁、雪崩に關する文獻のリスト」

民、狩獵者、伐木業者等の間に存する實際的知識をも彼等よりして得ることは、最も私等にとつて直接に效果あり、適切な應用をなし得るものであらう。そして又古來より永き年月間の經驗を重ね、其れが次ぎから次ぎへと傳承せられて來たと云ふが如き彼の狩獵者間の雪崩に對する知識の如きを、私等が外國研究者の科學的な研究に依つて得たる學問的に濾過された知識を以て、新しく解釋を試みて其等彼等の間にのみ人知れず傳承されつゝ埋没し、終には自然的に湮滅に歸してしまふべき尊き知識をば、多少心掛けて採集記録し、以つて私等が「登山者の爲めの一知識」となすと云ふことも意味深き事ではないかと思ふ。斯る意味に於て彼等の間に自然的に造られた雪崩名、分類、雪崩形式の諸要素、雪崩に對する判斷處置等に對する經驗知識を出來得る限り蒐集し、其れを整理して以つて新しい「日本の」ラヴィーネンクンデは造るべきではなからうか。此の爲め本邦各降雪地方に於ける雪崩に對する方言と併せて其れに對する出來得る限り詳細なる説明は最も好き資料となるものである。如上の意味で先づ筆者は此處に本邦各降雪地方に於ける「雪崩の方言に就ての資料を些か蒐集せんと企てたのである。乍然元より經驗淺く且つ此れに對しての採集を企てたる年月又僅かなれば、一に知友諸兄の助力、多くの文獻に俟つ事多大である。と同時に、自分自身のものは單なる記憶又は耳聞に依るものが多いから、此處にほんの心覺えの積りでノートの端を適録したに過ぎないのである。

以上を以て前置の小序言は終るが、扱て後に舉記する雪崩の方言に附した諸文獻を除いての筆者自身の説明は以上述べた所に依つて、其の土地の人々の説明を聞いた上、全く私等の彼地から移入した雪崩の知識に依つて解釋したものであるから、或は誤解もあること、信ずる。又私等には其れに對する採集區域の狹少、文獻涉獵の不足にして寡聞未經驗の所もあること故、此點に對しては大方博雅の士の叱正補足を是非共待ち度いと思ふ。

本邦に於ける雪崩の方言及び其の説明

方言の排列には順序は無いが、大體總稱、表層雪崩、底雪崩の順序となつて居る。

ナダレ（雪崩、或は類雪、雪類とも記す）

通常私等の用ひる總稱名としての「雪崩」(なだれ)とか、或は又一部の人々の使ふ「類雪」(ゆきなだれ)とか謂ふ語も恐らく元來は一地方の方言から來たものであらう。然し乍ら現今學問的に雪崩のことを總稱して記する際には「雪崩」と云ふ語が使用せられて居る。(學問的なものと云つても私の實際に知つて居るものは、岡田武松博士の著「雨」の内に記載せられ居るもの及び八木貞助氏のものだけである。)又一般にも辭書にも多くは「雪崩」と記し、新聞等も皆此の語を使用して居る。斯く専門的にも又一般的にも使用せらるゝ「雪崩」なる語に就て、第一に其の語原を探究する必要もあるであらうが、筆者如き斯の方面の素人には此れを好くし得ない所である。然し此處に極く寡少な範圍に於ける此れに對する文献を以てして見るなれば、其れは前掲せる岡田博士「雨」の中に引用せられて居る彼の鈴木牧之の「北越雪譜」及び橘南谿の「東遊記」の如きは先づ第一に擧げねばならぬものである。其故筆者は先づ此處に其の「雪

崩の語原を知ると云ふことゝ、更に其のこと以外に同時に氣象學者が見たる「雪崩」と云ふものに就ての興味ある見解を紹介する爲めに、左に岡田博士の著書より「雪崩」に關する有用なる條項を轉載して見たいと思ふ。

「山腹に積もつた雪が、多量に滑り下りて谷や麓に落ちるのを總稱して雪崩といふ。北越雪譜に『山より雪の崩類を里言になだれといふ。又なでとも云ふ。按ずるになだれは撫下るなり。なれといふは活用ことばなり云々』とある。雪崩にもいろいろある。風雪崩は山地に大風雪があつて、新しい粉雪が古い雪の上に多量につもり、これが風の力で一時に壓し下されて山腹を滑り始め、粘着その他の原因で次第に量が増して大きい雪塊となつて山麓に下るのを云ふ。雪崩を起す原動力が風であるからかく名付けたのであらう。冬季に多い現象である。底雪崩は冬の山腹に堆積して固まつてゐた雪が、春暖の候となつて滑り落ちるのを云ふ。これは勿論岩石樹木などを運んで來る。底雪崩が起る原因は積雪中には幾分かの空穴があるから、日射が底まで通り易くなり、山腹の岩石に接してゐる雪が融けて水が多少出來る。さうすると面が滑らかになつて雪の重みを支へることが出來なくなるからである。

我國でも山地には雪崩の起ることは屢々ある。南谿子の東遊記には、雪崩のことを説いて『惣て雪國には「ナダレ」と云ふ

事あり。又「アワ」と云ふ事ありて、年々人の損する事なり。

「アワ」といふは冬多し、「ナダレ」は三四月の頃にあり。「アワ」といふは雪最中降時分に山上の木の下より雪泡一つ落つるとき、其「アワ」段々こぼり落つるに従ひ、雪こかしなすることく、次第に大に成り、麓に至る頃は大山のごとくに成りて落下する。是に當るものは大木も根こぎに成り、折悪敷通りかゝる時には人馬ともによけさくるにいとまあらず、みづんに打碎かるゝ事なり。「ナダレ」と云ふは春の末になり、地中より陽氣出るに従ひ、數丈積りたる雪の下よりゆるみ附て、山上よりなだれ落るに、其勢に動かされて、其邊の雪一同に崩れ落ち、川も谷も埋む事なり。人馬の聲又は人聲にてもなだれ落る事ありとなり、是にうたるゝ者即死するのみならず、數十丈の雪に埋もれて雪消滅す迄は知る人もなし。この二つは北地の人の恐るゝ事なり。」と云ふてゐる。「アワ」の事は、北越雪譜にも越後にては「ホフラ」と謂ふ。又所により「なほて」「わや」「あわ」「はわたり」と言ふ由を記してゐる。(理學博士岡田武松著「雨」一三八頁所載)

以上の如く橘南谿に依つても既に「なだれ」と謂ふ語が用ひられて居る。飛驒、信濃、津輕、越後、會津の諸國等で使はれる「なで」の如きは恐らく「なだれ」から轉化したものであることは前掲の鈴木牧之の北越雪譜の中にも少し言及してあるが、又其の發音上の類似からも容易に推斷を許さ

れるものではないかと思ふ。尙同文中に出でたる「アワ」、「ホフラ」、「オホテ」、「ワヤ」、「ハワタリ」、「ナデ」等の方言に就ては後に個々に就ての説明を附して擧げる事とするが、橘南谿の前掲の引用文よりして見れば、正しく「ナダレ」は「雪國」に於ける底雪崩を稱する「ナデ」或は「ナゼ」と同系統の方言である。何故底雪崩の俚稱たる「ナダレ」が一般雪崩を總括しての名稱となつたかに就ては、主として春に起る底雪崩は通常山間の山腹、谿底の村落地近くに於ては最も屢々惹起するものにて、又其の現象も他の雪崩に比しては顯著であり、災害も大であるからして其れを以て雪崩總體の代表的なものと爲したのであらう。此れは尤もな事である。山地深く、高山に屢々行く狩獵者、登山者以外の者にして普通に雪崩として見る現象は多くは春の底雪崩である。畠の背後の急斜面、川沿ひの道路の上の崖等小規模な傾斜地の到る處に於て、深雪地方では春先きになると此の底雪崩が見られる程である。「ナダレ」を更に丁寧にして「ユキナダレ」と云ふ。信濃北安曇地方で

の比較的知識階級の人でも唯だ「ナダレ」と云つては了解せず、「ユキナダレ」と云つて始めて了解したと云ふ事實があつた。又津輕地方に於ては全然山間の人に、「ナダレ」と云ふ語が通ぜず、手眞似で説明して解つたと云ふ友人の経験も聞いて居る。

アイ(エイ) モロアイ (越後、會津)

「アイ」は越後古志郡、北魚沼郡及び會津の南會津郡、大沼郡の一部に亘つて行はれて居る方言である事は確實に筆者の経験した所である。然し其れ以上の分布區域に就ては確に云へる程の材料は現在有しない。

「アイ」は上層新雪雪崩の總稱である。筆者の前掲の越後及び會津の兩地方で聞いた際の説明には「新しく降つた雪が硬い古い雪の上を上に上りする」と云ふ事を等しく共通的に云つて呉れた。そして冬季に多いと云ふ。然し四月上旬硬いクラストの上に新雪(スプリング・パウダー)が約五寸積つた朝に筆者が土地(五味澤)の者

に聞いて「今日はアイが出るか」と問ふて見たら、「今日が出る」と答へた。「アイ」の少し轉化した、アとエとの中間の發音を用ひて居るのを檜枝岐で聞いた。強いて片假名で表はせば、「エイ」となるものである之れは北上州の戸倉でも用ひる。

「アイ」は一般に上層新雪雪崩を謂ふが、更に山地の事情に詳しい獵師等は此の「アイ」の中に又一種の上層雪崩を認めて居る。即ち其れは「モロアイ」である。「モロアイ」は越後北魚沼郡入廣瀬村五味澤で聞いたものであるが、同地方での積雪期に於ける山地の事情に詳しい者の間には廣く通ずるものと思ふ。「モロアイ」は上層舊雪雪崩を謂ふ。土地の者の説明する所に依れば「アイ(上層新雪雪崩)でもなく、ナデ(全層舊雪雪崩)でもない中間のものを謂ひ、舊い雪の上を這りをするものを謂ふ」との事であつた。此の事を知つて筆者の感じた事がある。即ち其れは本邦でも雪崩に對して獵師山人等直接雪崩に對して何うしても警戒注意を行はねば

ならない境遇の者は實際上の必要より、又多くの経験よりして雪崩に對しては高等な實際的知識を有し、同時に鋭利な觀察を加へて各雪崩の特徴を知り、其れを分類して名稱を附して居ることがあるといふことであつた。實際「モロアイ」の如きは可成り雪崩に對して鋭い觀察を爲さねば見出し得ぬ程度の微細な現象のものである。然し勿論「モロアイ」(上層舊雪雪崩)は雪崩の中災禍も大でなく、重要な種類のものでもないが、免に角それに特別に名稱を附して認めて居る所は驚くべき事である。筆者は特に本邦に於て此の「モロアイ」の如く眞に山地に於ける雪崩に詳しいか、山地に生活して雪崩を経験する事多い獵師、樵夫の間の狭小な範圍内にのみ行はれて居る高等な雪崩の分類に依る特殊な「方言」を知り度いものと希つて居る。恐らくまだ、其れ等はある事と思ふ。

二三の雪崩の方言に於ける其の語原は其の雪崩の特性を説明した「動詞」から來て居る事が多く、其れに次いで「形容詞」である。例へ

ば Lawine は Schweizer deutsch にて其の語原は伊太利語の labi から出で、labi は「滑べる」gleiten の意であると云ふ事である。本邦での顯著な例は「ナデ」の「撫でる」、「ナゼ」の同じく「撫ぜる」、「ネユスリ」の「ネユスリモツテク」、「ジユスリ」の「地を擦る」、「シロアへ」及び「クロアへ」の「白くあへる」、「黒くあへる」、「ワボウ」の「上匂ふ」等が前者「動詞」の場合の例であり、「ワカシ」の「若い」が後者「形容詞」の例である。然し他の多くは全く現在の所では不明である。此の「アイ」も又不明である。詳しく土地の人に聞いて見たが「アイ」が同地方の方言で何んと云ふ意義の事かは解らなかつた。「モロアイ」の「モロ」に於ても又同様であつた。若し其れが同地方方言として現代語中に唯だ繼承的に使はれて居る事は、其の語の遠い傳來のものであることを考へしめる。

アイは又越後魚沼地方にも用ひられ居るものの如くにて、昭和二年一月十五日發行の時事新報所載「雪國探見」湯澤温泉の條に於ては、ア

イに關して興味ある俚人の言が記されてある。其は單に方言の紹介に止まらず同地方に於ける俚人の「アイ」に關する觀察の一端を窺知するを得るを以て、左に原文を抄出する。右は湯澤溫泉に於る湯槽中にての俚人の會話を其儘記者の移せしものである。

「おめえ、時にナセ（なだれのこと）があつて仕事が三日も出来んそうだね」「フン、ナセはまだ早いが、先達ての南の氣ぢや無理もれえやな」「でもな、ありがたいことにや近頃はアイはとんとないやれ」「そうすな……」「アイつて何てすれ」「渡木にねむつてゐた一人が突然口を入れた「おめえ放の衆かれ、ハ、ハ、ハ、無理もないわ、アイと云ふ奴はな、え、と、ナセはな春先になると水氣を含んで土にくつついて落ちてくるもんだがな、アイちゆ奴はこの一月が時でな、え、か、風でアイが出来ん、アイが風を起すのだな、風が起す（起ると？）とえらい勢力となつて山の輕雪をすつかりこきおろして吹きまくる奴さ、風が運ぶナセのやうなもんさ、そうすけ、谷へ吹きおろした奴が方向かけて（かへて？）又吹き上げもするさ、アイつておめえ此世の地獄だな」

「十年前の、そうだ大正六年の丁度一月九日だつたぞ」一人が待つてゐたやうに早口に言ひ出した。「夜の十一時頃さ、三俣（南魚沼郡三俣村―筆者註）のアイは思ひ出してぞつとす

るな、何しろ三十戸の家屋と百三十名の人間を全滅さしたんだぞ」「あの晩のことは言ふもこわいな」「おめえ三俣のもんかな」「そうよ、日本水力會社の工事で工夫が四百人もは入つてゐたんだもの、一軒で二十人も死んだな、それがアイだもん屋敷を掘つても家は何處へ飛んだかわからん、死骸の掘出しに四五千の人が三日もかゝつたぞ、それがおめえアイだもん家をもみつぶしたのだぞ、そうすけ死骸を掘出すとこなくさ」

右に於ては「アイ」は益々單なる表層雪崩全體の意よりも一層狭く、主として表層乾雪雪崩を言ふが如くである。文中「え、か、風でアイが出来ん、アイが風を起すのだな」以下に於て俚人が、同雪崩は乾燥せる粉狀雪粒の比較的相互間に強き内部摩擦を有し居るが故、通例雪崩を形成するが爲めには力強き外部的衝動（多くの場合風）を要し、一度雪崩を形成するや粉雪中に含有せる空氣の微粒及び雪崩自身の激動の爲めに生ずる激烈なる振動風に就きて稍々バラドキシカルに説明し居れるは面白い。後半三俣にて一月九日午後十一時に惹起せしアイは、冬雪崩の晝夜を問はず狀況到るや惹起する好例に

して、勿論其は夜間に起りし突然の強風の結果であらう。

ワカシ (陸奥)

此の方言の採集地は八甲田山麓の青森縣上北郡法奥澤村字淵澤村にて友人田中三晴君の八甲田山に登山せし際(大正十五年一月)採集せしものである。同君の聴取したる其の土地に於ける説明に據れば、上層新雪雪崩の總稱であるらしい。即ち、古い雪の上にある若い雪(新しい雪の意)が迂り落ちるのだから、ワカシと云ふのだと、其の名稱の起因を古老が教へて呉れたそうだが、仲々面白い説明で在ると思ふ。但し古くから其の土地で云ひ馴れた純粹の土言であるとは、何んとなく叙上の説明の上では首肯し難いものがある。尙今後の精査を待ち度い。

ワボ、ワボウ、ワボー 附、ワアバ (信濃)

ワボ、ワボウは信濃北安曇地方、上伊那地方に行はれる。私は現に北安曇郡北城村四ツ家にて此の方言「ワボ」を實聞した。榎谷徹藏氏の安曇地方の山岳語を集めたもの、中にも此のワ

ボが含まれ、又爐邊叢書「小谷口碑集」(小池直太郎編)附録方言集の中にも同じく此の方言が收録されてある。前者榎谷氏は大町附近の方言として集められたものらしく思はれ、後者小池直太郎氏編の「小谷口碑集」は信濃國北安曇郡佐野坂以北の小谷・四ヶ莊(ヲタリ・シカジャウ)と呼ばれた地方を包含したもので、新村名で言へば、神城(カミシロ)北城(ホクジャウ)南小谷(ミナミオタリ)中土(ナカツチ)北小谷(キタオタリ)の五ヶ村を含んだ範圍を其の採集區域として居る所から見ると、此の兩地方一帯に分布する方言としてワボを見ることが出來よう。此の地方以外に於ては安曇郡有明村、及び上伊那郡美和村戸臺(以上は漆山巳年夫君に據る)に於て行はれて居る。ワボは信濃一帯の方言かも知れぬ。

ワボ、ワボウ、ワボー(大町營林署報告に據る)は上層新雪雪崩を謂ふ。(上層乾燥新雪雪崩並びに上層濕潤新雪雪崩との兩種を含むものと思ふ。)然し乍榎谷徹藏氏並びに小池直太郎氏の

説明に依ると單に上層濕潤新雪雪崩を謂ふが如き説明である。試みに左に兩氏の説明を收録する。

『積年の堅く固り着いた雪の上へ、軟く積つた新しい雪が、雨とか溶解作用とかの爲めに、雪類となつて下り下ること。是れは普通の雪類と違つて、硬い雪の滑かな表面を這るのだから恐ろしく猛烈な勢で、危険中の更に危険なものと云ふ。』(『山岳』第六年所載)

「あほ。あほ。高山ナドニ消殘ル積年ノ雪ノ上ニ、新ラシク降り積ツク軟カイ雪ガ雨、其他ノ作用デ溶ケテ雪崩トナツテ下リ落チルヲ云フ。普通ノナダレト違ツテ、硬イ雪ノ上ヲ上ルノデアルカラソノ勢猛烈ニシテ危険中ノ危険ナルモノナリ。」(『爐邊叢書』小谷口碑集) 小池直太郎編附錄方言集二〇四頁)

此れ等兩者の説明は殆んど其記述に於て差異なき程のものであるが、筆者の右説明文中に側點を附したる部分よりして此れを見れば、ワボは全く上層濕潤新雪雪崩でなくてはならない。然し筆者の四ツ家で聞いた所に依れば、其れは單に上層雪崩を一般に謂ふものにて、特に又上層乾燥新雪雪崩を謂ふが如くでもあつた。ワボなる方言が上層濕潤新雪雪崩と上層乾燥新雪雪

崩とを細別する程高等なものでないことは容易に察知出来る所からして、ワボをば一般に上層新雪雪崩を謂ふものと見て過誤は無いと思ふ。

田中薫氏著「登山」(日本體育叢書第十五編。一五一頁)に於て又同様の見解からしてか「表層雪崩」と記して居られる。同氏の言ふ如く「ワボ」なる方言が「上旬ふ」(右は故神保小虎教授の言に據れるものなりと田中氏より筆者宛の私信があつた)と云ふ動詞から出でたとすれば、又上層雪崩全般を謂ふものとみる事が出来よう。(私等の今日外國の雪崩研究の文献上より得たる知識よりして、特にその分類上の點よりして、此れ等方言の雪崩の種類を決定的に謂ふことは到底不可能である。餘り彼地の知識は分類的に見ることに進んで居るのに、本邦の方言の如きは、其れに比しては又餘りに或る種のものは漠然とした幼稚なものであるからである。筆者記。)

然るに大町營林署の鐵道省宛の報告に依ると、該地方ではワボ(特にワボ)と記された。は表層乾燥新雪雪崩を稱するものである。

即ち右報告を左に録せば、

「ワボ」トハ春暖前即チ主トシテ冬期中ニ積雪面ガ日光ノ直射ノ爲メニ一部融雪セルヲ夜中嚴寒ノ爲メ表面鏡ノ如ク平滑ニ凍結セルヲ、更ニ降り積リタル場合ハ自重ノ爲メ滑走シテ一時ニ落下スル類雪ヲ稱スルモノニシテ其速度最モ大ナリ。

「ワボ」ハ十二月一月頃ニ多シ。

「ワボ」ハ凍リタル粉雪トス。

「ワボ」ハ凍雪面上ナルニヨリ地表ノ被害ナキモ、樹幹樹枝ヲ挫折スルコト多ク、最モ被害大ナリ。(以上原文の儘)

以上の如くワボは耳聞、文献、報告で多少異なつて居るが、最後に筆者はワボは主として表層乾燥新雪雪崩を謂ふものと観たいのである。何故ならば此れが主として惹起する數多く、且つ被害の度も大であればである。實際的に見て表層濕潤新雪雪崩は其の被害大でなく、又惹起の場合も少なく、且つ春季に多ければ底雪崩の爲めに壓倒されて餘り住民の眼には顯著なものと映じない傾向があるからである。

ワボと語音の甚だしく類似せる方言として「ワアバ」と稱するものがある。此れは「ワボ」

の分布地方と隣接して居る信濃戸隠山で行はれて居る方言である。筆者は實際に此の「ワアバ」を聞いて居ない。唯だ文献上から知り得たのである。恐らく此の「ワボ」と「ワアバ」とは語根上では同じものが其の土地土地の訛りから斯く轉訛して多少發音上の相違を以つて行はれて居るのではないであらうか。兎に角此の兩方言の間には何等かの緣故あることは確かであるとの見地から同項に收録したのである。「ワアバ」に關する文献と云ふのを擧げることにする。此れは確實に私等の今日で謂ふ乾燥新雪雪崩の巨大なるもの(其れが表層乾燥新雪雪崩なりや又シュプレヒヤーの云ふ Grundschaublawinen なりやは不分明だが)を謂ふものであることは其の報告に據つて認めることが出来る。雪崩の知識の爲には價值ある記録と言はねばならぬ。

戸隠山のワアバに就て(地學雜誌、八木貞助氏)「戸隠山麓海拔一四〇〇米の地にある戸隠神社の奥社の附近は年々六尺以上の積雪あり。二月上旬に方言ワアバと稱する一種の雪崩

あり。その原因次ぎの如し。大雪と共に卓越せる西北風（所謂外あげ）（註。そとあげ。うちあげ。白馬岳登山案内ノ人夫等ノ間ニ行ハレル言葉デ、うちあげ（内上）ハ信州方面カラ吹ク風、そとあげ（外上）ハ越中方面カラ吹ク風タイプ。内上ハ天候靜穩ヲ意味シ、外上ハ天候ノ順調デ無イ微候トシテアル。前掲「小谷口碑集」附錄方言集一七二頁ニハ以上ノ如ク「外あげ」ニ對スル説明ガアル。】の連日吹き荒みたる後、靜かに風ぎたる折に頂上附近の岩角の蔭等より堆積せる雪が急斜面を崩落する際に、強大なる氣流を起して斜面の雪をも伴うて愈々其勢を増大して一帯五〇〇米を落下し來るもの是れなり。晝夜の別なく二三回相續くることもあり。先づ大氣の振動にて戸障子等はブウーガタガタと鳴り始め、次ぎて一大鳴響と共に雪は凄まじき勢もて吹き落るなり。時に岩石を伴ひ、山毛櫨、榊等の大樹をも根ごとくして持ち來る。ワアバの襲來する谷は定まり居りて多少藥研狀を呈し、其底部は滑かにして、樹木等をも繁茂せしめず、地形上一種の特徴を示せり。現社務所は谷に於ける難をさくるため高き尾根の上に建てられたり。彼の信飛山脈の如きも此地と同様に特殊の地形を形成することあるは疑ふべからず。（地學雜誌第三〇五號一〇三頁八木貞助氏報告）

ワシ（山形縣一帶）

此の「ワシ」は同じく、「ワボ」の如く冬に主として惹起する乾燥新雪雪崩を云ふのである。

そして其れは勿論上層乾燥新雪雪崩のことであらうが、此の方言の意義は其程嚴正な専門的な雪崩の分類には關する所はない。筆者は此の方言を五色温泉附近にて聞いたのみで、此れが果して同地方の何れの範圍まで廣く分布された名稱であるかを遺憾乍ら未だ探究し得ぬ。（山形高等學校校友會山岳部の報告に依り山形縣全般には通用するらしき事なるを知り得た。）

ワシに對しての同地で耳聞した説明の中に筆者の記憶に残る所で重要な特點を擧げるならば、（一）此れは餘り危険なものではない。（二）此れは軽い、粉狀雪が斜面から落下して來るものである。（三）從つて若し是れに遭つたならば杖を緊く足下の雪に突き差し、じつと上から飛下し來るワシに堪へてゐれば、身體は持ち去られることはない、と云ふ様な事であつた。唯是れのみの説明に依れば、此のワシは明らかに餘り大ならざる冬の乾燥新雪雪崩を言ふことゝ明らかに推測し得る。此を餘り危険ならざると云ふことは、五色温泉附近の村落近くの山地に

は餘り大なるものが惹起せざることを證するものとも思はれるが、然し筆者に此のワシを説明した人（炭焼）は五色温泉附近の吾妻山群の山地には多少足を入れ、滑川谷にも詳しい人であつたから、或ひは村落附近の低山地より以上奥深い高度の山地に於ても、彼の附近には大なる乾燥新雪雪崩が惹起し得る如き地形、斜面の餘り多からざることを證するものともなり得るかも知れぬ。併し乍ら又一面其の説明者の其れは一定の範圍内に限定せられた経験だけに依るものであるかも知れぬ。例の「ワシビラ」（登高行第六年一四四頁拙稿参照）と云ふ俚稱を有する雪崩地の滑川谷にあることを教へて呉れたのも同じ人であつた。斯る方言を附された小字名は珍しい。

アワ（飛驒、越中、越後、信濃、越前、若狹）

アワに就ては前掲せる橋南谿の東遊記にも述べられてあるが、既に其れに於ても「アワ」と「ナダレ」との二種あることを記し、「アワは冬に多く、ナダレは三四月頃にあり」となし、又更

に「アワ」に對しては「アワと謂ふは雪最中降る時分に山上の木の小梢より雪泡（クラインシュテエフェル氏の稱せし雪毬 pelotes de neige とか雪球 Boule de neige との名稱を以つて記せしもの）に該當するものであらう。筆者註）一つ落つるとき、其のアワ段々ころび落つるに従ひ、雪こかしするごとく、次第に大に成り、麓に至る頃は大山のごとくに成りて落下る。是に當るものは大木も根ごぎに成り、折惡敷通りかゝる時には人馬ともによけざるにいとまあらず、みづんに打碎かるゝ事なり」と記して居るが、此れに依つて觀れば明瞭に「アワ」は濕潤新雪雪崩の特徴を備へたものである事を知る事が出来る。尙同文中には、樹梢より落ちたる雪の小塊を雪泡と記し、又後には「アワ」と書いて居るが、察するに「アワ」と云ふ雪崩名は斯る樹梢より落つるが如き雪の小塊を「アワ」と稱し其れに起因する雪崩なるを以つて従つて其れも又「アワ」と稱するに到りたるものであらうか？「アワ」が表層濕潤新雪雪崩なる事は左の報告に

依つて知る事が出来る。

富山營林署報告鐵道省宛。大正十五年四月三十日着

あは。濕つた重い雪が上層のみ押出す。

雪のみ落ちる。

氣溫高き時又は雨多く降つた時等に起る。

中新川郡立山地方に行はる。(以上原文の儘)

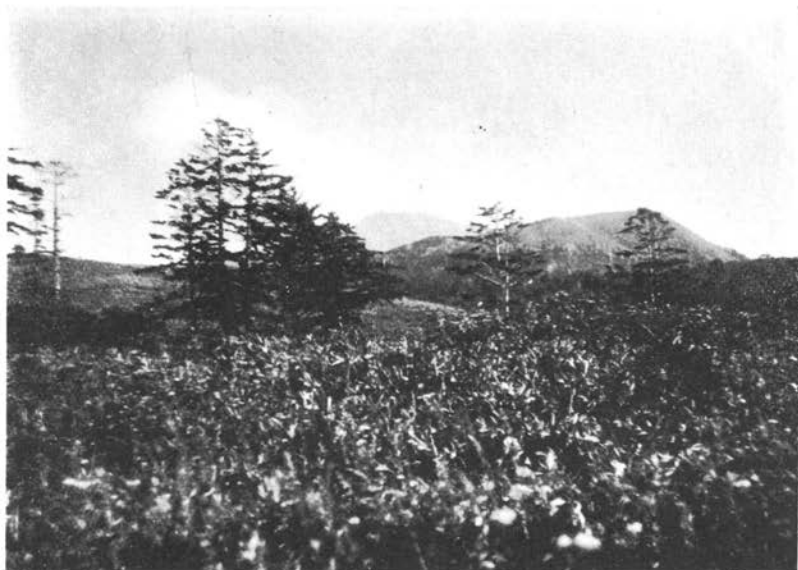
然るに地方に依りては「アワ」は表層乾燥新雪雪崩を謂ふ。即ち飛驒吉城郡(松井憲三君私信並びに鐵道省宛船津營林署報告)及び若狹、越前(鐵道省宛名古屋鐵道局運輸課旅客掛報告)の如きは其れである。

然るに又「アワ」は又單に雪球や雪毯の類のみを稱する地方もある。信濃北安曇地方の小谷・四ヶ莊地方では後者の意義に用ひられて居る。爐邊叢書「小谷口碑集」(小池直太郎編)附録同地方方言集の中に「アワ」の條を説明して左の如く記して居るのを見ても其れは解る。

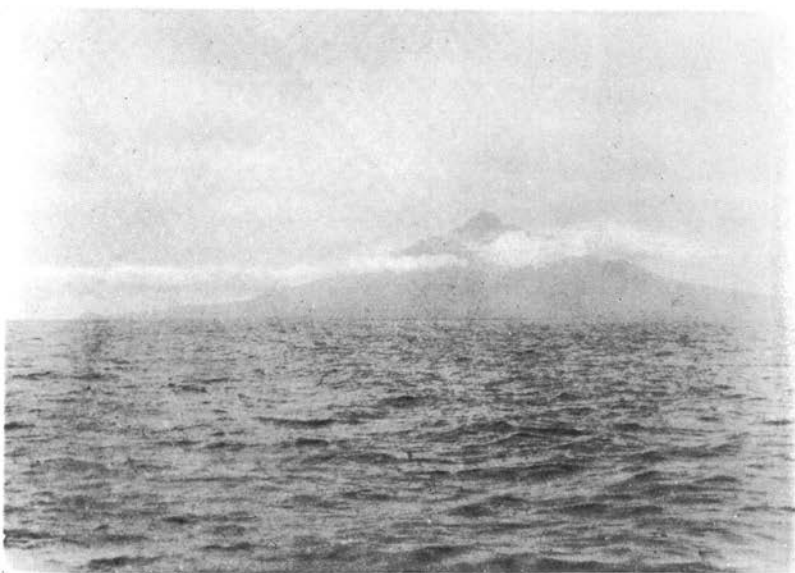
「あは^ワ。山ノ傾斜面ニアル木ノ梢ニ積ツタ雪ガ日光ノ爲メニ融解シテ水分ヲ含ンデ傾斜面ニ落チルト、ソノ面ノ積雪モ水氣ヲ含ンデ居ル故、落チル勢デ雪塊トナリゴロ／＼ト轉リ落チナガラ雪コロガシノ如ク次第ニ大キクナツテ落下スル。其

ノ雪塊^ワあはトイフ。コノあはノ出來ル場所ヲ見ルト大小無數ガ落チ重ツテ居リ、コレガ出來ルノハ極僅カノ時間デア^ワル。(前掲同書一七〇頁)

既に前記の如くに又同じく此の「アワ」なる方言の用ひられて居る飛驒吉城郡上寶村地方にて筆者の聞知したる所に依れば、其れは乾燥新雪雪崩を謂ふものであると推測し得る點が多かつたが、其後蒲田谷柄尾の松井憲三君の好意に依りて同地方に於ける「アワ」に就ての實際を調べて貰つた所筆者の考へと同じであつた。小島鳥水氏の「日本アルプス」第四卷一五七頁「雙六谷及附近の山民語」の一部たる「同地方雪氷に關する語」の中には、「アワ」に就ては唯だ單に「雪のなだれ」と云ふ簡單な説明の記しあるのみにて、其れ以上の詳細に亘つてのことの記してないのは今日にして甚だ遺憾である。然し乍ら、「アワ」なる方言の其の分布區域は大體に於て越後、信濃、飛驒、越中、越前、若狹に亘つて居る。其故多少各地方に於て其の意義に對して廣狹差異があるを免かれぬかも知れぬ。松井憲三



(右)山ソマ及(央中)山尻利た見らか泊鴛島尻利



山尻利た見らか沖港深島文禮
影撮氏一喜田岡

君私信及び船津營林署の報告其他は左の如くである。

アワ（新雪の押出し）

新雪が粉雪の時押出すものにて、十二月より一、二、三月上旬迄にあり、其の最も多く有る時期は月中旬より二月中であります。極く寒い時に押出すものにて、別に定まつた時はなくして、唯だ一時に粉雪の一尺以上積りし時は必ず押出すものです。此れは降雪の間は何回ともなく押出し、雪のやまない間は時々押出します。押出す時餘り音なきものです。澤の上の岩壁の處へ（北穂高岳の瀧谷に面した様な箇所）は餘り大きくならず、小さいのが何回となく粉雪の降る間は絶へず出て居ります。澤の奥の少し緩い處（南澤及び槍の肩より槍平堂迄）は何回も押出さず、若し押出した場合は甚だ大きいものです。速力は雪崩の中で最も速いものにて又最も危険であります。押出せし跡にても少し見つけた（見慣れたの意、筆者註）人てなくば知らずに居る人があります。上高地の常さんは穴毛谷にてアワに遭難せし事があります。（松井憲三君筆者宛私信）

右は筆者にて多少用語文意を整へた事をお断りします。此の私信は同君一人の経験にてはなく、同地の多數の経験ある人々の言をも参考しての報告なれば充分に信用あるものです。

船津營林署回答（鐵道省宛大正十五年四月十七

日到着）

アワ

飛騨吉城郡一帯ニ通ズ

冬季降雪ノ時起ル

雪質ハ粉雪ニテ煙ノ如ク雪タケ落チル

主トシテ風ノタメニ起ル。（以上原文の儘）

名古屋鐵道局運輸課旅客掛報告（鐵道省宛大正十五年六月一日到着）

アワ。表面一部煙の様に雪だけ落ちる。

若狹、越前一帯に通ず。（同）

ウワスベリ（飛騨吉城郡）

此れは表層濕潤新雪雪崩の一種にして、春三四月頃に最も多く、クラストの上に新雪が四五寸積り、日中となりて日光照射の爲に少し雪が「ニメリ」だしたる時表層の押し出すものである。速力は餘り早くなく、又大なる音もしない。大なる雪崩にもならない。

以上ウワスベリに關しての資料は主として吉城郡上寶村字枳尾在住の松井憲三君の筆者の請に應じて筆者宛に着實に蒐集されて送られた同地方での材料に據つてゐる。同地方に於て是迄

全然缺除せる二三の方言が此の爲に採録する事を得たるは筆者の大なる喜びであつた。同地方での雪崩の方言は數多く、其の俚人の面白き觀察を窺ひ得るもの尠くない。右に就て同地方の雪崩に就ての纏つた記述は後出「エキナエ」の條下に記する事と爲した。此處では唯だ直接筆者の爲め喜んで材料を蒐集提供して下さつた松井憲三君の好意を筆者は深く感謝する次第である。

エギレ、エギレスベリ (飛驒吉城郡)

エギレは雪庇の崩落に誘導せられし雪崩を謂ひ、エギレスベリは春晩く積雪が充分水分を持ちたる時雪面上に裂罅を生じて雪層の一部分の剝離落下するもの、即ち、春のグルントラヴィーネの小なるものを謂ふのである。兩者は共に大なる雪崩は形成しない。雪崩の分類上からは其れ故何とも確實に云ふ事は出来ぬが、勿論前者の場合には表層雪崩が多いであらう。且つ雨天の際か春の温暖なる日の午後には惹起するものであるが其の數は當然多くはない。エギレは其の雪

崩の惹起原因が雪庇の崩落と云ふ特殊な點を捉へて名づけたものである事は以上の説明で充分了解せらるゝであらう。即ち雪庇が「ちぎれ」(エギレ)て落ちる、と云ふことより其の語は起つてゐるのではないであらうか。又エギレスベリは厚き雪層が「ちぎれて滑る」(エギレスベリ)と言ふ特殊な崩落の原因が其の稱呼と成りたるものであらう。或る點からしては面白き名稱である。(以上の資料は蒲田谷栃尾村在住の松井憲三君の筆者に與へられしものに據る)。

ナギレ (飛驒吉城郡)

此れは飛驒吉城郡地方に行はるゝものにて、其の説明は同郡上寶村栃尾村在住の松井憲三君の説明を以て先づ當んとするものである。左に同君の私に對する通信を多少文辭を整へて掲ぐるならば、『此れは樹木無き少し急なる雪面又は樹木疎生せる斜面に於て、春三月頃最も多く惹起するものである。即ち其の惹起する原因、状況は、日中雪の「ニメリ」たる時急なる雪面を輪標にて横に踏み切る時に其の踏み切りし踏跡

の空間へ上方より積雪が押し來て、其の勢にて全雪面を押出し、其の踏み切りたる通過者はナギレと共に下方に落ちる事がある。此の雪崩の惹起すべき端緒には必ず人が通るか又は羚羊が通るかの直接原因を與ふる事が無ければならぬ、然して其の原因の與へらるゝや否や直ちに惹起するを以て最も危険なる雪崩である。乗鞍山麓平湯溫泉村山旅館若主人は此の雪崩に遭難せしことがある。又羚羊がよく谷底にナギレの爲めに落されて死んで居ることがある。』と言ふのである。

此れに就ては小生の経験する所更らに無き故何とも言ひ難きも、其の惹起原因に就きては一の疑點を存するものである。其れは前記の如き狀況の下に於て惹起すべき雪質は濕潤新雪の際は有り得ぬと思ふのである。但し其の下層に硬きクラスト、或は滑り易き草の斜面ありて表層新雪面の下層面と粘着して居ないならば或は斯る直接原因與へらるゝに於て、雪崩を形成する事もあるべしと思はる。

ワヤ（信濃、越後？）

「ワヤ」に就ては既に上掲岡田博士の著「雨」の中に引用せられし北越雪譜の中にも載せられてあるが、筆者の實聞せしものに就きて左に少しく記する事とする。

岡田博士の「ワヤ」に關する引用文より推察せば、疑ひもなく「ワヤ」は表層雪崩の方言である。稍々重複を厭はず更らに此處に掲げるならば、

「アワ」の事は、北越雪譜にも越後にては「ホフラ」と謂ふ又所により「なほて」「わや」「あわ」「はわたり」と言ふ由を記してゐる。

となつて居るより、「ワヤ」は即ち「アワ」（表層雪崩の中最も廣汎なる範圍に亘りて使用せられるもの）と同義の方言の如くである。又「ワヤ」は越後に用ひらるゝものゝ如く察せらる。筆者の此の方言を實聞せしは長野縣下高井郡秋山の屋敷村の老人よりであつた。同地は信濃に屬するも地理上越後との交通多きを以て「ワヤ」は又越後の隣接地方にも用ひらるものと察するに難

くない。或は越後より來たつたものであるかも知れぬ。屋敷村の前記老人の筆者に迄説明し呉れたるものは、一般の他地方に於ける説明と異なりて甚だ興味深きものであつた。乍然極めて

方言混りの説明にて筆者には好く了解せられざる節々もありたるが、確實なる所は左の如き點である。即ち該地方に於ては雪崩に關する方言は「ナデ」と對立して「ワヤ」との二つありて、「ナデ」はジワジワと滑べつて來るので避けられるが、「ワヤ」は恰も鐵砲の如くドンと音を聞けば、もう助からぬと謂ふのである。此れは全く雪崩落下の速力に重きを置いたものである。筆者の表層のみの落下か其れとも雪崩全體の落下かと云ふ事を問ひても全く其れは問題にせず、唯だ落下速度の遲速を其の區別の根據として居た。固より全體的に觀て表層雪崩は底雪崩より其の落下の速度迅きものなるを以て、落下速度の遲速又兩者の分類標準の一となり得るものである。是れ彼の地に於て Gerold Meyer von Knonau の雪崩を同じく雪崩速度に標準を置き

て Schlechlawinen と Schlaglawinen と爲せし分類と思ひ合せて一種の感興無き能はざるものがある。

ネーチ (金澤附近)

此の方言は村本久一氏が金澤附近の類雪に就て記したる「氣象集誌大正七年七月號」に由りて林學博士新島善直氏が其の著「新編森林保護學」下卷六四六頁に引用する所に從ひて記するものである。即ち「ネーチ」は上表類雪(筆者の記する表層雪崩)にて、發現當時より山岳鳴動するも「アワ」の如く速力大ならず、是れが爲めに樹木家屋等の倒壊埋没等は前種(即ち「アワ」と同じく大木をも根こぎにする力を有すと。此の「ネーチ」は同引用文より推察し、前種たる「アワ」の條の説明文と對照してみる時は、明らかに表層濕潤新雪雪崩に該當する方言たる事が認められる。

ギチ (金澤附近)

此の方言も同じく前項「ネーチ」と共に誌されたるものである。即ち其の説明に曰く、「ギチ」

と稱するものは山頂山腹よりの雪塊が地面に落ち、回轉し下る間に大さを増すもので雪が少なき時は地表までを顯はすと云ふ。然して此は大なる害はないと云ふ。以上の説明に依りて此の「ギチ」は前述せし「アワ」の一部として用ひらるゝ雪塊の轉落して渦巻狀と爲りて落下するものを稱するものである事が推察せらるゝ。尙ほ序でに村本氏の記する所に從ひ金澤地方に於ける雪崩に關して參考の爲めに記するならば左の五種である。

ナ デ (後出「ナデ」の條參照。所謂底雪崩を謂ふ。)

ア ワ (前出「アワ」の條參照。)

ネ ー チ (前出)

ギ チ (前出)

板類雪 (此れは方言ならざるものゝ如く、又

其の説明に依りて見るに、今日余等の謂ふスラップ・アヴァランシュにも非ず。其は積雪が大部融け去り木蔭谷間等に残つて上面板の如く凍つて居

る雪の崩れ落つるを云ふと。)

ホ ヤ (群馬)

「ホヤ」は前出鈴木牧之の「北越雪譜」引用文中にも見えたるものなるが、同方言に關しては友人漆山巳年夫君の筆者に供せられたる資料に據れば、同君は赤城山西麓たる群馬縣勢多郡敷島村在住の俚人より同地にては、「ホヤ」なる方言は雪崩の中渦巻狀を成して轉落し來るものを稱し居ると聞いたとの事である。越後地方の一部にて稱する「アワ」と同様のものであらう。尙ほ「ホヤ」は越後にてても使用せられて居る方言らしくあるが、其の分布區域は筆者には現在明らかでない。

ナ デ ナ ゼ ナ ツ (攤出 鳴出と當字す)

ナデ及びナゼの分布區域は到つて廣く、現在の所では最も本邦に於ける雪崩の方言中廣汎な分布區域を有つて居るものではないかと思はれる。筆者の知る限りに於ても、北部日本から中部日本の各降雪地方に亘つて分布して居る。現に筆者及び筆者の友人並びに文献に依つて見る

と、

陸奥。ナデ（八甲田山麓青森縣上北郡法奥澤村字淵澤。田中三晴君の言に據る。）

會津。ナデ（只見川沿岸、南會津郡、大沼郡一帯。實聞。）

越後。ナデ（栃尾郷十ヶ村。實聞。及び三條南郷村。爐邊叢書「越後三條南郷談」〔外山曆郎著〕附錄方言集に據る。）

信越國境一部地方。ナデ（名古屋鐵道局運輸課旅客掛回答）若狹、越前一帶。ナデ（前に同じ）

越中東部より越後西部一帯。ナデ（前に同じ）
富山縣下新川郡黒部地方。ナデ（富山營林署回答）

長野縣南安曇郡安曇村方面。ナデ（松本營林署回答）

越後地方一帯。ナデ（親不知驛長回答）
新潟縣上越地方。（高田市高橋翠郊氏回答）

高田市一般
中頸城郡一般

東頸城郡一般、ナゼ

刈羽郡一般

西頸城郡一般

西頸城郡西半部。ナデ

富山縣ノ東北ノ一部。ナデ

北上州一帯。ナデ（赤城山大沼湖畔赤城旅館

猪谷六合雄氏回答）

利根郡片品村戸倉。ナデ（實聞）

山形縣一般にして近縣も使用するらしい。ナ

デ（山形高等學校校友會山岳部回答に據る。）

長野縣北安曇郡一般。ナデ（大町營林署回答）

長野縣下高井郡秋山。ナデ（筆者實聞）

岩手縣上閉伊郡小國村江鑿。^{ミツナギ}ナデ（西川不二

雄君に據る。）

群馬縣勢多郡敷島村（赤城山西麓）。ナデ（漆

山巳年夫君に據る。）

福島縣耶麻郡奥川村字彌平四郎（飯豊山南

麓）。ナデ（波木井六男君に據る。）

山形縣西置賜郡南小國村字長者原（飯豊山北麓）。ナデ（波木井六男君に據る。）

信濃北安曇郡地方。ナデ ナデ(「山岳」第六年所載榎谷徹藏氏の「同地方の山岳語」並に爐邊叢書小池直太郎氏編「小谷口碑集」附錄方言集一九二頁に據る。)

飛驒大多和村。ナデ(友人青木勝君の言に據る。)

等の各地に於て確實に行はれてゐるが、勿論此れ以上に廣く行はれて居ることは充分想像出来る。

ナデとナゼは全く同系の方言である事は前掲「ナダレ」の條下に於て述べる如くで、多くは其の何れでも通ずることは筆者も経験した所である。其れには發音の上での類似が極めて顯著であるからでもあらうが、實際に於ても此の二つを並べて記して居る文献もある。前掲淵澤、會津、栃尾、飛驒大多和其他の諸地方では「ナデ」と云ふ方が一般であるが、北安曇地方では「ナゼ」の方が一般らしい。何れにしても「ナデ」と「ナゼ」は全然獨立した方言ではないことは確實である。(ナゾは「山岳」に振假名として附いて

居たものである。)ナデ、ナゼは所謂彼地のグルントラヴィーネン(底雪崩、全層雪崩)を謂ふ。前掲榎谷徹藏氏の「山岳語」としての説明にも、又小池直太郎氏編「小谷口碑集」中の方言集の説明の中にも、共にナデ、ナゼに就ては前者は「雪類のこと」、後者は「雪崩(ナダレ)」と極めて簡單なる説明にて何等此れ等の雪崩の特徴を示すが如き説明はしてない。筆者が越後守門山南麓五味澤にて聴取した所の「ナゼ」の説明は「秋より降り積つた雪が、すつかり落ちて土肌が露はれるもの」を謂ふとの事で、好くナゼの特徴を説明して居るものと思つた。又越後栃尾近郷、及び會津只見川の谿谷一帯にては毎年ナデの出る個所を「ナデバ」と稱して其れに地名、小字名を附して「何處其處のナデバ」と明らかに名を附されてゐるものもある。洵に好く其の特性を言ひ表した適當な方言で、彼の瑞西の山地で使はれてゐる Lawinenzug (雪崩路) Lawinensstellen (雪崩地)と云ふ如き語にじっくり當てはめらるるものである。尙以上の他に筆者の得たる諸文

献報告回答に表はれたるナデに對する記述は皆所謂彼地の Grundlawinen (古き意味の) や Altschneelawinen (Paulke, Rutgers) 及 old snow avalanche (Arnold Lunn), Grund lawinen (Max Oecklin) に依りて記述せられたる以上の雪崩の特徴特質の一部をば説明してゐるものである。筆者は本邦地方に於ける雪崩に對する一般の知識の程度觀察點の相異等其他の事を觀るために左に其れ等を收録する事は決して無駄ではないと思ふ。

名古屋鐵道局運輸課旅客掛回答 (大正十五年六月一日)

(1) ナデ (當字傑出、鳴出) 「ナデ轉げる」又は「ナデ突く」と謂ひて用ひらる。(信越國境一部地方の方言としてのもの)

(イ) 惹起時期 早春の季。

(ロ) 該雪崩の特質 濕つた雪、砂利雪 (春雨に會ひ後偶々凍つた雪が日光の爲に解け始めザクザクと小砂利の様な粘り氣無き雪)。全體落下する。南風多く雨氣ある日 (暖かき日)

俳人一茶にナデに關する句あり。「沙汰なしにナデのこけたる山家かな」と。(此の場合のナデは屋根雪の崩れならん。該地方にては右をもナデと稱せばなり。筆者註。)

(2) ナデ (若狭越前一帶の方言としてのもの) 主として春先。濕つた重い雪が泥土樹木等地ぐるみ押出す。雨又は氣溫高き時。

(3) ナデ (當字撫、雪類) (越中東部より越後西部一帶の方言としての回答)

二月以後。濕つた重い雪。落下の際は岩石樹木土砂等と共に押出し落下す。震動を生じ暴風を起すことあり。降雨又は氣溫の上昇永續する時。(Sic)

親不知驛長回答 (大正十五年四月二十日)

ナデ (當字撫。撫下すと云ふ意)

主として春先二三月頃。濕つた重い雪が地ぐるみ又は岩石混りて押し出し又は落ちる。岩石樹木同時に落ちる。暖かくなると地熱と太陽(雨)で上下から解けるため。(Sic)

尚ほ大正十一年二月十日金澤驛運輸事務所發行に係る親不知青海間大雪崩事故記録の一部分を抄録せば左の如きものがある。

『大正十一年二月三日午後七時五十九分親不知青海間勝山隧道西口ニテ第六五列車六輛編成機關車及最前部「ホユミノ」隧道内ニ入りタルトキ大音響ト共ニ山側山腹高サ四〇〇尺ヨリ約一、〇〇〇坪ノ雪崩ヲ受ケ客車三輛埋沒破壊死傷者一二〇名(内死九〇負傷三〇)ヲ出セリ。』

次ぎに彼の中越は鹽澤の人、鈴木牧之が著す所の著名な『北越雪譜』前後七卷(天保年間作)

禮文島桃岩北面と西海岸の一部



岡田喜一氏撮影



より同じく「ナデ」に關する部分の記載を抄録せば左の如くである。

『二月のころになれば陽氣地中より蒸し解かんとする時、地氣と天氣との爲に破て響をなす一片破るその響大木を折るが如し。これ雪類の崩なり。山の地熱と日の照すとによりてなだるゝ所となだれざる所とあり(中略)なだれんとする雪の凍つてその大なる八十間以上少なる九尺、五尺あまる大少数百千……幾千丈の山の上より一度に崩れる響百千の雷を爲し大木折れ大石倒れて此時はかならず暴風力をそへて粉に碎くる砂礫の如く雪を飛ばせ白日も暗夜の如し、その慄しき事筆紙に盡し難し、この雪類に命を捨てし人、命を拾ひし人我が見聞したるを次の巻にしてしるし暖國の人の話とせん云々。』

大町營林署回答

「ナデ」トハ普通ノ雪崩ニシテ春暖相加ハリ地表ノ部分融雪ヲ初ムレバ急斜地ニアル積雪ハ自重ノ爲メ一時ニ安定ヲ失ヒ崩落スルヲ言フ。「ナデ」ハ三、四月及高山部ニテハ五月ニ多シ。「ナデ」ハ濕氣ヲ有スル重雪ニ多シ。「ナデ」ハ地表ヲ滑走スルニヨリ表土・岩石・樹根等ヲ共ニ持チ行クモノ多シ。(52c)

松本營林署回答

ナデ(類雪)。主トシテ春先三月末ヨリ四月。濕リタル雪ノミ押出ス。全體落チル。雨又ハ氣溫高キ時。日光ノタメ暖メラレ尙且地温上昇ノ結果土地ニ接スル部分解雪シ空隙ヲ生ジ滑走スルモノナリ。(52c)

富山營林署回答

なて。濕つた重い雪が地ぐるみに押出す。全體泥、岩石等と共に落ちる。氣溫高キ時又は雨多く降つた時。(52c)

以上の他尙ほ二三の記録を得られたれど省略する。此れに依つて觀ると「ナデ」は現在秋田、福島、山陰の降雪地方を除いては殆んど全國的に廣く分布せられたる雪崩の方言なる事は確められる。(北海道には勿論方言として存在するものはない。)若し方言を以つてグルントラヴィーネンに代る日本の名稱とするには此れを「底雪崩」(岡田博士に據る。)又は「根雪崩」田中薫氏の提唱せんとせるもの)なる譯名新名ある以外に「ナデ」を用ゆる事は或は適當ではないかと思ふ。以上は自然的に最も廣く、古くより分布せられた方言を保存すると云ふ意味に於てである。併し乍ら筆者は名稱統一とか新名作製には慎重にして多くの人々と計らねば爲し難く、行はれ難き例を知る。又新意義を附しての新名(例へば Paulcke の Schneebrett の場合)の提唱、古名の保存等の一切に關しては何等此處に

於ては關與しない。現在有るが儘、行はれて居るが儘の名稱方言を其儘に知り、錄せんとするのみである。

ノマ (越中、飛驒)

ノマは廣く越中、飛驒を通じて分布して居る方言である。立山山麓芦峯寺の人々に依つて、又蒲田谷の人々に依つて使用されて居るのを私等がよく經驗した所である、所が「ノマ」は越中では單に雪崩と云ふことを總稱するに用ひられて居る様である。此れは立山山麓附近でもそうであるし、同じ越中でも富山平原から飛驒境ひに寄つた低い山地方面でも同上の如く使はれて居る。明治四十二年より四十五年迄筆者は富山縣婦負郡八尾町に少年時代の三年程を過ごした事もあるが、「ノマ」以外に雪崩に就ての方言を聞かない。越中には「ノマ」以外に雪崩に就ての方言はないのではないかと思ふ。然し特殊なる雪崩に對する方言は勿論平原に近き山地に住む一般人が有する事なきは既に前にも述べた所であるから、或ひは「ノマ」以外にも極く小範圍

に行はれて居るものがないとも限らぬ。尙越中にては屋根より滑べり落ちる小なる雪崩(ノマ)をも「ノマ」の範圍に入れて居る。一例として筆者は筆者の伯母から小學校へ積雪期間通學するに際して小學校の屋根(主として瓦葺なる爲め常に降雪後二三尺もある雪層を滑落せしめる。此の爲めに壓死せる小學生徒の例が多い。現今にては一般に「雪止め」の裝置あれば安全である。)から落ちる「ノマ」を氣を付けよと毎日の如く注意された。都會に育つた少年には仲々「ノマ」の危険が當初は了解出来なかつた記憶がある。飛驒蒲田谷に到つては此のノマは劃然としてグルントラヴィーネに對して用ひられて居る事は其の土地の人々の云ふ所に依つて充分に確證し得る所である。

文献上に於ては同じく前掲「日本アルプス」第四卷一五六頁「雙六谷及附近の山民語」中の「同地方雪氷に關する語」の中に於て、小島鳥水氏は「ノマ」に就て次ぎの如く記して居る。

「雪なだれの地ぐるみ押し出すをいふ。當字にて、野間と書

す、國學者山崎弘泰の、飛驒白川より白山の紀行「山分衣」(天保十二年十一月)にいふ。「九郎五郎、桂谷なんといふあたり、野間の押し出したるあととなりとて、大きな木どもの、打折れたるも、根ながらなるも、いと多く、魚舟の保木、ひる河原、きんちぐみ、なんといふ所とも、いづこも、あやうく、かしこき地にて、こゝかしこ、野間の押し出たるところもあり、云々」(右側に筆者が假りに黒點を附したる條は好く春に於けるクルントラヴァーネンの特徴とする點を叙せるものであると思ふ。(筆者註))

尙同文中山崎弘泰の「山分衣」の飛驒白川より白山の紀行なる事を觀れば、「ノマ」の分布地域は大略飛驒一帯に擴布のものである事が其れに依つて推察せしめらる。

然るに左記諸回答を得るに到つて「ノマ」の分布區域は大略判然せるものゝ如くである。

飛驒地方一帯(高山營林署回答)

飛驒吉城郡一帯(船津營林署回答)

越中一圓(富山營林署回答)

伏木附近(名古屋鐵道局運輸課旅客掛回答)

即ち此れに依つて「ノマ」は越中、飛驒一帯に大略分布せられるものと見る事が出来る。尙

越中には「ノマ」以外「ナデ」「アワ」が一部分に分布通用せられて居る事は該方言の條下に於て記したる所である。然し乍ら筆者は未だ實際經驗して居ぬ。「ノマ」の訛り「ヌマ」となるは筆者も經驗せる所である。「ノマ」の雪崩としての現象に關する記述は前記の諸回答共前項「ナデ」のものと全く同様なれば省略する。

ユキナエ (信州島々、飛驒吉城郡)

此れは信州島々で使はれて居るものを、先輩松本信廣氏と同行して筆者が大正七年春に最初に上高地に行つた時人夫から聞いたもので、此處では松本兄の「密林」中に記したる説明を其儘轉載する。『雪と共に岩石樹木を根こぎにして落下するもの。速力はやく危険なり。底なだれと稱するものなるべし。』(登高行第一年密林參照。)

尙飛驒中尾村の中島作之助は「ユキナエ」と好く類似して居る「ユキナリ」と云ふやうに言つて居る事を友人成瀬岩雄君から大正十五年四月になつて聞いたが、筆者は彼れからは「ノマ」

と云ふ方言のみしか聞かなかつた。其後中島作之助より同君宛の報告に依れば、「是は信州の或る地方で言つて居る事で、彼の地方ではユキナリの外、ユキナエとも言つて居る」との事であつた。然るに其後蒲田谷朽尾村の松井憲三君に右の方言に就て精査を依頼したるに、意外にも「ユキナエ」は同地方に於てはグルントラヴィーネを稱するものに非ずして、濕潤新雪雪崩を稱するものである事を發見した。左に試みに同君の右ユキナエに對する説明の大體を記するに、「ユキナエ」とは三月中旬より四月にかけて風無き際新雪の岩壁及び樹枝上に積りたる時即ち木花（樹氷、霧氷の事、筆者註。）「ヒツレ」「岩ヒツレ」（斜面の上に聳えて居る岩壁の段や裂目に引つかゝつて居る雪の謂ひなり。）が日光の照射に依りて「ニメリ」（日光に照射されて雪が水分を持ち粘着性を有する方雪氷に關する語）たる時重くなりて融け落ちると下の雪面の雪もニメツテ居るため直ちに粘着して雪球となりて落下し、初めは小なる雪球に初まるも終に大なる雪塊となり、更に其れが落

下の途中割れ、他の雪塊を數多伴ひて雪崩を形成するものを言ふ。此れに依りて見れば「ユキナエ」は甚だしく橋南谿の記したる種類の「アワ」と類似するものと言はなければならぬ。然るに同地方では「アワ」は「新雪が粉雪の際押し出すもの」との同じく松井君の報告あれば、同地方に於ては「アワ」と「ユキナエ」とは全く同一種類に非ずして、前者は乾燥新雪雪崩を、後者は濕潤新雪雪崩を謂ひ、其處に嚴然たる分類を有して稍々高等なる雪崩に對する見解を見せて居る。中島作之助、松井憲三兩人の報に於て相異する所は根本的のものには非ず、單なる分布區域に就てである。故に此處には問題にならぬ。由來同地方は山勢急峻にして降雪又多ければ、從つて又雪崩に對する里人の知識經驗多き事本邦他地方に比して大である。そは同地方が屢々前出せる如く比較的多數の方言を有し、以て雪崩に對する一種の分類をなし居るを見ても解せらるゝであらう。其故小生は此處に同地方の雪崩に對する俚人の知識の大體を方言より

一括して些か記し、以つて其の煩雜を避け、出来る限り明らかに同地方の雪崩に對する分類を觀てみたいと思ふ。此地方での雪崩の分類に對しての見方はまちまちである。一定の標準がない。即ち次ぎに掲ぐる點を以て以上の諸種の雪崩に對する方言は生じて居るのである。

(1) 雪層の表層だけか其れとも全層の崩落かと云ふ點より(例へばノマとウワスベリ)
(2) 落下狀態より(例へば塊狀落下の點より

ユキナエ)

(3) 雪の乾濕新舊より(例へばアワとノマ)

(4) 惹起原因の極めて特殊なる點より(例へばエギレ及びナギレ)

(5) 崩落狀態の特殊點より(例へばエギレスベリ)

其故此地方の雪崩の分類は學問的な分類法の上からは甚だ程度は低く、價值も無いかも知れぬが、俚人にとつては甚だ便利なものであるらしい。其點に就ては他の場合に於て詳しく記したいが、要するに其處は田中薫氏が其著「登山」

(日本體育叢書第十五編)一四五頁「雪崩の種類及分類」の條に於て、『一般に學術的に完全なる分類と登山家(同時に山間の居住民も又登山者と同じカテゴリー中の者であらうと思ふ。筆者註)に便なる分類とは自ら二様になると思はれる。』と言つた事實の實際的な例である。扱て左に私等の今日知れる最も詳しく分類に當てて此地方の雪崩を分類して觀るならば斯くの如くである。

アワ

表層乾燥新雪雪崩

ウワスベリ

表層濕潤新雪雪崩

エギレ

(主として表層舊雪雪崩の場合

多かるべし)

ナギレ

表層濕潤新雪雪崩

ユキナエ

表層濕潤新雪雪崩

ノマ

全層舊雪雪崩

エギレスベリ(全層舊雪雪崩の小なる場合)

此に依つて觀れば比較的本邦でも雪崩に對する知識の高度なりと思はる地方に於ても、結局左の三種の雪崩しか未だ的確に認めて居ないと

謂ふ結果になる。

表層乾燥新雪雪崩

表層濕潤新雪雪崩

全層舊雪雪崩

エギレとナギレに就ては未だ充分なる經驗、

資料なき故、此の分類に對しては確實なるものと認めぬ事にした。

ネユスリ（信濃大町）ネコスリ、ジコスリ、

ネコソリ（新潟縣中頸城郡）田中薰氏著「登山」

（日本體育叢書第十五編大正十四年七月刊行）

の雪崩に關する條下一五一—一五二頁に於て、雪崩の方言が擧げられてある。其中には重要な資料がある。此處に擧げたる「ネユスリ」の他恐らく同系の方言として「ネコスリ」、「ジコスリ」が擧げてある。皆既に此れ等の

方言を唯一度聞いただけでも容易に想像せらるる如く、底雪崩を稱するものである。「ネユスリ」は「ネユスリモツテク」の動詞から來たものであることは同氏の附したる説明に依りて知れるが、更に「ジコスリ」は勿論「地をこする（擦

る）」の意味の名詞化したものであらうし、又「ネコスリ」は更に容易に「根をこする」であることは充分其の説明からして想像し得らるゝ事であらう。其故此等の方言は極めて底雪崩の特性を言ひ表して、以つて其れからして方言的名稱が形造られて居るのである。洵に適當な且つ巧みなる方言と云ふ事が出來よう。「ネユスリ」以外は「ネコソリ」を除いて同じく大町地方に行はるゝものであらうか、其の用ひられて居る地名が明示してないから解らぬが恐らく同様同地方に行はるゝものであらう。「ネコソリ」は越後・中頸城郡（其後に田中氏の筆者への私信に據れば、同氏は關溫泉にて聞かれたる由である。）に行はるゝ方言と記されて居る。

總て以上此の項に集めたる方言に就ては、筆者の全然實聞經驗する所無く、且つ又田中氏のもの以外には寡聞にして未だ其れに關しての一の文献も見出し得ない。従つて筆者は田中氏に乞ふて更に詳細なる説明を乞ふて左の如き報を得たるも、同氏又未だ以て見聞する所尠なしと

の事であつた。非禮乍ら同氏の筆者宛の私信の一部を録す事とする。

『(前略) ネユスリ、サコスリ、ネコスリ、ネコソリ等は本邦中部に最も廣い分布を持つた方言ではないでせうか。そして其の各々は「根ゴト」さらつて行くと言ふ言葉がほんの僅か變化してゐるので、一寸ぼんやり聞いたのでは區別は解らない位だと思ひます。ネコソリは小生は先年關温泉で聞きしました。ネユスリは針ノ木遊りて人夫から聞きしました。ネユスリモツテクと言ふ動詞は甲州の西山温泉遊りて雪ではなく山崩れの場合に用ひられたのを聞きました。(後略)』

筆者は尙ほ今後の精査を此の種の方言に期するものであるが、此處に筆者の推察を許さるゝならば、此の同系統に屬して、分布區域廣汎なる方言が純雪崩の方言では無い如く思はるゝのである。既に前掲田中氏私信の一部にも其の一證だと思ふべきものがある。

ネコソリと同じく「ネコ」と謂ふ語の前に附せられし方言に、山形縣西置賜郡南小國村字長者原にて友人波木井六男君の採集せられしものに「ネコジキ」と謂ふものがある。同君は右の方言を長者原在住の俚人より聞知したるものな

るが、其れに據れば、同地方に於ては雪崩を總稱して「ナデ」と稱し、「ナデ」を分ちて二つと爲し、新雪の上層雪崩を「ワス」(「ワシ」のシがスと訛りて發音せられしものと思ふ。(筆者註。))と謂ひ、舊雪の底雪崩を前掲の「ネコジキ」と稱する由である。前出雪崩の總稱として「ナデ」を擧げたと共に、又「ナデ」が各種雪崩の中最も顯著なる種類の雪崩たる春季の底雪崩にも代稱せらるゝ事は、之又「ナデ」の項中に記せし所なるが、此の波木井君の筆者の爲に提供せられし資料に依りて、「ナデ」を雪崩の總稱として實際に用ひ、春季の底雪崩に對しては「ネコジキ」なる特別の方言を用ひ居る事を知り得たるは注意に價ひする事である。

シロアヘ クロアヘ (越後小千谷地方)

此の二つの方言も前掲田中薫氏著「登山」中の雪崩の項の方言中に掲げられたものである。

同じく底雪崩を稱するものである。前掲の「ネユスリ」「デコスリ」「ネコスリ」及び「ネコソリ」が「底雪崩の雪層全部が崩落すると云ふ特徴と

する所をとつて方言の依據する所となされたのと同様又此れも底雪崩が主として其の崩落に際して土砂岩石樹木を混じたるデブリイを押し出すと云ふ一特徴を捉へて名づけたものである。同氏は此の二つに就ては「土砂混入多き底雪崩」を謂ふものとの他説明する所はないが、勿論容易に想像せらるゝ如く「シロアヘ」は其のデブリイ中土砂岩石等の比較的尠なきものにてデブリイの比較的白色狀を呈するものを稱し、「クロアヘ」は土砂岩石の混入多くして黑色狀を呈するものを言ふのであらう。然し乍ら筆者は未だ此の方言に就て實際的の聞知を爲して居らぬ。尙此他に所謂グルントラヴィーネンに該當する雪崩を稱する方言には左記のものがある。

ズリ (若狹越前一帶)「ナデ」と同種のものである。謂ふ。(名古屋鐵道局運輸課旅客掛回答)

ユキナギ (信濃木曾谷須原附近)

ユキオシ (當字雪押し) (信濃木曾谷費川附近並びに佐久小海附近)

ナギ (羽前)

ノタ (越前鶴來町以南山間村落)
ノタレ「野々市町附近」

大略正確に其の雪崩の種類の分明して、又其の分布區域或は採集地分明の方言は、以上しか現在筆者は此れを收録して居ない。然し乍ら此の他に未だ確實なものではないが、其の方言名だけ分明のもの、或は行はれて居る場所等の解るものに左のものがある。

ホーケ、ガタガタマキ、ハルキバ、石ブト、
ヲマキ (以上小松驛以南山間地方一帯)。

ホフラ (アワのこと) オホテ、ハワタリ。

而して以上は何等現在筆者の其れ以上知識なきものである。大方の教示を俟つ次第である。

右を以て雪崩の方言に關しての筆者のノートは盡くるものであるが、勿論以上を以て本邦諸降雪地方に於ける方言の總べてと言ふ事は出来ぬ。樺太北海道は方言はないとして (事實上無き回答も得て居るが)、本州の中奥羽、山陰兩地方に於ける資料は甚だ以上のものでは物足らぬものである。且又屢々前出せる如く小範圍の狩

獵者、伐木業者間にのみ通ずる特殊の方言の如きは今後は非共蒐集記録すべき多くのものがあらうと筆者は信ずるものである。

附記。筆者の爲め間接直接に資料を提供して呉れた筆者の交友知己諸兄の名は其の都度出来る限り記して置きましたが、又最後に改めて感謝致します。尙間接乍ら筆者の爲め鐵道省關係の資料を快く提供し下さった茂木慎雄氏には特に謝意を表します。

○利尻、禮文島見聞雜錄

岡 田 喜 一

此稿は大正十四年八月二日から九日間、小樽の港を後に利尻島に渡り、利尻山の頂を極めて、鷺泊村に下り、更に禮文島に數日滞在し稚内に去つた氣まぐれ者が一人旅をした時のノートから二三抜萃したものである。

利尻島の住民の歴史

もと／＼島の住民の歴史は調べて見やうといふ目的もなかつたし、又古籍、記録等についての考證も出来なかつたので、詳細は知り得なかつた。唯鷺泊村に泊つた折、島の人々から聞き得たことを記すに止まる。

利尻島には今から約百四十年前に既にアイヌ人が本泊（島の北方、鷺泊港の西北）に住居してゐたと云ふ。本邦人の移住は何時頃であつたか島人は知らない。然し慶應三年頃には最早住んで居り、女も三人來て居つた。其中の一人の足立（宛字）と云ふ老婆當年八十二歳で今に生存し、札幌南五條七丁目に住居してゐるといつてゐた。此老婆は慶應二年に初めて島に來た。後一度北海道本島へ戻つて、更に明治元年に歸島し、今から八年前に札幌へ戻つた者だといふ。明治二年の頃にはアイヌ人以外に二十人（中、女六人）居り、明治十二年に至つて小屋造りの家が八十四戸建てられ、雲上屋（島に居た支配人の様に云つてゐるが、千島土人と交易する爲に根室に運上屋を設けたと「千島探檢實記」^{四十}頁にある、それと同じものではなからうか。）が島の實權を握り、當時男八十二人、女十六人居たといふ。

現在では可成り多くなつてゐる。アイヌ人も未だに本泊にゐる。燈臺もあり、發電所も、錢湯、理髮店、菓子屋も見られ、バナ、が店頭に見受け

られた位に開けてゐる。けれども島に住むもの、身として汽車電車を知らないものが澤山ゐる。飛行機は鴛泊小學校長の懇願によつて北海道から樺太へ行く一機が特に島の上を飛んで呉れたので先頃初めて見たと云つてゐる。牛も島へ渡つたのは最近だとのことである。

利尻山の初登山者

所傳には、明治二十四年行者天野磯二郎、初めて頂上を極めたといはれてゐる。此行者の用ひた物は多く鴛泊村大法寺に残つてゐたが、先年炎上した折に焼失し、今は鈴を残すに過ぎぬといふ。因に此行者の師は、陸奥恐山の修行者であつたとのことである。尙、此大法寺は利尻山の頂上に納めてあつたといふ不動明王の木像一基を藏する。高さは二尺位あつたと思ふ、所々剥げてはゐるが尊嚴のある作で、智覺大師の作と傳へられてゐる。幸に撮影することを得た。

利尻島の動物の二三

利尻山の主。島人の云ふに主は山猫であると。たまに蝦夷松、根松の密林の中で大きな姿のこの

山猫に遭ふと云ふ。眞偽もとより不明である。

スゞメとカラス。島で多い鳥は鳥と雀である。

人通りの少ない鴛泊村の利尻神社へ通ずる道路の中央は下水路になつてゐて、其縁で島の者がよく魚をこしらへてゐるのを見かける。かうした時狙の向側には、屹と友を呼んで雲集してきた鳥が魚を見詰めて並ぶ。少しでも隙があれば争つて奪つて行つてしまふ。追つてもとても追されるものではない。島人も終に諦め、鳥も亦馴れ切つて島人の肩へ乗り組へ止つたりする。然し外來者の小生には近寄るところかカメラを向けただけではただしく飛去つて仕舞ふ。村の小供などはよく馬鹿にされて、買物を奪ひ去られることも少なくない。と。先年冬期水のないのを幸とストリキニーネで澤山殺したさうである。

鳥に次で雀が多い。都會の雀の様ではなく人を比較的恐れない。四五尺離れればゆつくり觀察出来る。此鳥も元來人里に限つて棲む習性のあるものであるから昔から島にゐるものではない。と云つて海を渡つて来る程の飛翔力もありさうに思へ

ない。村で聞き歩いて所、廣澤宗道氏によつて分明することを得た。即ち明治八年の頃、壺田（宛字）といふ仁が近江國から遙々此島へ參拾羽移入した。途中六羽落鳥となつて、無事に着いた二十四羽が殖えて今日の多數に至つたといふ。

ウヅラ。八月三日の夕方、利尻神社附近で十五六羽の群に會つた。

シマセンニフ。ゆるやかな斜面の草山にゐる。

餘り高くは飛ばないで、鳴きながら低くあちこちと渡り廻つてゐた。殊に鴛泊村利尻神社の東の草山で多く見た。鳴聲は鉦をたゝいてゐる様で、高い、澄んだ聲である。内地から行つた者には珍しい鳥と思へた。

ハクセキレイ。數も相當ゐる。人通り少ない往來や溝の邊り、尾を動かしつゝ止つたり、緩急的な波狀飛行をやつてゐる。

イハツバメ？ 燈臺下の岩壁に營巢してゐる。

マガモ。北方の姫沼（養魚をしてゐると云ふ）に來るさうである。

カハラヒハ。恐らく本種と思ふのを鴛泊村の南

方で四五羽見た。

マミジロ？ 頂上附近では雨を折る混へた濃霧の中であつたので、充分確かめられなかつたが、本種の雄と思はれる黒い羽色をした眉毛の白い鶉大のものを一羽見た。

利尻山の頂上近くに雷鳥が出沒することを廣澤氏は云つて居られたが、分布上や山頂附近の四圍の状態から考へても甚だ疑はしいものと思ふ。もし雷鳥と名づける様なものが居るとすれば、頂上より低い所で、森林帶に *Tetrastes* 屬のものでも居るかと思ふが、*Japanese Pterinigan* や *Kantschakan Pterinigan* 等と云ふ眞に雷鳥と稱せられるもの即ち *Lagopus* 屬のものは居らないと思ふ。因に北海道所産のエゾヤマドリはエゾライテウとも云はれて居るが、本州中部産のライテウや北千島占守、幌筈兩島所産のチシマライテウとは全然習性が異り、屬も異なるものである。

熊と蛇。利尻島には共に一匹も居らない。前者は恐らく食餌と棲息地のない爲であり、後者には氣候寒冷に過ぎるためと思ふ。かつて熊が二頭遙

と海を泳いでやつて來たことがあつたさうであるが、一頭は岸へ上陸前に、一頭は上陸後山に入り、適當の住居がなくて現れた時に撲殺された由。蛇も荷物について六匹、鴛泊港から島に逃げたさうで、鴛泊港の人々は、今に盛んに繁殖して仙法志や鬼脇等の村から苦情が百出すること、思つて、大變心配をしたさうであるが翌春になつて、石の上、岩の割目、樹上、苔の下等あまり遠く行かない所に死んで發見されたさうである。

狐。島には中々多い様であつた。鴛泊から南へ笹を分けてボン山の西南に懸つた頃から糞と異様な臭氣とが甚だしく、動物園の檻の中へ入つた様で不快であつた。しかもこれが岳樺ある八百米邊りまでも續いた。聞けば此島では絶対に捕獲を禁じてあるので年々殖える一方ださうで、毛は密で足の裏にまで及び、脊に線があると云つてゐる。十字狐の一種でもあらうか。利尻神社（陸測五萬、鴛泊村ベシ岬の西南、三十米の圈線の所）の境内の建物の羽目に開いてゐる穴も此狐が開けたのだとのこと、村人は大切に其儘に保存してある。

蛙。鴛泊村や利尻神社の附近では一匹も見掛けなかつた。反つて利尻山へ登つた時、約千米の高所、ハヒマツの中で赤蛙を得た。多分エゾアカガヘルであると思ふ。

其他キネズミやミヤマカラスアゲハ、ベニヒカゲ、ビロウドヒラタシデムシ、ルリムシ、アカスデカメムシ等も居たが、主目的でもなかつたし、天候常に悪くて大した觀察も出来なかつたから省略する。一體に鳥類は天候不良であつたゝめか、期待程多くなかつた。

利尻島の植物の二三

チシマヒナゲシ。利尻山頂の北方約千六百米位の所、鴛泊村から登つて賽ノ河原（藥師山と大師山の間）と云はれてゐる砂礫の斜面の所で見たが、量は甚だ少なかつた。牧野先生が行かれた時（山岳第一年第二號三十三頁）には夥しく生へてゐて、株の大きなのは五寸程もあらうと記されてゐるが、今は大變少なくなつた、株も大きいので直径二寸弱、花莖四本立つたのが最大であつた。案内人は無かつたまゝに連れずに行つたし濃霧に

此處で包まれてしまつたので、歸り路を失つてはと思つて特によく探しても見なかつたが兎に角貧弱なものが少し有つただけであつた。一二年前に友人の渡邊勇君が登つた時も多くなかつたと云つて居た所を見ると、恐らく減少したのであらう。尤も鴛泊へ上陸する前、鬼脇港へ船が寄港した折、鬼脇村の村長が白木作りの三方に寒冷紗の覆蓋を被せたのを三つ恭しく捧げて上船したが、特に好意で中を拜見させて戴くと、チシマヒナゲシの直徑三寸餘りのを二三株（花一輪あり）と、リシリリンダウとリシリサウを澤山、各々に植えて——寧ろ苔の間にさして——人拂ひをし、紋付白縮緬の兵兒帶をして見守つて居た。聞けば東宮殿下樺太御巡幸を奉迎に行くとのことであつた。この爲に生憎大株が無くなつて居たのかも知れない。因に此鬼脇村からの献上品は後にリシリリンダウが數本貧弱になつて残つてゐる外枯死してしまつたと、東宮御所に勤務してゐる友人から聞いた。チシマヒナゲシの白花のものを札幌でも、釧路や禮文島あたりでも培養して居るが、これは千島

幌筵島の原産だといふことである。

リシリワウギ。頂上に近い所、登路の左側斜面にエゾアヅマギク、チシマリンドウ、エゾツツジ、ミヤマリンダウ、ウメバチサウ等と混生して開花してゐたが、草丈は四五寸位で、八ヶ岳産の方が大きくもあり、株も大きくなつてゐる。

ジンエフスイバ。頂上の北方の千二百十八米の三角點のあたりからぼつ／＼あつたが、概して貧弱で、これも本州で惡澤岳や八ヶ岳で見えるもの、方が立派であると思つた。

シロヨモギ。鴛泊ベシ岬の西南の海岸の岩壁で澤山群落をなしてゐる。雪の様に白い葉の群落が波打際の岩壁を飾る様は異觀であつた。禮文島ではあまり多く見ない、西側では禮文瀧の附近で見方が量は少ない。

エゾイヌナヅナ、イブキジャコウサウ、ガンコウラン等も此波打際近く崖上に見られる。

ヤマハナサウ、エゾフスマ、イハツツジ、エゾツツジ、キクハクハガタ、リシリトリカブト等も頂上近くで目に付いたが書き連ねるのが本意でな

いから本稿には省略する。

次に行程の概略を記して置く。

八月五日午前五時七分、鴛泊村發。ボン山の麓の西側を巻く（牧野先生が行かれた時は東側リヤウシナイに登られた様である）——五時五十分、水なき澤に出で、之に沿うて行く——六時三十五分、蝦夷松、楡松の大森林中左側に野營跡あり——七時五十三分、左折してハヒマツ多き尾根上、約六百米——九時三十四分、千二十八米三角點（頂上の東北側に殘雪見ゆ）濃霧來る——十一時十五分、頂上。十一時三十五分、出發——午後十二時四十五分、頂上北の三角點——同五十五分、澤へ下る尾根——四時三十五分、鴛泊村着。

禮文島の植物の二三

レブンサウ。草山や森林及び人家等の多い東側では見當らなかつた。崖つゞきになつてゐる西側には岩罅、砂礫斜面、草原地等いたる所に點在して存する。最も大群落をなしてゐるのは香深村の桃岩（香深の村落の西南、西海岸に近い所、二四九米の孤立した桃を立てた形に似た岩山）の東北

の砂礫斜面に二坪ばかりの群落をなしてゐたが、概して二三株位宛點在してゐるものが多い。花の色は紫紅色、萼や羽狀の複葉は白色の絹毛を蒙り、非常に美しい。東京邊りでの培養は花を見るのに一寸骨が折れる。

レブンウスユキサウ。概して西岸一體に點在して多く見受ける。此旅行で見た中で最大の株は直径一尺に近く、其美しさ見事さ譬へやうもなかつた。草丈も大きいのは五寸位もある。向陽の砂礫地なら、他草と混生しても又單獨でも、盛に生育してゐる。東京での培養はミヤマウスユキサウよりも容易と思ふが、矢張一寸機嫌が取りにくい。チシマアサギリサウ。本島には該草が非常に多い。香深村へ船が着くとすぐ岩壁を白く點々と飾つてゐる此草がまづ目を惹く。香深村郵便局裏の崖などは一面に茂つてゐる。東京邊でも培養はごく容易である。

チシママンテマ。西岸ウエンナイ邊なら一寸東へ行くと路邊向陽の地に點在してゐる白い美しい花に遭遇する。二裂した辨片は日中、内方に卷いて

ゐるが、朝夕等の弱い陽の下では開く習性がある。あまり多くは見掛けなかつた。培養は容易。

リシリサウとレブンサイコ。島のほぼ中部より西岸の二並山^{フタナミ}(西岸アナマ岩の東北、四千六百米)の西南方で丈の高い立派なのが澤山ある所に出會つた。此處へ行くには勿論道はなかつた。後者は丁度開花してゐた。兩方とも花はあまり見立てのあるものではない、附近にタカネキンレイクワ、フタナミサウ、レブンウスユキサウ、レブンアツモリサウ(?)等やモチズリの赤の濃い色の花等があつた。此所から南へ行けばエゾゴゼンタチバナ、オホサクラサウ、キクハクハガタ(?)、ウメバチサウ、ヒメイズキ、カラフトハナシノブ、チシマゲンゲ等から、海岸にはウンラン、ハマベンケイ、チシマアサギリサウ等も見られるが此等も一々の報告は省略する。

島へは稚内から僅く三四時間で行かれる。色とり／＼美しい花が波打際近くに咲亂れてゐるし、ハヒマツ、ガンコウランが海岸から仰ぎ見られる所にあるだけでも面白い。コンブは海邊から鍵な

りの棒で搔寄せるだけで充分とれるらしい。冬には白鳥、海馬がやつてくる。内地と趣が變つてゐるだけに興味は更に深い所である。

○南九州の旅

竹 内 亮

十月廿六日(晴)。昨夜遅く伊集院に着いた上、料理屋兼業の宿屋は深更迄騒々しかつたりしたので、南薩線の朝の一番に間に合ふには大分苦しかつた。伊集院の町は氣分の沈滞した田舎町らしいが、停車場にはせ集つた乗客中には猛烈な洋装美人も三四人見受けられて、さすがに時代味丈は強い反映を見せてゐる。

吹上濱の砂丘を見る爲めに伊作^{イサク}に下車した。南東間近かの地に金峯山が低いながらも四近に高山がないので中々目立つて見える。高度六三六米、頂上三峯に分かれて中央最も高い。地理纂考には頂上に藏王權現を祀る社のあるとが記されて居る。伊作の附近には昔の潟湖の跡らしい池がいくつもある。中原池はその内の最大なもので周圍約一

里と云はれて居る。伊作の驛から半里足らずの處にあつた。西の一方は砂丘の松林で限られ、他の三方は火山灰質の低丘がとりまいて居る。岸の水の浅い處にはホテアアフィが一面に茂つて居て、如何にも南國らしい氣持がした。静かな湖だ、二人づれの遊獵者が岸を歩いて居るのがたまらなく目障りだつた。

伊作に引返へして又砂丘地に出で、南國らしい紺青の海の色、白い砂、緑の松の林など、これが有名な移動砂丘で昔から人々の厄介者であるのが不思議に思はれる景色の美しさに心を奪はれながら約一里を南して東に折れ、北多布世驛に出て加世田行きの汽車にのつた。砂丘地の海岸を南に歩いて居る間行手遠く野間岳の尖峯が聳えて居るのが目に立つ。山は高度五九一米にすぎないが金峯山とくもにこの附近では最も目立つ山である。

加世田から乗合自働車で枕崎に直行した。行程五里餘、自働車賃金一圓は比較的安い方であつた。枕崎は南海鰹漁の根據地で、漁港として相當の設備が整つて居る。迫野旅館といふのに泊つた

が中々田舎に不似合に設備もよく、待遇も可なりであつたが、特に食膳の魚肉は他に求められない珍味であつた。

十月廿七日(晴)。早朝又乗合自働車の客となつて往昔日本三津の一として外國貿易に活躍した坊の津に行く。枕崎から間もなく山にかゝり、山下直ちに海波がせまり、薩南の火山列島や開聞岳を遠望して眺望雄大である。坊の津は山の間に狭く入り込んだ狭い海灣で、昔はこれでも間にあつたらうが今は港としての價値は殆んどない。僅かに十數隻の鰹船がこゝを根據にして居る丈であるが、枕崎が地の利を占めて近くにあるのではとても競争にならずさびれる一方であらう。しかし景色は土地の人が自慢する丈の價値はたしかにある。飲水が不便らしく處々に凝灰岩を積んで造られた祠狀の水槽に僅か許りたまつて居る山水を人々が争つて汲むのを見た。

枕崎に引返へして午後一時發の指宿行の乗合自働車に乗る。枕崎を離れ岩戸山の北の峠をこえ前面に開聞岳の美しい姿を眺めながら、南方に僅か



ウ サ キ ユ ス ウ ン ブ レ



面 南 の 山 並 二 島 文 禮
影 撮 氏 一 喜 田 岡

許り傾斜して居る低い臺地の道を東に向つて走つて行く。開聞岳の北に近く續く矢筈岳(三五九米)の不整な山姿とその北に近い大野岳(四六九米)の低い圓錐形の山姿とが近づくと間もなく郡の部落につく、こゝで満員の車に運轉手に強要して又四人許りが外側につかまつて乗つたが、矢筈岳を南に過つた處で一吋した盛土にのり上げたはづみに過重のためにタイヤがはづれ車はひどい振動とともに横倒しになつて止まつた。幸乘客の負傷もなく車體も應急修理で目的地迄行けるには行けたが、定時より約二時間も遅れた仕末、この事故がもし五分早く起きたら矢筈岳の西南側の海に迫つた崖道の上から墜落したらうと思ふと身内がゾットした。そしてこの事故を起した前記四人のブラ下がり客は事故後、後から來た車に他の乗客には一言のアイサツもなく乗つてサツサと往つてしまつたのには一同極度に憤慨したが、相手がなくてはケンカにもならずトンダ馬鹿を見た。この地方は鐵道が開通して居ないかはりに自働車網の發達はスバラシイものがあるが、所謂地方有志等が大

分幅を開かせて居て、無理に定員以上を乗せることを強要することがあり、經營者側ではその連中には幾分弱味があつたりして、強いコトワリも云へない様な情實があるらしく、又車體が大分不良であつたり大分改良すべきことが多いらしい。

指宿温泉は潟口及瀨ヶ濱の二ヶ所に温泉があり兩處ともに相當の宿舎があるが、潟口の方が規模が大きい。潟口の海岸近い濱田旅館が一番大きいさうでその客になつた。内湯があり砂湯も附屬して居た。待遇も稍可なりの方であつた。

十月廿八日(雨後晴)。朝大分雲行が不穩で少しく雨も落ちたが大したことにみならずにすんだ。朝食を急いで又自働車に乗り開聞山麓の十町に到り、枚聞神社に參詣して、更に池田湖を見、引返へして開聞岳に登り夜に入つて十町に下り、こゝで夕食をしたゝめて三里餘の夜道を潟口温泉に急ぎ、十時濱田旅館に歸着することが出來た。

開聞登山の記事は別項に記したから省略するが、山麓の臺狀地の畑にはソバの花が盛りで、それが粟と陸稻と甘藷とで一面に美しいモザイクを

形成し、槿紅葉と黒松の緑とがその間に散在する様は何とも云へない趣があつて、好畫題であると思つた。

十月廿九日（曇午後驟雨）。早朝潟口にある鹿児島高等農林の温泉利用の促成栽培場を視察した。鐵管によつてフレームに温泉を導き冬季ナスビ、メロン、トマトなどを結實させ京阪地方に直送するのである。見た時はナスビの苗を植える作業に多忙であつた。それから歸つて自働車によつて成川と稱する山川灣の南西側の部落に到り、渡船によつて山川港に渡り（陸路によつて灣の周圍を迂廻して行く道路もあるが多くの渡船による）、元藩の藥園であつたといふ山川小學校に植えられて居る種々の有用熱帶樹木を視察したが龍眼やインドゴム等の大木がある。生徒は裸體で遊戲をして居る仕未で一寸奇異な思ひをした。それから首席訓導の上野景文氏の好意によつて民家に散在して居る種々の熱帶樹種を視察した、バナナも結果して居り、ガジマルは可成長い氣根を下げて茂つて居た。熊野神社の境内には榕樹（アコウ）が二本南

方からより合つて合着し自然の鳥居をなして居るのを見た。所謂比翼連理の瑞木であつて、白井博士の植物妖異考によると榕樹にはこんな例が多いことが記されてある。歸りは鹿児島山川間を一日二回往復する汽船によつて潟口に上陸した。山川灣内は水深く又清澄で種々の水母類が浮游する様がよく見え一奇觀であつた。潟口の海岸砂濱にはグンバイヒルガホが繁茂して居るがハマヒルガホに似て葉甚だ大形軍扇狀をなし、花は濃紅色である。熱帶性のもので九州に於ける分布は極めて狭いものである。

午後四時發の鹿児島行の自動車に乗る。途中喜入附近の天然記念物で有名なメヒルギ一名リュウキユウカウガイの産地を徐行させて車上から見た。その時は未だ花盛りで長い根が果實から胎生突出する奇觀は見られなかつた。天然記念物調査報告によると、これは元來自生のものでなく、島津氏の琉球征伐に従つた肝付氏が持ち來つたものであるといふのが事實らしいと云ふ。

車上から對岸大隅半島を見ると幅狭い半島と思

へない大づくりな山脈の走り方が薩摩半島の低丘陵の地形と對比して實に面白い。一度機會を得て大隅半島の踏査をして見たい希望が湧いて来る。夕方六時鹿兒島に着いたが前三日間の採集植物の整理で深更迄大多忙でスツカリくたびれてしまつた。

十月卅日(晴)。八時半に鹿兒島港を出て櫻島に行く。武に上陸して櫻島の北岳に登つた。村を離れると柑橘、枇杷、李等の果樹園になり、やがて名物の大根島になり、草原に移る。クロマツ、クヌギ、マテバシヒなどがボツボツ立つて居る。アオギリの自生の多いのが珍らしかつた。

草原といつても概してス、キの疎生地で、火山灰礫の裸地がその間に介在して居る。登るとヤシヤブシが大分多くなり、特に左手の爆裂火口の崖や右手の長いスロープの如きヤシヤブシに被はれて居る。大正三年の西側の熔岩は下に黒く望まれ、その噴出火口が間近い丘に見えて居て、その附近の裸地の植物侵入の有様もよく觀察される。路は登るに従つて大變急で登路と砂走式の降路

との區別がハッキリせず足下がザラザラと崩れるので中々登り難い。それに上になつてから風が強く、大分警戒して登つた。北岳の岩蔭に風を避けて晝食をし同行のK氏とF氏はそこに残つて自分丈火口に下つて向ふ側の火口壁に登つたが、その瞬間突風に帽子を谷に吹き飛ばされてしまつた。中岳と南岳に行くのはやめてすぐ引き返へし登路を下山した。火山礫の急斜面をすべり下る、愉快であつたが餘りアツケなく下つてしまつて物足りない位。

櫻島の上部は植物が稀少で裸地が多いが、それでも北岳の火口壁の内側には可成ヤシヤブシが繁茂して居る。火口底の砂地にはミヤマキリシマが多い。中岳、南岳になると餘程植物が量的に少なくなつて居るらしい。櫻島の植物景觀については最近郡場博士と田代氏との研究があるがその全文を手にして居ないので詳しい紹介が出来ないので遺憾に思ふ。

下山してから袴腰に至り、その熔岩を充分見る時間もなく船に飛び乗つて鹿兒島に引返した。

十月卅一日(晴)。昨日袴腰の熔岩をユックリ見れなかつたので又櫻島に渡り、袴腰に上陸して熔岩を視察した。熔岩には蘚苔類や地衣類の數種が

ボツボツ生えて居る外にス、キやオシダ等の侵入發生を見た。熔岩地に植物の侵入する有様を見ると、風で飛んで來る胞子や果實や種子から全面に發生するものと、周囲の植物群叢から次第に縁部侵入をなすものとがあつて、その中には蔓草が熔岩にからんで行つて、その果實が熔岩上に落ちそこに發芽することもある。又鳥其他の動物が内部に持ち行くことも少なくないであらう。郡場、田代兩氏の第三回汎太平洋學術會議視察旅行案内書に書かれた小さな記事によると、安永年間に噴出した熔岩にはクロマツが一時的に勢力を得て繁茂して居るといふ。この大正熔岩も恐らくそんな徑路をとるものであらう。

櫻島を辭して鹿兒島に引き返し、汽車によつて牧園に至り、直ちに自働車で霧島温泉に向つた。自働車を降りて坂路を登ること數町で榮之尾温泉に着き、早速湯槽に飛び込んで後ノビノビとした

氣持でヴェランダの籐椅子を圍んでのお茶の味は忘れられないものだつた。

十一月一日(晴)。早朝宿を出て大浪池に向ふ。

秋の森林を縫ふ登路の氣分は素敵だつた。登路は概して路幅が廣く且つ傾斜がゆるやかなので平地の森を歩く様なユッタリした氣持で道草しながら登つた。森林が終る頃急に傾斜が加つて草原をしばらく登ると火口壁に出る。大浪池の藍色の水が真下に湛えられて、鴨の群が浮いて居るのが小さい蟲でも動いて居る様に見える。周壁の紅葉が美しかつた。韓國の圓錐がすぐ向ふに見えて呼べば應える許り。大浪の周壁の北側をまはつて韓國の直下に出で韓國の頂上に登つて晝食をとつた。何日降つたのか雪が残つて居たのを見た。韓國の火口趾の大きいこと深いことは實際を見て驚いた、周壁に立つて下瞰すると眼がくらみさうなので、すぐやめた。高千穗峯、御鉢、新燃の峯々の偉大さもさることながら、こゝから見る霧島全山の姿の大規模な構成には全く茫然たらざるを得ない。そしてある多數の乾涸した火口や火口湖の分布を

見るとき月の世界を思はせる驚異と不氣味さがある。又遠い眺望もスバラシイものだ。大正十二年の秋一度霧島に來たものの、濃霧のため大浪の周壁の一部に登つた丈であつたので、今度の韓國行は自分には非常な興味であつた。

登路を下つて右に蝦野道ととり、蝦野の硫黄採集場や精製所を見て大浪の西側をからむ林道によつて榮之尾に歸つた。

蝦野の硫黄採集場は九重山のものと同様に天然の硫氣孔から人工の砂土で固めた氣道に導き、昇華させるものである。硫氣孔附近は岩石が糜爛して植物の發生が少ない。附近に冷却の際收縮して龜裂した大きな熔岩塊が多いが、その龜裂は植物の果實を留保する役目をして、そんな部分に二三の禾本科や莎草科の植物が發生するを見ることが出来る。蝦野は大部分乾燥性な草原でス、キが多い。

西の隅に小さな流があつて其の縁に天然紀念物として指定されて居る海棠の自生がある。丁度その葉が眞紅に紅葉して居て大變美しかった。

榮之尾への途中森林中の溪流の岩上にウチハダイモンヂサウの夥しい群生を見た。ダイモンヂサウの一變種で葉脚が契形になつて居る點が基本種の心脚であるのと異なる。その群生を見ると基本種の形も相當に混在して居るのみならず極端から極端をつなぐ中間形も整つて居るのを見た。

樹幹の蘚苔類の附着面を注意すると稀にオホクボシダの着生を發見することが出来るのも自分には大和太臺原山下で見たのみであつたので珍らしかつた。

十一月二日(晴)。早朝榮之尾を出て自働車で牧園に出で直ちに汽車で宮崎に向つた。車窓からの霧島の山姿はいつまでも自分を引きつけて、高千穂の尖頭が小さくなる迄あかず眺め入つた。大淀で降りて青島に向つての歸へり夕焼の空の彼方に再び高千穂をかすかに眺めたのは思ひもうけぬ大きな喜びであつた。宮崎に宿泊。

十一月三日(晴)。日豊線で歸途につく。宮崎に在る旦那夫妻がわざわざ停車場に足を運んで下すつたのはうれしかつたが、旦那が今日は附近の古

墳を視察するし、この次の日曜には鰯塚山に登るのだなどと話されたのをたまらなく羨やましく聞いた。

○大正十五年十月ばかり觀楓
旅行しけるときによめる

田口虎之助

信濃國の發補溫泉のあたりにて

籠に組まむ其代なれや山人のこゝた切出る小さ、
篠竹

脊にも負ひ馬にもおほせ篠竹を里に持出る山人ら
はや

ゆふまくれ路たつ／＼し館山の山の出湯の湯の香
かをりて

あくる朝に

かの見ゆる遠方の高嶺は槍かたけ穂高燕のみ山な
るらむ

雜魚川の清水小屋に宿りて

里遠き山路ゆき暮れすへを無み柚のかり庵に一夜
ねにけり

この夕雪は降り來ぬ明日行かむ山路いかにとわひ
つゝそぬる

その川に沿ひて下りける時に

うすき濃き色とり／＼のもみち葉に雪さへ降りて
おもしろきかな

花もみち劣り優りを人間はば秋の錦と吾は答へむ
古のうま人さひて紅葉かり深くそわけし秋山われ
は

杣人の斧たに入れぬ樵の木のお木のお林奥か知らす
も

つちかひし園ににほへる菊よりも山路の一枝ゆか
しかりけり

越後國中魚沼郡の田代なる七釜

の瀧を見て

むかしより人の稱へし七つ釜音のみ高く鳴わたる
なり

聞くよりも正目に見よと云ひつるは斯るためしの
有ればなるらむ

其處より小出溫泉に行く途中にて

踏み難むこゝしき山路ゆき暮て松の火ともし辿り

來にけり

さといとの門うち叩き夜行かむ道しるへする子ら
を得てけり

南魚沼郡と中魚沼郡を流るゝ

清津川の山溪を探りて

やま見れば岩面白し川みれは瀬の音さやけし清津
山川

山川を清みさやけみ寫しゑも畫工そへも得こそう
つさね

黒部すら白川すらも此山にこの川の瀬に及ふへし
やは

魚沼のうをにもかもな清津川きよき流に吾世經な
まし

はるゝにとめ來し山の山祇のかさしの紅葉いま
盛りなり

秋山のやまもとゆすりもみち葉をかすめて落る瀧
の音かな

かはの邊に穿てる穴は銅をほりにしあとゝ人を云
ひける

かくはかり奇しくあやしき山川をなとかも訪はぬ

風流士の友

高殿にうたけせむゆは都人あそひに來ませ是れの
山川

巖ろにかけたる鎖蟹乃こと横さに手繰り歩むかし
こそ

一足を踏あやまらはまさかさま落ちて消ゆらむ川
のみなわと

あやしくもわたしけるかな渡るたに足もわなゝく
これの釣橋

越後國の名刹雲洞庵に宿りて

ちりの世のよそなるやまの山寺にかりねしにけり
一夜二夜と

法の師の朝疾く起きてみ佛に仕ふるわさそゆかし
かりける

やま寺の庭の落葉をかき拂ふ衣の袖に散るもみち
かな

いつはあれとみ寺の鐘の身にしむは暮行く秋の入
相の空

夕日かけ紅にほふもみち葉の梢にひゝくいりあひ
の鐘

上田なる山の紅葉を探らむと思ひしものをみ雪降
きぬ

中魚沼郡の八箇峠の紅葉をみて

時雨のあめそめし紅葉を見まほしみ衣手ぬれて吾
は來にけり

この山ににほふ紅葉は旅人の幣と手向し錦なるら
む

○鳥首峠と武甲山の間に

就て

去る年の十月中旬、學校で一日の清遊を武州御
岳に試みたので、自分は之幸と御岳より大岳に登
り、御前山へ續く尾根を辿つて大タワより小留浦
に出で、氷川の三河屋に宿をとつた事があつた。
所が偶然にも二名の學友に落ち合ひ、仙元峠を越し
て武甲へ行かうと其晩に相談が一決してしまつ
た。

倉澤から一杯水に登り、仙元峠より細久保林道
を川俣に降り、小澤屋といふ雜貨商店に一泊し
た。主人の樂造夫婦は可なりの老人であつたか

ら、三年經つた今では生きてゐるかどうかわから
ない。「櫻の咲く時は奇麗だでは非遊びにいらつ
せい」と云つて呉れたあの爺さんが今でも懐しく
思へる。

今度秩父號第二で武田博士の「仙元峠附近」を
拜見した所、自分等が通つた大モチ山に就いて書
かれてあるのを見出し、何かの參考にもと此の一
文を草する事にした。

川俣より鳥首川に沿うて登り、淋しい冠岩の部
落をへて峠の頂に達したのは約一時間半の後であ
つた。秋も半ばである爲かさすがに四邊はうら淋
しかつた。名郷へ降る道は可なり急らしい。

之から妻坂峠の登り降りも面倒なので、直接尾
根傳ひに行つて見やうではないかと提議すると、
早速承知して呉れたので午前八時半こゝを出發す
る。

來た道を少し戻つて、右山道とある所から峠路
を離れる。途中二度徑が分岐する所があるが、二
度とも右を行くと徑は尾根の西側をからんで少し
登ると平らな所へ出た。これはつまり峠の北にあ

る一峯の北側の一、〇八〇米の等高線にかこまれた地點である。中央が少し窪んだ小さな原である。武甲山が頭だけ出してゐるのが見える。これから西北へ尾根傳ひに殆ど平な登りを續けるとやがて六尺位な灌木の藪の中に三等三角點があつた。この峯が武田博士のいふ大モチ山である。自分は今まで鳥首山といふのだと思つて居た。峠よりこゝまで一時間半かゝつた。眺望はまるで無い。周圍には石が四個あつた。川俣の人の話ではこゝから妻坂峠へ行く徑があると云つたが、途中まで多少の藪くぐりはあるであらう。藪ばかりで見當がつかないが昔は人が通つたらしく、草鞋の古いのが棄てゝあつた。岩峯を三つばかり越す内に武甲山を正面に見る一峯へ來た。西方へ出る尾根の分岐點らしい。

こゝで約廿分ばかりを食事に費し、やがて出かけると丈なす薄である。然し間違へる徑ではない。登りとなつて無造作に植林地帯に出てしまつた。鳥首峠より約三時間を費した。これで難なく武甲山まで來てしまつた事になる。妻坂峠の登り

降りをするより早くはないかと思ふ。武甲山の二等三角點へ着いたのは午後二時を過ぐる十分であつた。大宮の町の白壁がはつきり見える。小學校時代の讀本を思ひ出した。妻坂の峠もいゝ。名栗の上流が霞む。下山は裏道を取り、約二時間で大宮驛に着いた。淺野セメントで今武甲山をくずさうとしてゐるが、我々の時代では取りきれないと云つてゐた。然し今にあの山も地球の表面から影をなくしてしまふだらう。惜しい事ではある。(大正十五年八月二十日吉澤一郎)

雜報

○ウイツサー探檢隊の成功

ヒマラヤ山脈を中心とする幾多の大山脈に取り圍まれてゐる山岳地の中で、ネパル國內は是非なものとして取り除けても、つい近年まで何人にも踏査されなかつた地方は、東に於てはツァンボ即ちブラマプトラ河が大曲りにまがつて印度平野に向はんとしてゐるあたりのコンボ、ヘマコ等の地を含む所謂アツサム・ヒマラーヤの部分と、西に於てはケー、ツウの北方オプラン河一名シヤクスガム河の流域から、ギルギット河の一支流フンツァ河の上流に當るサリコール及びカラコラムの兩山脈に圍まれた、フンツァ・ナガアにかけての地方であつた。所てブラマプトラ河の方は有名なアツサム・ヒマラーヤ三角測量の行はれた千九百十三年に印度測量部のベレー、モーシードの二人に探檢され、尋て千九百二十四年にキングドン・ワード及ロード・コードアの二人も植物學並に人類學上の研究旁、序に大峽谷の祕密を探りて、終に流程八百哩の長流が幅僅に十五間に蹙まり、兩岸の絶壁直立二千呎を下らざる峽底に在りて高さ三四丈の瀑布を成すを發見するに至つたのである。西方のシヤクスガムに於ても、千九百十四年に伊太利のサー・フイリツボ・フイリツヒイ一行に依つて、オプラン河とシオク河との分水嶺らしき附近は探られたるも、歐洲大戦勃發せ

る爲、一行は終に當初の目的の一部であつたオプラン河の流域に探檢の歩を進めるに及ばずして、忙しく歸國の途に就いてしまつた。以後此の地方に對する探檢は暫く中絶の姿であつたが、最近に至りて二つの重要な探檢が行はれた。一は千九百二十六年に行はれた印度測量部のケンネス・メーソンの統率したシヤクスガム探檢であり、他は千九百二十五年和蘭の登山家ウイツサーの行つたフンツァ河の上流探檢である。そして兩者共に相當大なる收穫を齎したのであつた。茲には先づウイツサー隊の探檢の大略を紹介することにする。

フンツァはギルギット河の一支流フンツァ河の右岸にある村落で、海拔高距は八千尺である。其對岸には東からヒスパイ河が注いでゐる。之を四哩ほど遡ると海拔七千六百尺のナガアの部落がある。普通この地方をフンツァ・ナガアと唱へてゐる。フンツァ河の西はフンツァで東はナガアであるが、その少し北方の地域は小グージの名がある。フンツァ河に沿うて遡り、左して幾つかの峠を踰えればバミール高原に達せられるし、又右すれば東土耳幾斯坦にも出られる。然し交通不便と物資の乏しいこと等の原因からして、印度政府では容易に探檢家の此地方に入るを許さなかつた。夫が爲に特に此地方の探檢を政府から命ぜられたジネラル・コツケリルが千八百九十二年にフンツァ河の上流クンジュエラブ、シンシャル河等を探りなどした以外には、絶えて人の入り込むことを聞きもせれば、又入り込めもしなかつたであらう。コツケリルはこの探檢に於てシンシャル河に注ぐマルンクツティ氷河を探りし際其源頭にケー・ツウ以西の最高峰として千九百十一年に海拔二萬

五千八百六十八呎と測定された高峰を發見し、之をマルンギ・デアスと名付けたことは吾人に取って注意すべきことであつた。

尤も同じ千八百九十二年にはサー・マアチン・コンウエーの一行もフンツアに来てゐるし、又千九百八年にはハンター及びプロック・ウワー・マンの一行もフンツアに入り込んだ。然し此等の人々の目指す所はフンツア河の上流の地域ではなく、コンウエーの一行は三十九哩の長さな有するヒスバー氷河を探りて、分水嶺のヒスバー・パツスより東南に向つて三十七哩のビヤホ氷河を下り、更にバルトロ氷河を廻りてケー・ウツ附近を探るにあつた。ウワーマンの一行も亦ヒスバー氷河の探究が主なる目的で、降路は矢張り、ビヤホ氷河からアスホルに出てたのであつたから、ヒスバー以北にはコツケリルの外入つた者は無いことになる。

實に此地方は、ラダク、カイラス、カラコラムの名で知られた、平行したヒマラヤの大山脈が直角を成してヒンズクシ山脈と出會つてゐる所である。廣大な山脈のこの鋭い轉向は印度河の流路の同じ轉向と相應じてゐることは衆知の事實で、この大轉向の軸は南では世界第十一位の高峰ナンガ・パバットと、北ではオクザス、インダス及びタリム三河の流域を劃する分水嶺の頂點をなすキリク・パツス附近との間にあるらしく、フンツア河の流路は即ちこの大山脈が急に轉向した爲に曲目に生じた、大きな裂目に當つてゐるらしいことは、地理上から見ても興味あることであらねばならないと共に、此等の地方の探検が自ら興味と注意とを惹く所以である。そこを覗つたウイッサーは幸に印度政府の許可を得、スリナガルを出發して再び同地に歸著する迄半歳に亘る

探検に成功したので、之に刺激されて印度測量部では翌年に最後迄取り残されたシヤクスガム河の探検を行つたものと想はれる。

ウイッサーは夫人を伴ひ、印度測量部の優秀なる測量手一名を同勢に加へて、四月二十五日にスリナガルを出發してトラクバル・パツス及びバズイル・パツスを踏んでアストルに至り、アストル河に沿うて印度河畔に出て、更にギルギット河を廻りてギルギットに達した。こゝで用意された二十六人の常雇人夫を得小麥粉を補充し、五月二十日にギルギットを出立して、フンツア河に沿ひ北に向つて廻ること三十哩、チャルトより河と共に東向してフンツアを過ぎアタバッドから再び北を指し、第一のベース・キャンブたるバサーに達したのは五月二十九日、チャルトを去ること約六十哩である。

そこで第一著手としてバサー氷河が探検された。この氷河は西からフンツア河に注ぐもので、既刊の地圖に據れば長さも短いので、大したこともあるまいと思ひの外、迷宮の如き複雑を極めたセラツクに大困難を吃し、三日の後には多量の雪と雪崩の危険との爲に引返すの止むなきに至つたが、清更無駄骨を折つた譯でもなく、氷河は豫想より長く、全長十六哩に達することを確しめるに足る丈の位置までは行くことを得た。

バサーから氷の末端がフンツア河に落ち込んでゐるパツラ氷河を横過りて北進を續け、フンツア河上流の祕密を開く第二のベース・キャンブとして選んだギアチャに達した。バサーから約二十哩の河上である。

丁度此頃はフンツア地方に於ける各川の最も漲溢する時期なの

て、冬季の外には峽谷の隘路をたぎり流るゝ満水に阻まれて谷入りは絶對に不可能であると忠告され、人夫なども谷深く進むといふことは好まなかつた。然し六月九日にキリク河が西から合流する地點に来て見ると、非常に困難ではあつたがまだ隘峽を通つてクンジエラ河の谷に入りこむことを得た。若しもう少しづついて居れば刻々に増加する水の爲に進むことも退くことも出来なくなつたに相違なかつた。とはいへ又一つ心配が起つた、といふのはクンジエラ河から支流のグジエラ河に通ずる道があるか疑問であり、同時に峠を踰えて東のオブラン河の流域に出口を覓めることが問題でないとすれば、如何にして根據地と連絡し補給を受けたらよいか。斯様な状態でクンジエラ河に進むのは稍危険な計畫であつたといへる。

キリク河の合流點から上はフンツァ河もクンジエラ河と呼ばれ、其處は峽谷に入る關門とも稱す可く、非常に狭い隘口で而も河道を通らなければ廻行することを得ない場所である。此附近から河は次第に東に向ひ、十里ほど進むとグジエラ河が東面から合流する。けれども其あたりへは寄り付くことも出来ないのて、高廻りをしなければならぬ。

キリク河合流點から廻ること約三十哩、バラクンに達する、河が二分して左はバラクン河といふ。それを廻つて終にオブラン流域との分水嶺一萬八千呎の鞍部に登つた。さて引返して合流點まで來て見ると、増水の爲に來路を辿ることは不可能となつたので當惑したが、人夫中の一人のシンシャル人がグジエラ河へ出る道を知つてゐたので、本流を廻りて更に右にタクセル谷に入り、六

月廿五日其源頭に達した。これは明にクンジエラ河の水源である。それから來路を下りて途中より左折し、一嶺を踰えてグジエラ谷に下り込み、谷の幅の廣いのと、羊や山羊や驢などの群れてゐる貧弱な放牧地であるのに驚かされた。小さな村まであつて男女小供を合せて三十人許住んでゐた。これはシンシャルから來た夏の間の移住民である。兎に角これでシンシャルに通ずる道のあることが確められたので安心し、グジエラ河の源流を極めて分水嶺に立つた。グジエラ河の方がクンジエラ河よりも長く、此の方がフンツァ河の本流らしく想はれる。孰れにしてもフンツァ河の水源を究めたことに變りはないのである。

これから大體に於て又南進を續け、初は一萬八千呎、次は一萬七千呎の峠を踰へ、シンシャルの谷に入つた。然るに増水の爲に繩橋が破損してシンシャル河が渡れない。それで新架橋に全一日を費して漸く對岸に渡りシンシャル部落に着いた。

一行は直にシンシャル河の水源探險に出懸けた。進むこと一日路ならずして土人がヤツギール氷河と稱するものゝ舌端を横切り、更に進むと谷は又他の大なる氷河で埋められてゐた。即ちクアードベン氷河である。この氷河の全長は三十二哩を下らず、且つ其探險中巨大な山峰の麓を通つたが、夫は後になつて既に南方から高きを測定された二萬五千四百六十呎のカンジユット第一號と同じ山であることを知つた。カラコラム山脈の北側は恐ろしく急で、景色は素派らしいが、とても登れる所などはないのである。

クアードベン氷河から引返して其東北の谷に入り込むと、これ

も廣大な氷河に充されてゐた。土人は之の谷をワイアー・ジェラと呼んでゐる。氷河の長さは二十六哩で、表面は塵芥や落石や又巨大な漂石などで全く掩はれてゐた。其源頭はクアド・ヒン氷河と密接してゐるが、非常に高い峯で取り圍まれてゐる。

前述の二氷河は後になつて、サー・マーチン・コンウエーに發見され、ウワークマンに見舞れて雪の湖と名付けられた廣大な雪野の極めて間近に位置してゐるものなることを容易に知ることを得た。ヒスバーとビヤホとの二大氷河はこの雪野から起源するものであるが、クアド・ヒンとワイアー・ジェラの孰れが亦この雪野に起源するかは、自然に起つて来る疑問であるが、未だ解決されない。

歸途ヤツギール氷河を探つたが、悪天候に妨げられて、二十三哩の長さあることを知つた以外には得る所が少なかつた。

マルン・グッティ氷河の探検は興味あるものであつた。何故といへば其源頭には西部カラ・コラムの最高峰が崛起してゐるからである。千九百十一年の測定には二萬五千八百六十八呎と測られたがケン・ネス・メー・スンはフンツアの四邊の高所から之を測定して二萬五千六百六十八呎を得た。其差實に二百呎であるが尙ほ西部カラ・コラムの最高峰たるに變りはない。コツケリルは其名をマルン・グ・ディ・アスと稱した。然し氷河をマルン・グッティ・ヤツと呼ぶのでヤツは氷河の意である。土人は山をタスト・ギルと呼んでゐる。それは夜に羊を追ひ込む石の圍ひないふ語であるけれども、山の形が尖に似てゐる爲に其名を與へたのであらう。一行は山の懷近く入ることを得たが、天候不良にして精細な觀察をするを得

なかつた。但し此山の南側に在る廣大な氷雪田が何處に排水するかは後にヒスバー方面から探究の結果、ラク氷河の源頭をなして南流ヒスバー氷河に會するものなることを確めたのであつた。

さてシンシャル河に沿うて其儘下り得れば、バスーの二哩許北方に出られるのであるが、増水の爲に隘峽は通れないので北に峠を踰えて、ギアチャの南方三哩許のフンツア河畔に出て、第一のベイス・キャン・なるバスーに歸りて、直に西方バツラ氷河の探検に取り懸つた。この氷河は印度測量部發行の印刷物には長さ二十哩としてあるが、探検の結果三十七哩の長さ有ることを知つた。この氷河の南側には個々の峯とも稱す可きものは實際存在してゐないが、巨大なる連脈が大障壁の如く二十五哩乃至三十哩も続き、この連脈の上に時々ボツリ／＼と持ち上つた頂上が二萬五千呎以上の高さに達してゐるのである。そしてカラ・コラム山脈の常として、北側は氷に覆はれた崖が恐る可き絶壁をなして一氣に氷河まで下つてゐる。斯くて六月十三日に復たバスーに歸り、ナガアからヒスバー氷河を廻りてラク氷河を探つたことは前記の通りである。最早此頃は天候が思はしくなく、探検を續けるには不適當であつた。

斯くて十月一日歸途に就き、新雪の爲に極地のやうな光景を呈したバズイルやトラケ・バル峠を踰えて、十月三十日に半年振りでスリナガルに著いたのであつた。

マーチン・コンウエーはフンツア山の山々に就て、孰れも未成品と稱す可きものであるから、崖は高く岩は脆く、現在では到底登れる山ではないと言ふた。實際ワイツサーの一行が最も恐れたのは

雪のなだれも勿論であるが、他に石や土の大なだれも頻々と起るので、危く石のなだれに埋められるところを辛くも脱れたことは一再に止まらなかつたとのことである。(木暮)

○會員通信

△拜啓。過般は旅行行程の事に付、一方ならぬ御示教を賜はり御芳情之程難有奉鳴謝候。御差圖の如く決行仕り候。即ち

十月二十一日發、高田市の友人の家に一泊致候。

二十二日發補溫泉泊り、溫泉近くの紅葉相應によろしかりし。

二十三日清水小屋泊り、此間深山の趣はあれども紅葉はなかりし、是より先往鄉村役場に手紙を出して清水小屋の様子を聞合せたるに、人が居りてとめて呉れるとの返信を得候故仕合なりし。此後雪降り候故、翌日の山路を案じ候へども朝になりて晴れ申候。自分には初雪なれども小屋の人は是で今年第三回目なりと申候。

二十四日小赤澤泊り。雑魚川沿岸の晩秋の風光の美なる事驚入候。特に雪中の紅葉一入の趣を相添へ申候。青、紅、黄の諸色に白を加へたる妙景得も云はれず、是が數里にわたり候事なれば其大觀盡も及ばず候ひし。

二十五日清津川の畔の小出溫泉古屋泊り。此間中津川の楓葉も亦よろしかりし。田代の七つ釜名高き程には見受ざりし、但し材木岩丈けが取得に候はん。

二十六日小出溫泉の主人が路に危険の處あれば見送る可しとて

二十丁計り送りくれ候。貴兄御示の如くいかにも美にして又雄壯なる山水の相は大に迂老の心に適ひ申候。霜葉は自分には眞盛とながめ申候處案内者は三四日早しと申候。越中の黒部、飛騨の白川、日向の米良川の景も三舍を避くるかと存候。大正十年の晩秋に朝鮮の金剛山に相遊び申候が彼の内山の萬瀑洞も是には及び申さざる可し。大平殿君が昨年十一月四日に此處を過られて賞讃せられたる記事を見申候が眞に其通りに候はん。但し山水の妙景は自身に親しく是に接するより外に得られ申さざる可し。元橋邊まで行て見よとの御示なりしかども、疲勞の爲め果さず三俣村吉野屋に泊り申候。大平君本年も遊ばれて今朝出發せられたりと宿の者申候を聞きて遺憾千萬なりし。

二十七日湯澤泊り。

二十八日湯澤逗留、此日雲洞庵に行く考なりしかども雨の爲に滞在致し候。

二十九日雨、雲洞庵泊り。前以て書面にて宿泊の事を頼置き且又金城山の紅葉の好時節を問合せ候に、二十八日頃よろしからんとの返信を得申候なり。

三十日雨の爲に同寺に逗留致候。終日雨降り止まず夜に入りて寒氣頓に加はり風吹しきりければ、皆々金城山は今夜必ず雪ならんなど評し居り候。

三十一日雨止まざりければ登山は思ひとどまり、同庵を辭し去り、雨を冒して八箇峠に向ひ申候。六日町までの途中より顧みれば山は果して白頭布を被り居り候。雨中八箇峠の霜葉を觀申候が丁度最もよろしき時に出逢ひ申候、實に壯觀極り無き儘に存じ大

に愉快を覚え申候、斯くて六日町に引返し宿泊致候。

十一月一日 早朝同處を發し一路汽車にて即日深更に及び無事歸宅仕り候。此行山水の秀、紅葉の美に接し充分の歡樂を極め、大幸是に過ぎず候是れ偏に貴臺の御示導に依る事と深く銘肝仕り候。途中折にふれての腰折二三出来申候が尙推叩之上不日高麗に供へ御批評を願ひ度く候。(大正十五年十一月十日田口虎之助)

△拜啓。十月一日付貴信拜讀、故國に永らく御無沙汰「山岳」へも無精して不相濟事に心得居候。幹部諸氏御努力のおかげにて基礎も固まり候事御同慶の至に存候。

不二精進のお便りは夢物語りでも聞く心地にて拜承、そんなことになつたんですかれ、と腕を拱めかれ候。上高地へ自動車はヨセミテ溪谷のことを思へば不思議はないやうなもの、そしていつかはさういふ運命が必然的に來ることとは豫期され候へ共、只々昔戀ひしきばかりに候。併し我々は昔の夢を胸に秘め得らるゝだけ幸ひに候。今の人たちは見るべき昔の夢もないでせう。

私は愈よ歸朝を命ずる電報辭令に接しましたから今度こそは歸ります、但し後任者の來着時日が不明で随つて私の出立時日も不明ですが來年一月以降になるでせう(文章が氣づかぬ間に言文一致になつてしまつたから、それをつづけます)さうして變り果てた東京と横濱を珍らしく怖ろしく眺めるべく歸ります。久戀の日本アルプスも仰ぎたいのです、松本あたりから槍でも見たときの心地今から血が湧くやうです。

舊友の便りを聞くことは樂しみますが辻村君殺し高野、辻本、三枝三君登山を殆ど斷念せられ日に々々老いゆくやうに心持が沈

むのは哀しいことですが、それは頓て自分のことです。

併しカリホルニア及太平洋沿岸のアメリカは山が多く氷河が最も多く樂しみますよ、こないところ(山のおかげで)だとは思つてゐませんでした、尤も山が無かつたら疾くの昔に請願しても歸朝したかも知れません。(大正十五年十月廿二日小島島水)

△十七年ぶりに秩父の紅葉を尋ねた。廿日の夜行て飯田町から日野春まで乗り、それから徒歩増富のラザウム 鐵泉不老館に一泊。翌日信州峠を越えて梓山にとまり、次に十文字峠から栃本へといそがしい旅をつづけて歸京した。信州峠の秋は初めて通つただけに最も印象が深い。梓山の戦場ヶ原はひどく炭焼のために荒されてゐるが、八町ヶ原は依然として舊態を存してゐる。十文字峠は相變らず深い。時候が少しく遅れてゐるので、栃本は十一月初めがよからうと思ふ。大村のお婆さんからよろしく。(大正十五年十月廿五日田部重治)

△拜啓昨日の貴重なる大會を他所に出懸候は寔に申譯無之候へ共、鶴ヶ島屋行を志し土曜日例の飯田町發終車にて昨曉三時九分初狩着、同四時半まで驛のストープにて、温まり、高岩山の下をヤワナ澤に沿ふて近坂道に出て、夫より間もなく大幡峠の路に入り、分岐路を右にイノコ澤に沿ふ小徑を傳ひ、松林を出て、澤を左岸に渡れば愈々山路らしく傾斜も急に相成 候儘幾度となく休み途中元銅山の在りし跡を見物いたし、朝暾に映ゆる黄紅葉にすつかり睡氣も醒め感歎詞の連發に足は一向はかどらず、膝を沒する落葉の中をかきこそ山頂に達したるは午前九時、三角點には新らしき櫓さへ設けられ其附近は本年五月測量部の手に依て切拂はれたる

お蔭にて豫期以上の展望を恣に致し候。九時三十分頂上より西南に續く幾峯頭の昇降と藪くぐりの試練に耐えて忠實に尾根通しを辿り、途中寶銅山の監視所にて番人より銅山の状況を聞きお茶の馳走を受け、再び藪と樹林の中を苦闘して本社ケ丸に達し候は午後十二時四十五分、此處にてゆつくり休憩いたし、清八峠より奥野澤を降り笹子着四時、同五時十四分發の列車にて歸京仕り候。

(大正十五年十一月八日 神谷恭)

△十九日夜武田先生の驍尾に附して眞冬のハケ岳を眺む可く出掛申候。二十日より二十三日迄連日天候思はしからざりし爲、赤岳温泉に滞在、二十四日漸く晴天になり申候へば、膝を没する新雪を蹈んで、午後十二時半峯の松東方二千五百米の地點に達し、白衣着て攀え立つ硫黄、横岳、赤岳、中ノ岳、阿彌陀岳より遠く東駒、鋸、北岳、農島、鹽見、鳳凰等諸岳ズラリと並び屹つを眺め且つ撮し、非常なる愉快に有之候。

(昭和二年一月廿五日茅野驛にて岡田喜二)

△小生去る大正十五年十二月十九日より昭和二年一月十四日までスキーを滑らせておました。足かけ二年といふ事になります。野澤温泉にては奥毛無山は二度登りました。熊野湯に五晩泊りました間、次の山々へスキー登山を致しました。

笠ヶ岳、横手山、赤石山、鉢ノ山

歸りは澁峠より白根の弓池にまわり(地藏岳をへて)草澤へ降りました。同行者は同じく會員の矢作太郎氏であります。

(吉澤一郎)

會 報

○第十九回大會記事

大正十五年十一月七日午後六時より、芝區高輪南町三十番地調和道協會に於て、本會第十九回大會を開き、左の講演(幻燈使用)があつた。

黒部川の谷と山 幹事 冠 松 次 郎氏

上廊下の一部を除き、流程三十里、險絶を以て聞えた黒部峽谷を殆ど河身に沿うて遡り、立山東面の偉觀である御前澤、内藏之助澤の雪溪を攀ぢ、内藏之助平、黒部別山を探りて、其都度同伴者と共に撮影したる三百枚の寫真中より、黒部峽谷の特色を最もよく發揮したるもの、即ち代表的とも稱す可きもの八十枚を幻燈映畫に作り、氏の作製したる略圖に據りて黒部の谷と山の概念を與へられたる後、映畫に移り、一枚毎に詳細なる説

明を加へられた。著色が眞に迫る程手際よく出来たので、眼前に展開する豪壯跌宕を極めた峽谷の景は、人をして身親しく其境に在るの思あらしめ、殊に峽谷の核心とも稱す可き黒部別山下の岩壁と奔流、就中氏自ら天下一品と稱してゐる劍澤と棒小屋澤とが東西から十字形に本流と合するあたりの釜と瀑、全く目もさむる許りで殆ど形容の辭を知らない。かくて息がつまるやうな緊張裏に十時閉會を告げた。場所の不便なるにも拘らず百餘名の來會者があつた。

○第三十四回小集會記事

大正十五年十一月廿八午後二時より麴町區紀尾井町清水谷皆香園に於て、鳥山幹事司會者として第三十四回小集會開催、左記講演ありたり。

一、日原川唐松谷迄 吉 澤 一 郎氏

秩父の多くの澤の中で當然探らる可くして不思議にもまだ取り残されてゐるものが十や十五はある、この日原川の上流などは其中の尤なるものである、夫が初めて氏によりて下られたのであつた

から、其講話が人の興味を惹いたのは無理のない事であつた。氏の取つた経路は雲取山の三角點から東北白岩山との最低鞍部に至り、そこから谷に下り込んで河身に沿うて歩く考であつた。長澤谷の落合までは大した困難もなく辿り着くことを得たが、其處から下流唐松谷の合流點迄は、兩岸高く絶壁をなし、河は瀑と淵の連續で餘程高廻りしなければ通れないといふ。唐松谷合流點以下は思ひかけず山葵作りの爲の道があつたので困難はない。雪取白岩間の鞍部を午前七時五十分に出發し、多少の休憩時間をも加へて日原へ着いたのは午後七時半であつた。さうだから十二時間を要した譯で唐松谷の落合まで正味七時間懸つたとの事である。この記行はいづれ本誌に掲載したいと思ふ。

二、瀧川谷とホラの貝 岩 永 信 雄氏

入川、瀧川、大洞の三は荒川上流の三大谷であつて、孰れも沿岸には林道が通じてゐるので、谷の様子は夫等を辿れば知ることを得るけれども、入川谷や大洞川の一部が河身を探られたのみで瀧

川谷は人の這入つた話を聞かない。前二者の例から推せば矢張り全部河身を辿られさうにもない。氏は天科の廣瀬庄太郎を連れて、廣川谷を遡り雁峠に出で、葡萄澤に沿うた道を下つて瀧川に入られた。入つて見ると果して豫想外に悪い谷で、せめて豆焼澤の出合までと思つても其處までどうしても行けず、終に左岸の林道に出て朽本に行かれたとの事であつた。序に豆焼澤は前年既に氏の探られたもので、小瀑布と淵の多い興味ある澤だとの話をされた。

ホラの貝は笛吹川の上流東澤の下部に在るもので、陸測五萬分の一の地圖でいへば東澤とある東の字と鶏冠谷の合流點との中央より少し西に寄つたあたりであらうと想はれる。鶏冠山の側には林道が通じてゐるが、其道は河身から百五十米以上も高い所を通つてゐるので、其道から下り込むことは出来ない。之を見るには鶏冠谷の合流點から二三町遡つた附近から右岸を攀ぢ、工合のよささうな所を選んで横へつりをして後にうまく其處へ下らなければならぬので、案内者が必要である。

大正四年五月中村、田部、木暮の三氏が此處へ下り込んで野營したのは眞に偶然であつたといへる。氏は矢張廣瀬庄太郎を連れて之を見物し更に其上流を探らうと企てたが、削つたやうに滑かな花崗岩の一枚岩から成り立つた雨樋に似た河道には、いくら工夫しても策の施しやうもないので、断念して歸られたといふ。

當日の出席者は磯貝藤太郎、神谷恭、吉澤一郎、田中菅雄、長谷川孝一、高畑良材、川口敏郎、本多友司、松井幹雄、仁藤信次、吉田竹志、大木宏、田部重治、山口成一、別宮貞俊、岡野徳之助、山崎和一、岩永信雄、織田信大、飯塚篤之助、渡邊漸、岡田喜一、吉田次男、神宮徳壽、山下一夫、野口末延、酒井忠一、大賀智、木暮理太郎、冠松次郎、鳥山悌成の三十一氏にして他に來會者九名あつた。

小集會終て後午後六時より同席にて有志晚餐會を開く、會費一圓五十錢、折詰に一人前酒一合の割にて、微醺纔に頬に上り、枵腹饜くに足らずといふ程度ではあつたが、例の如く話に花が咲いて

時の移るを知らず、出来ることなら其儘語り明したいといふ程であつた。出席者二十一名。

○會費値上に就て

本會の會費は大正九年度から現行の通りに改正されたのであるが、其時の幹事會に於ても五圓説が相當有力であつたのであるが、當時に於ては會計狀態が左程切迫しても居らなかつたので、現行の通りに決定したのであつた。然るに其後諸物價の騰貴は殆ど底止する所を知らずといふ有様であつた上に、本會の基礎を鞏固にする爲には、是非其基本金を作らなければならぬ必要があるもので、經費の支出に就ては非常の苦心を要した。従つて「山岳」の如きも頁數が減じ寫眞版が少くなるのも止むを得ない次第である。幸にして古い「山岳」の殘本が可なり賣れたので、尾瀬や秩父のやうな特別號を刊行する餘裕もあつたのであるが、殘本がさう無盡藏にある譯ではないから、今後あのやうなものを刊行しやうとすれば、如何しても會費を値上げするより外に方法がない。それ

で會費を値上げするに就ては、とうに發行さるべくして今迄遅れて居た一年度分の「山岳」を本年度分と共に本年内に發行して會計年度と「山岳」の「年」とを一致せしめ、(但し一冊位は或は場合によつて來年度の刊行になるかも知れぬ。)昭和三年即ち來年度から會費年金六圓(月額にすれば僅に五十錢)に値上げすることに決したのである。豫め其旨を諒知して戴きたい。

○新入會員紹介

大正十五年十一月七日の幹事會にて入會を許可され、正規の手續を経て、會員となられた方を左に紹介する。

會員章番號	九九七
同	九九八
同	九九九
同	一〇〇〇
同	一〇〇一
同	一〇〇二

同	一〇〇三
同	一〇〇四
同	一〇〇五

清

○會員章再交付

會員章紛失の届出に依り、規定に従ひて、左記會員に新番號を登録した。

一〇〇六 神戸市 セ、オ、パワース氏

従つて同氏の舊會員章番號八五四は無効となつた。

○會員の計報

會員鍛冶田仲里氏(會員章番號七八八)は過般逝去せられたる旨、同じく會員達清一氏から通知に接した。本會は鍛冶田氏に對し謹で哀悼の意を表し、達氏の好意を感謝す。

○會務報告

大正十五年十一月七日、芝區高輪南町鳥山幹事宅にて、午後五時より幹事會を開き、入會申込者の

詮衡を行つた。

出席幹事 高頭、鳥山、冠、別宮(委任)、木暮。

○交換及寄贈圖書目

ツ リ ス ト 第十四年六號第十五
 ステツブ 第四年第一號
 山 と ス キ 第六十七六十八號
 霧 の 旅 八年二十三號
 三高山岳部報告 第五號
 山 狂 第二號
 陸地測量部要覽 (大正十五年八月)
 キヤムピング 十二月號
 山 岳 會 報 第二卷第九號
 旅 第三卷、第十二號、
 第四卷一、二號
 陽光の積雪に及ぼす影響の理論
 東京アルカウ會會報 第七年一、二月號
 山 嶺 第六年一、二月號
 ペテスツリヤン 第八十八號

ツ リ ス ト ・ ビ
 ユーロロート・ビ
 サン・シヤイン
 旅行會
 山 と ス キ ー の 會
 霧 の 旅 會
 三高山岳部
 東京登山會
 陸地測量部
 ジヤパン・キヤ
 ンブ・クラアヤ
 日本醫科醫藥山
 岳智
 日本旅行協會
 加納 一郎氏
 東京アルカウ會
 東京野歩路會
 神戸徒歩會

山 岳

友 稜

第二十五號

第四號

第一號

日本岳友會

八高山岳部

神戸スキー俱樂部

The Mountaineer, Vol. XVIII. No. 12, 13, Vol. XIX. No. 1. 2.

Bird-Lore. Vol. XXVIII. No. 6.

La Montagne, 22^e Année No 195, 196.

The Prairie Club, Bulletin No. 160, 161, 162.

Trail and Timberline, No. 98, 99.

Rivista del Club Alpino Italiano, Anno XLV. Num. 9-10.

Natural History, Vol. XXVI. No. 5.

The Scottish Mountaineering Club Journal, Vol. 17, No. 102.

Revue Alpine, Vol 27. No. 3.

Die Alpen Les Alpes. Le Alpi II-N^o 10, 11, 12.

The Geographical Journal, Vol. LXVIII. No. 5, 6.

The Alpine Journal, Vol. XXXVIII. No. 233.

Butlleti Excursionista de Catalunya, Any

XXXVI, Num. 376, 377.

○本會規則拔萃(昭和二年二月改正)

第二條 本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス

第三條 本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌『山岳』ヲ發行ス、又

時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベシ

第五條 本會ハ會長ヲ戴カズ幹事若干名ヲ置キテ一切ノ會務ヲ處理セシム

第十條 本會會員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ

幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セララルモノトス

第十一條 正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所、姓名、年齡及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送付スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス(入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ)

第十二條 入會ノ許可ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス

第十三條 入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入金金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マルベシ

第十四條 正會員ハ會費年六圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付スベキモノトス

第十五條 正會員ニシテ一時ニ金百圓以上ヲ納付シタル者ハ爾後會員籍ヲ有スル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス(以下略)

現任幹事八名

藤島敏男

冠松次郎

木暮理太郎

高頭仁兵衛 鳥山悌成 別宮貞俊
横有恒(滯歐中) 沼井鐵太郎(在臺灣)

評議員十七名

小島久太 武田久吉 高野鷹藏

近藤茂吉 中村清太郎 三枝守博

辻本滿丸 田部重治 山川 默

及現任幹事八名

投稿規程

一、會員は勿論會員外の何人も投稿隨意のこと。

一、用紙は半紙又は半紙半枚大、天地左右をあけ、毎紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、毎紙同一行数のこと。

(但し原稿用紙は會計取扱所へ申越し次第直に御送りします)

一、。〔() 等は各一字畫宛とし、行を更むる時は一字下げのこと。

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして常字をなす時は、其旨を括弧内に明記す可きこと。

一、スケッチは複製の際誤記脱漏等の虞あるを以て、豫め本誌面に適せる大さに調製ありたきこと。

一、原稿は左記宛御送付のこと。

東京市本郷區駒込蓬萊町三一「山岳」編輯所

尙ほ編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと。

昭和二年三月十二日印刷
昭和二年三月十五日發行

【定價金壹圓貳拾錢】



發行兼編輯者

新潟縣三島郡深才村深澤

高頭仁兵衛

印刷者

東京市神田區美土代町二丁目一番地

島連太郎

印刷所

東京市神田區美土代町二丁目一番地

三秀舍

發行所

新潟縣三島郡深才村深澤

日本山岳會

東京市芝區高輪南町三十番地

日本山岳會計取扱所

振替口座東京四八二九番

東京市神田區表神保町

發賣所

東京堂

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXI

1927

No. 1